

2024 年 4 月

食料安全保障月報

(第 34 号)



令和 6 年 4 月 30 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報(生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等)について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2024年4月食料安全保障月報（第34号）

目次

概要編

I	2024年4月の主な動き	1
II	2024年4月の穀物等の国際価格の動向	5
III	2023/24年度の穀物需給（予測）のポイント	5
IV	2023/24年度の油糧種子需給（予測）のポイント	5
V	今月の注目情報「米国とブラジルの輸出競争」	6

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	1 2
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	1 3
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	1 4
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	1 6
5	食品小売価格の動向	2 0
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	2 1
7	FAO 食料価格指数	2 3

今月のコラム

	「ブラジル便り②：ブラジルの輸送インフラ」	2 4
--	-----------------------	-----

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	<米国> 2024/25年度の小麦の作付意向面積は前年度比4.2%減少	
	<カナダ> 2024/25年度の生産量は前年度比8.3%増の34.6百万トン	
	<豪州> 2023/24年度の輸出量はアジア向けの輸出が好調で0.5百万トン上方修正	
	<EU27> 2023/24年度の輸入量は史上最高の13.5百万トン	
	<中国> 2024/25年度の冬小麦の生育は概ね順調	
	<ロシア> 2023/24年度の輸出量は史上最高の52.0百万トン	
	<ウクライナ> 2023/24年度の輸出量は前月予測から1.5百万トン上方修正	
2	とうもろこし	9
	<米国> 2024/25年度の作付意向面積は、前年度より4.9%減	
	<ブラジル> 2023/24年度の実産量は高温乾燥により減少	
	<アルゼンチン> 2023/24年度の実産量は、前年度から回復する見通し	
	<中国> 単収及び収穫面積の増加を受け、生産量は史上最高	
	<ウクライナ> 2023/24年度の実産量は、侵攻前の2021/22年度より29.9%減	
3	コメ	1 5
	<米国> 2024/25年度の作付面積はわずかに増加の見込み	

- <インド> ラビ米の収穫が開始
- <中国> 東部から南部の早稲の生育は平年より早く良好
- <タイ> 乾季米は灌漑用水不足や高温等から減産見込み
- <ベトナム> 南部メコンデルタ地域の冬春作(乾季米)は海水侵入で生産量減少

II 油糧種子

- 大豆・・ 21
- <米国> 2024/25年度の作付意向面積は、前年度より3.5%増
- <ブラジル> 2023/24年度の生産量(CONAB)は前年度より5.2%減
- <アルゼンチン> 2023/24年度の生産量は、前年度より倍増
- <中国> 2023/24年度の生産量・消費量・輸入量は史上最高
- <カナダ> 2024/25年度の生産量は6.9百万トンの見込み(AAFC)

- (参考1) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について(2023/24年度)・・・ 27
- (参考2) 単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
- (参考3) 各国のクロップカレンダー一覧(主要品目毎)・・・・・・・・ 28

今月の特別分析トピック

「我が国と世界の油脂をめぐる動向」

【利用上の注意】

表紙写真：ブラジルの順調に生長するとうもろこし(マトグロッソ州 2024年3月31日) 天候に恵まれ作柄は良好。

(概要編)

I 2024年4月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の2023/24年度の作況について、北半球では収穫が終了した一方、南半球では生育期から収穫期を迎えている。同時に、北半球では2024/25年度の春作物作付けが始まっている。

品目別にみると、4月の米国農務省（USDA）の需給報告によれば、小麦については、前年度高温乾燥の影響を受けたインドや米国等で増産となるものの、前年度史上最高の豊作だった豪州等で減産となり、世界の生産量は前年度を下回る見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、2022年3月に過去最高を更新した小麦の国際相場は侵攻時の水準を下回ったものの、ウクライナの穀物輸出に関する4者合意については2023年7月にロシアが離脱し停止。現在、黒海の臨時回廊からの輸出が順調に機能しているものの、EU経由での代替輸出の進捗も含め注視が必要。

とうもろこしについては、ブラジル等で減産見通しであるものの、米国や中国で史上最高の生産量となり、世界の生産量は前年度を上回る見通し。大豆については、ブラジルや米国で減産見通しとなるものの、今後収穫期を迎えるアルゼンチンで増産見通しとなり、世界全体の生産量は前年度を上回る見通し。いずれの品目も、旺盛な消費により期末在庫は依然としてタイトな状況の中で、引き続き注視する必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数については、植物油の上昇等により、2月の117.0から、3月(最新値)は118.3に上昇（参考：2023年3月128.2、2022年3月159.7、2021年2月119.2、2020年2月95.2）。海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、直近5カ年の平均値と同程度の水準で推移。

早期注意段階の継続について

緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2021年7月に、主要輸入農産物の国際価格や海上運賃の上昇、国際的な物流の遅れ等の当時の状況を踏まえて適用。2024年4月も引き続き適用した一方で、主要穀物等の国際相場や海上運賃についてはここ最近下落傾向で推移しており、引き続きその動向に留意。

【参考】早期注意段階について（農林水産省HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/ampo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

米国農務省（USDA）の4月見通しによれば、2023/24年度の小麦は収穫が終了し、生産量は前月から変更なく2,340万トン（対前年度比9%増）。とうもろこしも収穫が終了し、生産量は前月から変更なく2,950万トン（同9%増）。輸出量は黒海沿岸を通過する臨時回廊からの輸出が増加していることもあり、小麦は前月から上方修正され1,750万トン（同2%増）、とうもろこしは前月から変更なく2,450万トン（同10%減）（参考1）。

ウクライナ農業政策食料省によれば、2024年産の春作物の作付けが開始された。4月11日時点で春小麦は17万4千ヘクタール作付けされ、作付進捗率は71%（前年同期75%）、とうもろこしは12万ヘクタール作付けされ、作付進捗率は3%（前年同期1%）となっている。

臨時回廊からの輸出増

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（黒海穀物イニシアティブ）により、穀物等3,283万トンが輸出されたが、2023年7月17日にロシアの離脱で履行が停止。

一方、代替輸出ルートとして、ルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する臨時回廊からの輸出や、運河等を利用しルーマニアのコンスタンツァ港などを経由した輸出が行われている。代替輸出ルートのうち、EU域内を経由した輸出量は減少傾向にある一方、臨時回廊からの輸出量は前年10月以降伸びているが、ロシアの侵攻や中東情勢の影響等について今後とも注視が必要（参考2）。

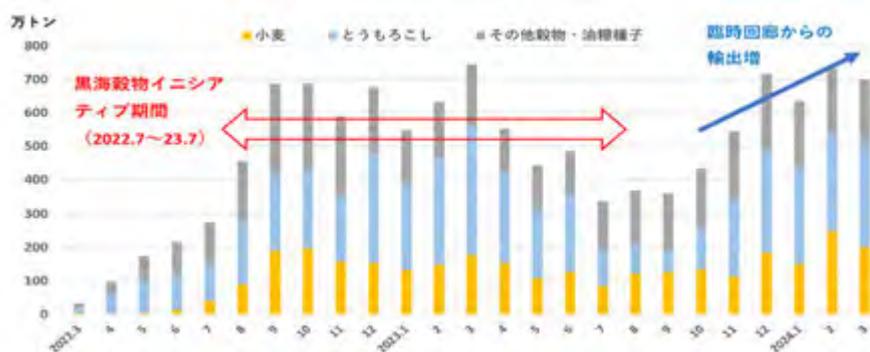
（参考1）小麦ととうもろこしの生産量(左)、輸出量(右)の推移（年度）



出典：米国農務省「PS&D」（2024.4）

注：その他は他の穀物（大麦等）

（参考2）ウクライナの輸出量の推移（月毎）（2022年3月～2024年3月）



出典：現地調査会社調べ

注：その他はひまわり油・大麦など。

1 ウクライナ：臨時回廊からの輸出が増加

前年7月の「黒海穀物イニシアティブ」の停止後、ウクライナは、ルーマニアとの国境に面したドナウ川沿いの港からの出荷や、EU 経由の陸路等による代替輸出ルートへの拡充を試みてきた。こうした中、ロシアの攻撃がドナウ川沿いの穀物輸出施設まで及んでいるほか、鉄道の軌道幅がウクライナと EU で異なる等のインフラの制約も課題となっている。このため、ウクライナはルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する新ルートを IMO(国際海事機関)に通報し、前年8月以降「臨時回廊」の運用が開始された。

ウクライナの穀物・油糧種子の輸出に関し、「臨時回廊」を中心とした港湾からの輸出货量（一部ドナウ水路を利用したルーマニア経由の輸出含む）は、前年7～9月に毎月230万トン前後で推移していたが、その後徐々に増加し、本年2月には611万トンまで回復し、輸送手段別で8割以上を占め、シェアの拡大が進んでいる。

EU 向け輸出については、4月8日、欧州議会と欧州理事会は、EU へのウクライナ産農産物に対する関税の一時停止（2022年6月に導入）を、2025年6月まで延長するとともに、EU への輸入量が2021年下半年から2023年までの平均水準を超えた場合には関税を再賦課するセーフガード措置を認める暫定合意に達した。セーフガードの対象品目は、鶏肉、卵、砂糖、オーツ麦、ひき割り穀物、とうもろこし及び蜂蜜。

ポーランド、スロバキア及びハンガリーでは農業団体やトラック運転手の反発が強く、前年11月6日以降、国境検問所の封鎖等の抗議活動が断続的に行われており、ポーランドでは現在でも検問所の国境封鎖が続いている。一方、ウクライナ農業政策食糧省によれば、ウクライナとスロバキアは、農産物の貿易問題について5月に協議することで合意した。

※黒海穀物イニシアティブ停止後、代替輸出ルートとして、以下に掲げるものが実施又は検討。

- 1 臨時回廊 ウクライナのオデーサ港など黒海港湾から、ルーマニア・ブルガリア沖経由で輸出
- 2 トラックや鉄道輸送、ドナウ川の運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港経由で輸出
⇒ルーマニアのブカレストからウクライナ国境まで高速道路建設中。
コンスタンツァ港で従来施設を改修しウクライナ産農産物専用ふ頭の運用が3月以降予定。
- 3 ポーランドを経由し、バルト海沿いのグダニスク港、ラトビアのリガ港等経由で輸出
⇒グダニスク港をウクライナ産穀物の輸出向け港湾として整備することに合意。
- 4 クロアチアを経由し、アドリア海から輸出



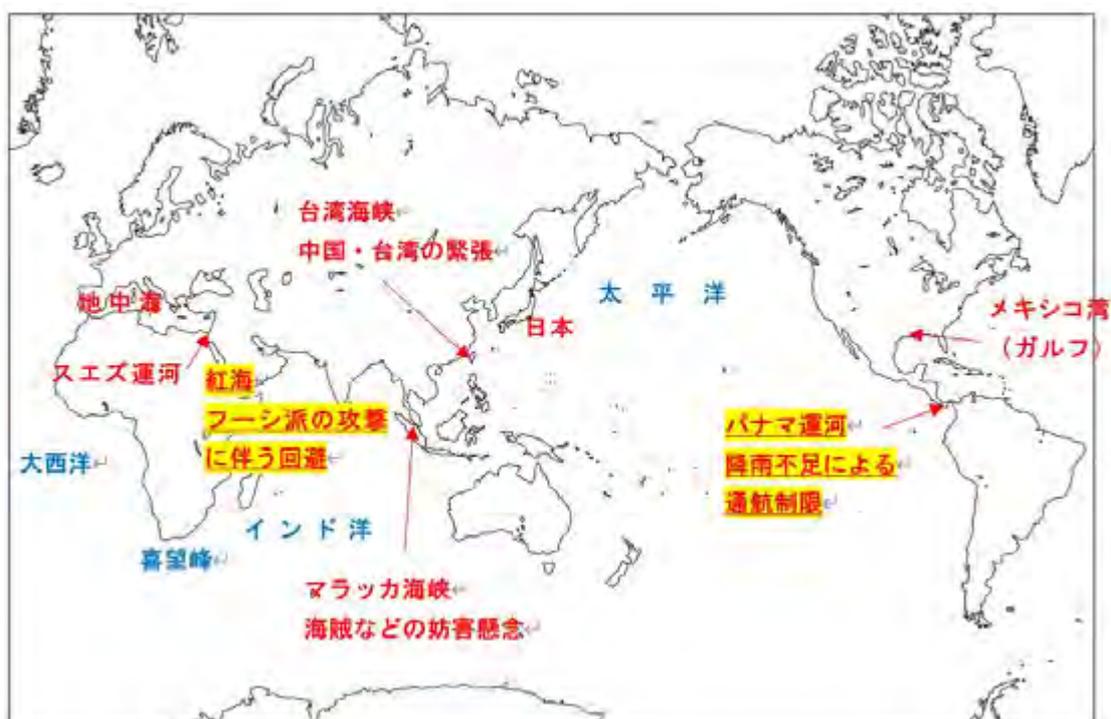
(出典：France Agrimer 他より)

2 中東：紅海における船舶航行の安全確保が困難なため回避

イスラエルとハマスの戦闘が継続する中、報道等によれば、2023年12月以降、イエメンの親イラン武装組織フーシ派が、地中海とインド洋をスエズ運河経由で結ぶ紅海を航行する商船を攻撃しており、運送各社は貨物輸送をアフリカ喜望峰経由等に迂回させている。また、パナマ運河については、降雨不足による水位低下に伴う通航制限が継続しているが、2024年4月15日、パナマ運河庁は、3月中旬以降のまとまった降雨により水不足が一定程度緩和したことを受け、16日から通行枠を増加すると表明した。5月7～15日には1日24隻、同16日からは31隻、6月1日には32隻と順次制限を緩和する予定である。

我が国の穀物輸入に関し、小麦は主に米国・カナダ太平洋岸及び豪州から輸入しており、上記2つのルートを通過しない。また、ブラジル産穀物等の多くを喜望峰経由で輸入している。

一方、米国産のとうもろこし及び大豆は、通常、メキシコ湾（ガルフ）からパナマ運河経由で輸入している場合が多い中、最近のパナマ運河の水位低下により地中海→スエズ運河→紅海→インド洋経由のルートを選択したケースもあったが、最近の中東情勢を受け、再度、喜望峰や米国西海岸（PNW）経由に切り替えざる得なかったとみられる。喜望峰経由の場合、ガルフからパナマ運河経由で輸入する場合と比較して2週間から3週間程度日数が嵩む。また、喜望峰経由のルートは、航海中の気温が上下することによる品質悪化がリスクとなっている。米国西海岸（PNW）の港からとうもろこしを積み込む動きも一部に見られる。引き続き、今後の動向について注視が必要である。



3 米国：とうもろこしの作付面積が減少し、大豆の作付面積が増加

米国農務省は3月28日に作付意向面積報告を公表した。本報告は、米国農務省が3月上旬に農家に対し作付意向を調査し、取りまとめたものである。

2024年のとうもろこしの作付意向面積は、前年より4.9%減少し3千600万ヘクタールとなる見込み。イリノイ州、アイオワ州等中西部の主産地で軒並み減少がみられ、48州のうち38州で前年から減少又は横ばいと予想される。

一方、大豆は、前年より3.5%増加し、3千500万ヘクタールとなる見込み。29州のうち24州で前年から増加又は横ばいと予想される。2023/24年度は米国産とうもろこしが史上最高の豊作となった一方、大豆が減産となったことから、現在の相場は大豆に優位であり、とうもろこしから大豆に作付けがシフトしていると見られる。

小麦については、前年より4.2%減少し、1千900万ヘクタールとなる見込み。米国の小麦作付の7割を占める冬小麦の作付面積が、市場価格の低下を受け7%減少し、1千400万ヘクタールとなったことが大きく影響した。デュラムを除く春小麦は前年より1%増加し、460万ヘクタールとなる見込み。デュラム小麦は前年より21%増加し、82万ヘクタールとなる見込み。これは、米国産デュラム小麦の価格がフランス産やカナダ産の価格に比べ高い水準であることが要因とみられる。

4 南アフリカ：エルニーニョの影響によりとうもろこしの生産量は減少

南アフリカは世界第11位のとうもろこし生産国である。我が国との関係では、南アフリカから日本へ輸出される農林水産物の第1位がとうもろこしとなっている。

米国農務省「世界農業生産(2024.4.11)」によれば、南アフリカの2023/24年度のとうもろこし生産量は1,400万トンの見込み。前月から150万トン下方修正され、前年から310万トンの減少となった。これは5年平均より10%低い水準。収穫面積は300万ヘクタールの見込みで、前年から2%増加した。単収は4.67トン/ヘクタールの見込みで、前月比10%減、前年比20%減、5年平均12%減となった。単収が平年より低いのは、エルニーニョによる乾燥と、2月と3月上旬に襲った熱波により、登熟期の初期段階にあった作物の作柄が悪化したためである。

また、2023/24年度の大豆生産量は182万トンの見込み。前月から30万トン下方修正され、前年度から90万トンの減少となった。これは5年平均より2%低い水準。作付面積は過去最高の115万ヘクタールの見込みで、ほぼ前年並みとなった。単収は1.58トン/ヘクタールの見込みで、前月比17%減、前年比34%減、5年平均25%減となった。単収が平年より大幅に低いのは、とうもろこし同様、エルニーニョ及び2月の熱波により着莢期の初期段階にあった作物の作柄が悪化したためである。

南アフリカの大豆作付面積は過去20年間で100万ヘクタール近く増加している。これは、生産者が大豆をとうもろこしとの輪作作物として利用することの利点に気づいたことや、改良された大豆品種が同国の気候条件の下で適応し始めたことによる。さらに、近年では大豆加工工場も増加しているが、食肉需要の増加に伴う大豆かすの需要増により投資家の建設意欲が高まったためである。また、本来、エルニーニョによる干ばつが予想される場合、乾燥に強いヒマワリ種子の作付けを増やすのが一般的だが、ヒマワリ種子より大豆の方が価格的に有利であることから、生産者は大豆の作付けを増やす傾向にある。

なお、米国農務省「PS&D」によれば、2023/24年度のとうもろこし輸出量は、生産量の減少に伴い前年度より150万トン減少し、200万トンとなる見込み。大豆輸出量は、前年度より49万トン減少し、15万トンとなる見込み。

II 2024年4月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、3月末、200ドル/トン台前半で推移。4月に入り、黒海地域の緊迫化による供給不安等から、200ドル/トン台後半に値を上げた。その後、米国の期末在庫が上方修正されたことや主要生産地の降雨予報等により値を下げ、4月中旬現在、190ドル/トン台後半で推移。

とうもろこしは、3月末、170ドル/トン台半ばで推移。4月に入り、米中西部での生産に適した天候が今春の作付け拡大につながるの見通しから、160ドル/トン台後半まで下落。その後、米国の堅調な輸出検証高を受けて170ドル/トン台前半まで上昇したものの、米国農務省の穀物需給報告での期末在庫量が市場予想を上回ったことから下落し、4月中旬現在、160ドル/トン台後半で推移。

コメは、3月末、610ドル/トン台半ばで推移。4月に入り、乾季米の市場への流入が続いていることから、一時590ドル/トン台後半まで値を下げたものの、インドネシア政府が30万トンの入札を公示したことから等から値を上げ、4月上旬現在、610ドル/トン台前半で推移。

大豆は、3月末、430ドル/トン台後半で推移。4月に入り、南米産の供給増を受けた季節的な米国輸出需要の鈍化から430ドル/トン台前半に下落。その後、原油上昇や米国の好調な週間輸出成約高を受けて上昇したものの、原油下落やブラジル産との輸出競争懸念から下落し、4月中旬現在、420ドル/トン台前半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、コメはタイ国家貿易委員会価格

III 2023/24年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前年度より2.1%増の28.08億トン。消費量は、前年度より1.9%増の28.14億トンとなり、3年連続で生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫量は前年度より減少し、期末在庫率は前年度を下回り27.5%となる見込み（資料2参照）。

生産量は、前年度より、小麦で減少も、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.08億トンの見込み。

消費量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.14億トンの見込み。

貿易量は、前年度より、小麦、コメで減少も、とうもろこしで増加し、穀物全体で増加し、5.08億トンの見込み。

期末在庫量は、7.75億トンと前年度より減少、期末在庫率は、前年度より減少する見込み。

(注：数値は4月のUSDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

IV 2023/24年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り6.59億トン。消費量は前年度を上回り6.43億トンとなり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率は前年度を上回る20.3%となる見込み。

(注：数値は4月のUSDA「Oilseeds: World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報: 米国とブラジルの輸出競争

2023/24年度のブラジルの生産量は、エルニーニョの影響によりとうもろこし、大豆ともに減少した。一方、米国の生産量は、大豆は減少となったものの、とうもろこしは過去最高を記録した。ブラジルは、大豆は世界第1位の輸出国の座を維持したが、とうもろこしは米国にその座を譲った。両国の生産・輸出等をめぐる動向に加え、輸入先の多角化を図る中国の輸入動向と併せまとめた。

注：文中の「2023/24年度」等は穀物年度で、ブラジルのとうもろこしは2024年3月から2024年2月、大豆は2023年10月から2024年9月。米国のとうもろこし及び大豆は2023年9月から2024年8月。国や作物によって異なる(品目別需給編 P.27 参照)。

1 ブラジルのとうもろこし・大豆の生産・輸出動向

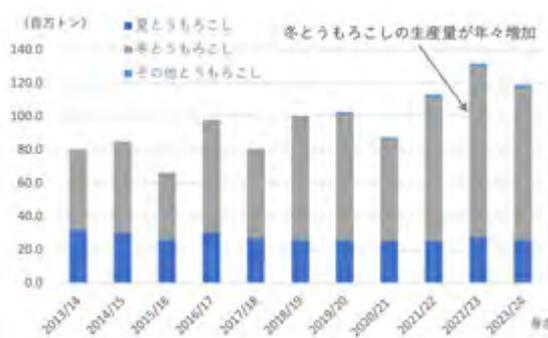
(1) 生産動向

ブラジル穀物供給公社（CONAB）の穀物レポート（2024.4.11）によれば、2023/24年度のとうもろこしの生産量は1億1,096万トンと、前年度より15.9%減少する見込み。これは、大豆と比べ収益性が低いとうもろこしの収穫面積が前年度より8.5%減少することに加え、エルニーニョ現象による異常気象により、生育初期に南部での多雨、中西部での高温乾燥といった悪条件に見舞われ、単収が前年度より8.1%低下したことによる。

現在、夏とうもろこしは、収穫作業が進展しており、4月8日時点の収穫進捗率は51%（前年同期48%）。冬とうもろこしは、大豆収穫後の2月以降に作付けが開始され、4月8日時点の作付進捗率は99.5%（前年同期93%）とほぼ終了した。冬とうもろこしの最大生産州である中西部のマトグロッソ州等では、作物は順調に生育している。一方、マトグロッソ・ド・スル州及びパラナ州の一部地域では、3月の降雨不足により作柄の悪化が懸念されている。

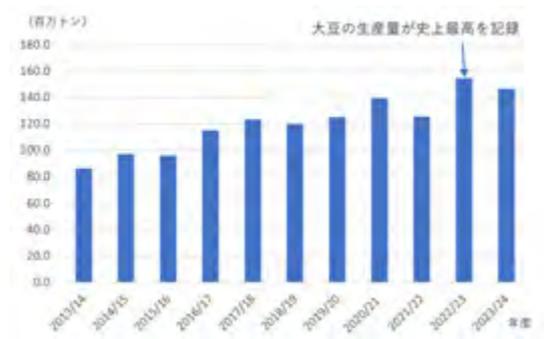
2023/24年度の大豆の生産量は1億4,652万トンと、前年度より5.2%減少する見込み。これは、とうもろこしから大豆に作付けがシフトしたことにより収穫面積が前年度より2.6%増加したものの、主産地の中西部等でエルニーニョ現象による降雨不足や高温などにより単収が前年度より7.7%減少したことによる。現在、すべての産地で収穫作業が進展している。4月8日時点の収穫進捗率は76.4%（前年同期75%）。最大産地のマトグロッソ州では97.8%とほぼ終了した。

図1 ブラジルのとうもろこし生産量の推移



出典：Conab 穀物レポート（2024.4.11）による

図2 ブラジルの大豆生産量の推移



出典：Conab 穀物レポート（2024.4.11）による

(2) 輸出動向

米国農務省（USDA）によれば、ブラジルは、2022/23 年度、とうもろこし輸出量が 5,426 万トンと、米国を抜き世界第 1 位の輸出国となった。作付面積の増加及び天候に恵まれたことから過去最高の豊作となったことに加え、乾燥の影響を受けた米国及びアルゼンチンの減産や、ロシアの侵攻を受けたウクライナの輸出の制約などが要因となった。一転、ブラジルの 2023/24 年度のとうもろこし輸出量は 5,200 万トンと、前年度から 4.2%減少し、米国に次ぐ世界第 2 位の輸出国に後退する見込み。米国とアルゼンチンの豊作を背景に国際市場での供給量が増加すること等が要因とみられる。

大豆については、ブラジルは 2012/13 年度以降、世界第 1 位の輸出国である。2023/24 年度の大豆輸出量は 1 億 300 万トンと、前年度より減産するにも関わらず、高い価格競争力と中国向けの輸出増から過去最高を記録し、引き続き世界第 1 位の座を維持する見通し。

2 米国のとうもろこし・大豆の生産・輸出動向

(1) 生産動向

USDA の 4 月需給見通しによれば、米国の 2023/24 年度のとうもろこしの生産量は、前年度より 12.4%増加し過去最高の 3 億 8,969 万トンとなった。これは、天候に恵まれたことを受け過去最高の単収となったことに加え、肥料価格の下落等を受け、大豆等と比べ肥料投入量の多いとうもろこしへ作付けが回帰し、収穫面積が 9.9%増加したことが背景にあるとみられる。

2024/25 年度のとうもろこしの生産量は、USDA が農業アウトルックフォーラムにて公表した資料（2024 年 2 月）によれば、作付面積は 3,683 万ヘクタールに減少するものの、単収が 11.36 トン/ヘクタールと前年度より上昇することから、生産量は 3 億 8,203 万トンと前年度より減少するも、史上第 3 位に相当する高水準となる見通し。

現在、2024/25 年度のとうもろこしの作付作業が始まっている。主産地の中西部では全般的に作付けに好ましい天候に恵まれている。USDA 「Crop progress (2024.4.15)」によれば、主産地 18 州の作付進捗率は 6%。過去 5 年平均（5%）とほぼ同水準となっている。

2023/24 年度の大豆の生産量は、前年度より 2.5%減少し 1 億 1,334 万トンとなった。天候に恵まれ単収が上昇したものの、肥料価格の下落に伴い、とうもろこし等へ作付けがシフトし、収穫面積が 4.4%減少したことが要因とみられる。

図 3 米国・ブラジルのとうもろこし輸出量の推移



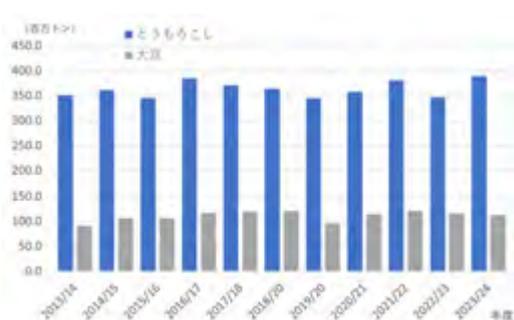
出典：米国農務省「PS&D」(2024.4) による

図 4 米国・ブラジルの大豆輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2024.4) による

図 5 米国のとうもろこし・大豆生産量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2024.4) による

2024/25 年度の生産量は、農業アウトLOOKフォーラムによれば、過去最高の1億 2,261 万トンとなる見通し。作付面積は 3,541 万ヘクタールと前年より増加し、単収も 3.50 トン/ヘクタールと前年度より上昇することによる。USDA 「Crop progress」 (2024.4.15) によれば、主産地 18 州の作付進捗率は 3%。過去 5 年平均 (1%) を上回っている。

(2) 輸出動向

USDA によれば、米国の 2023/24 年度のとうもろこしの輸出量は 5,334 万トンと、不作だった前年度より生産量が大きく増加することから、前年度より 26.4%増加する見込み。前年度にブラジルに譲った輸出国世界第 1 位の座を奪還する見通しである。

2023/24 年度の大豆の輸出量は 4,627 万トンと、とうもろこしへの作付けシフトに伴う生産量の減少に加え、ジェット燃料等のバイオ燃料需要の増加により国内需要量が過去最高となる見通しを受け、前年度より 14.6%減少する見込み。2012/13 年度に輸出国世界第 1 位の座をブラジルに譲り渡して以来、米国とブラジルとの輸出量の差は年々拡大しており、2023/24 年度では、ブラジルの輸出量は米国の 2 倍以上となっている。

3 中国の輸入動向と米国の価格競争力

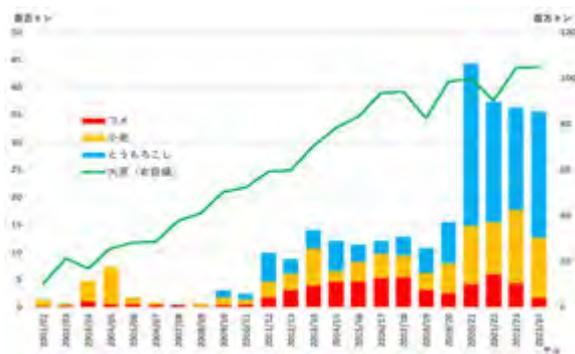
(1) 輸入動向

USDA によれば、中国のとうもろこしの輸入量は、2009/10 年度以降 100 万トンから 750 万トンの範囲で推移。こうした中、豚肉生産が増加した 2020/21 年度以降、急激に増加し、直近 4 年間は 2,000 万トン前後で推移。世界第 1 位のとうもろこし輸入国となった。

中国は、従来から主に米国産及びウクライナ産とうもろこしを輸入してきたが、2022 年 2 月のロシアによるウクライナ侵攻を受け、同年 11 月からブラジル産の輸入を開始した。中国海関統計によれば、2023 年のブラジルからのとうもろこし輸入量は 1,281 万トン。米国からの輸入量 714 万トンを大きく引き離し、ブラジルが第 1 位の輸入先国となっている。

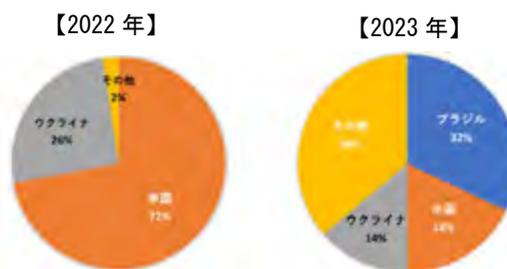
また、中国の大豆の輸入量は、2000 年以降 2017/18 年度まで概ね右肩上がり増加してきた。2018/19 年度はアフリカ豚熱発生の影響、2021/22 年度は新型コロナによる景気低迷により、輸入需要が一時減退したものの、その後豚肉生産の回復に伴い、直近 5 年間の大豆輸入量は 1 億トン前後で推移している。2023/24 年度の輸入量は 1 億 500 万トンとほぼ前年並みとなっている。このうち、中国海関統計によれば、2023 年のブラジルからの大豆輸入量は 6,993 万トン。米国からの輸入量 2,374 万トンを大きく引き離し、ブラジルが第 1 位の輸入先国となっている。

図 6 中国の主要穀物・大豆輸入量の推移



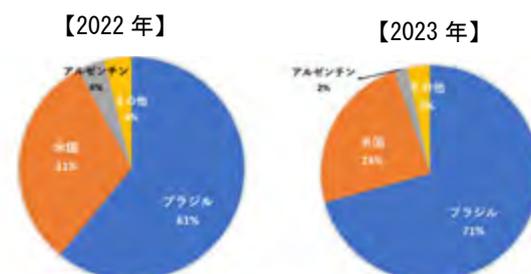
出典：米国農務省「PS&D」(2024.4) による

図 7 中国のとうもろこしの国別輸入シェア



出典：中国海関統計

図 8 中国の大豆の国別輸入シェア



出典：中国海関統計

中国は、米中対立の深刻化や、ロシアのウクライナ侵攻による食料価格の高騰を背景に、穀物の国内生産を拡大し、食料の輸入依存の増加に歯止めをかけ、輸入先国を多角化する政策を進めている。大豆輸入についても現在、米国からブラジルに大きくシフトしており、全輸入量の半分以上をブラジルから輸入している。とうもろこし輸入については、ロシアのウクライナ侵攻により不安定化したウクライナの代替として、2023年、ブラジルや南アフリカから輸入している。

(2) 米国の価格競争力

とうもろこしについては、2023年3月以降、2023/24年産が史上最高の豊作となったブラジル産の供給増に伴い価格が低下傾向であることに加え、2023年11月以降は同じく2023/24年産が史上最高となった米国産の流入に伴い、とうもろこし価格は低下傾向で推移している。

USDA「Grain: World Markets and Trade」(2024.4.11)によれば、4月8日現在、とうもろこしの輸出価格(FOB)は、米国産193ドル/トンに対してブラジル産は199ドル/トンと、米国産が相対的に安価となっている。一般的に、米国産とうもろこしの輸出の最盛期を迎える11月以降は米国産の価格が優位となり、ブラジル産冬トウモロコシ(輸出の大部分を占める)の輸出の最盛期を迎える6月以降はブラジル産の価格が優位となる傾向にある。

また、USDA「Oilseeds: World Markets and Trade」(2024.4.11)によれば、4月5日現在、大豆の輸出価格は、米国産457ドル/トン、ブラジル産433ドル/トンと、ブラジル産の価格競争力が高い状況。

ブラジル産大豆は収穫期の終盤に差し掛かっており、現在、輸出の最盛期となっていることも一因とみられるものの、1月以降、2023/24年産のブラジル産大豆が、史上最高を記録した前年度に引き続き豊作となったことに加え、2023/24年産の米国産大豆の収穫面積が減少したことにより、ブラジル産が価格競争力を有する状況が続いている。

なお、為替のドル高傾向も米国産の輸出に不利に働いている。米ドルは昨年末より対ブラジルリアルで上昇基調で推移しており、4月下旬時点で1ドル=5.2リアル前後と、前年末と比較し6%ほどドル高・リアル安の水準で推移している。

4 まとめ

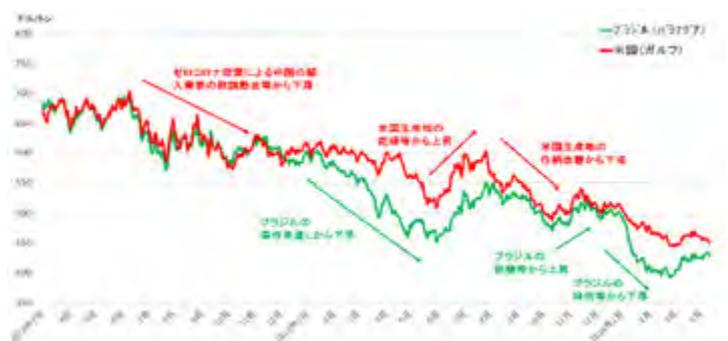
とうもろこし及び大豆の主要輸出国であるブラジル、米国、アルゼンチン、ウクライナ等においては、2023/24年度の生産が概ね豊作基調の中、米国とブラジルは激しい価格競争を繰り広げている。

図9 とうもろこしの輸出価格(FOB)の推移



出典：IGCのデータを元に農林水産省にて作成

図10 大豆の輸出価格(FOB)の推移



出典：IGCのデータを元に農林水産省にて作成

2023/24 年度のブラジル産とうもろこし・大豆は、史上最高の生産量を記録した昨年度より生産量が減少するものの、2年連続で高水準の生産量を維持しており、価格競争力を有している。一方、2023/24 年度の米国産とうもろこしは、過去最高の豊作となり、ブラジル産と同程度の価格水準となっているものの、米国産大豆は収穫面積の減少に伴い、ブラジル産と比較して割高な輸出価格が続いている状況であり、為替のドル高傾向は米国産の輸出に不利に働いている。

また、海運の面でも、米国産とうもろこし及び大豆は、前年8月以降、主要な輸出航路であるパナマ運河で降雨不足による水位低下に伴い通航制限が実施されていることから、喜望峰経由等に迂回せざるを得ない状況となっており、航行日数の増加による海上輸送コストの上昇が米国産輸出の足かせとなっている。一方、ブラジル産は従前より主に喜望峰経由でアジア向けに輸出されており、輸送コストの影響は軽微とみられる。

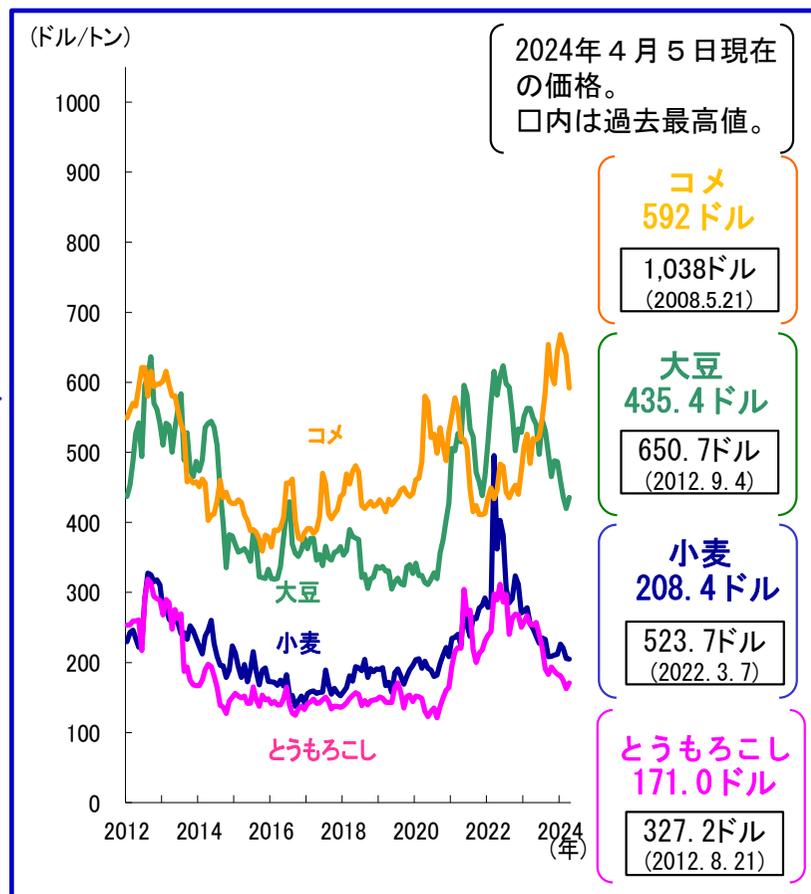
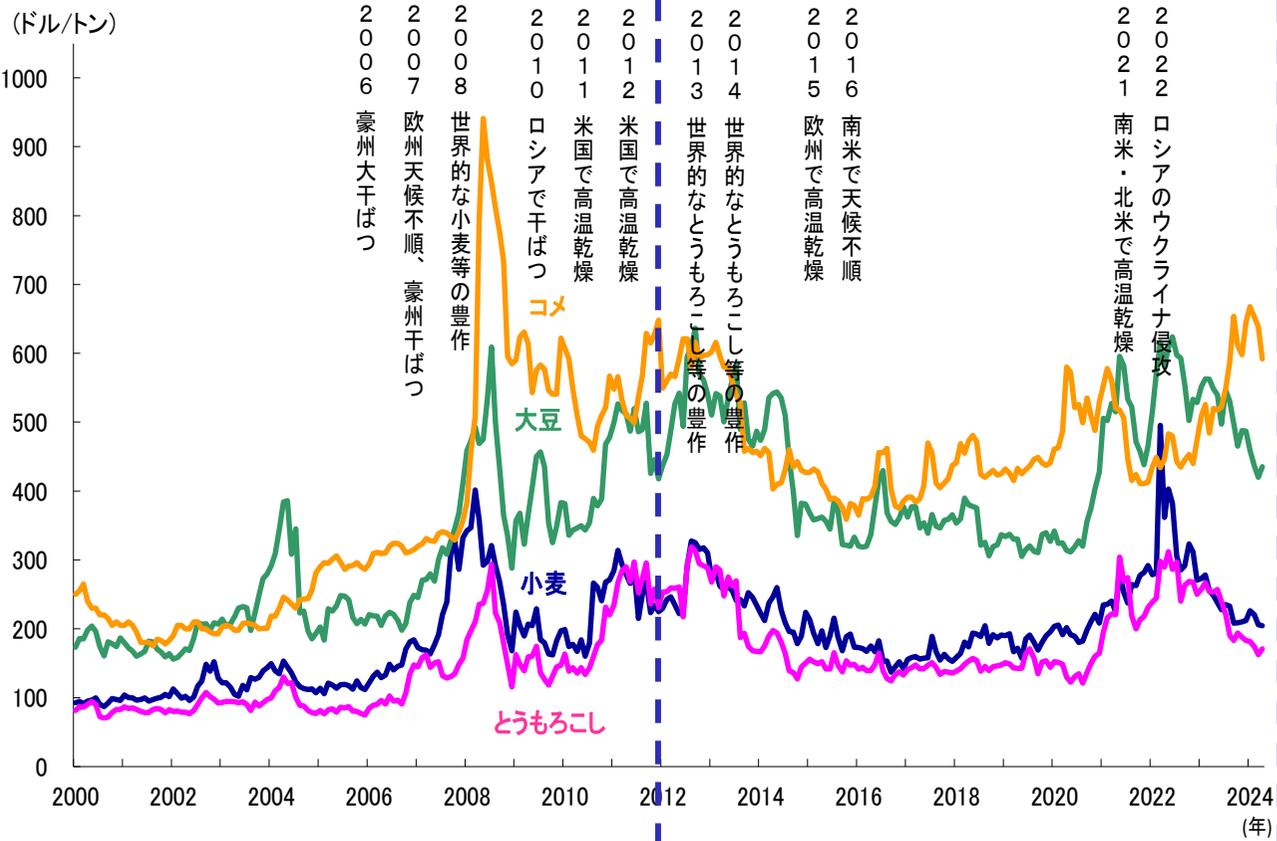
さらに、中国は、食料安全保障重視へ舵を切っており、穀物の国内生産の拡大を目指すとともに、輸入先国の多角化を進めている。とうもろこし、大豆については、米国産から安価なブラジル産に輸入をシフトしている。

このように、米国にとって種々厳しい競争環境が続いているが、4月中旬以降は、パナマ運河の水位上昇により通行枠が順次増加していく見通しがあり、また、2024/25 年産の米国作付意向面積調査の結果によれば、大豆の作付面積が増加するとみられており、今後の天候次第ではあるものの、大豆が増産となった場合、米国が価格競争力を一定程度取り戻す可能性も考えられる。2024/25 年度も米国及びブラジルの生産・輸出動向から目が離せない。

資料 1 穀物等の国際価格の動向 (ドル/トン)

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、4者協議による黒海からの一時的な輸出再開などもあり侵攻前の水準まで低下。一方で、とうもろこし、大豆はウクライナ侵攻時の高騰から低下も、南米の乾燥等から侵攻前と比較し依然として高水準。コメは、2013年以降低下で推移も、2022年9月以降、インドの輸出規制導入と強化、インドネシアのエルニーニョによる減産を受けた需要増等から上昇。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向

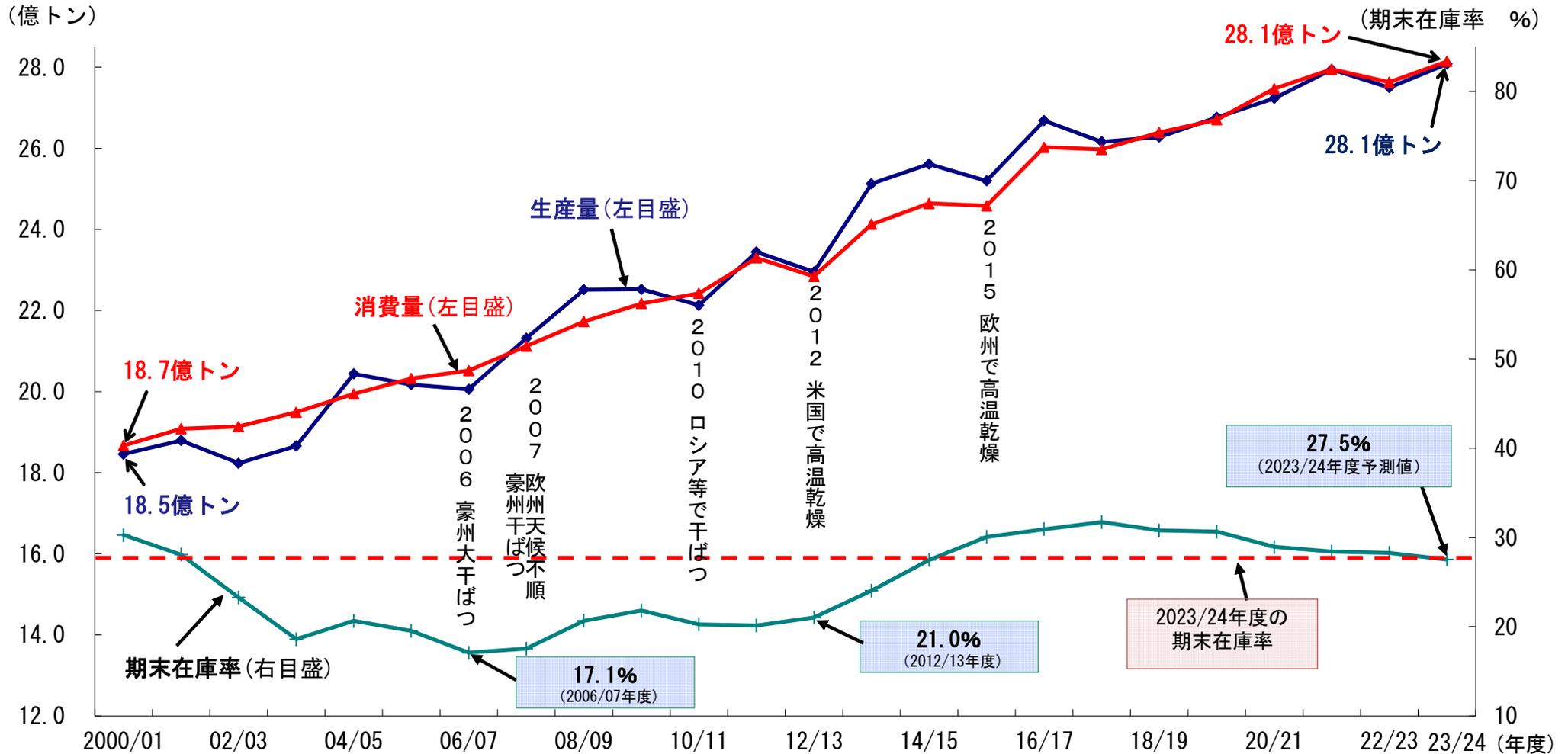


注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格(セツルメント)である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。
注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2023/24年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2023/24年度の期末在庫率は、消費量が生産量を上回り、前年度より減少し、27.5%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

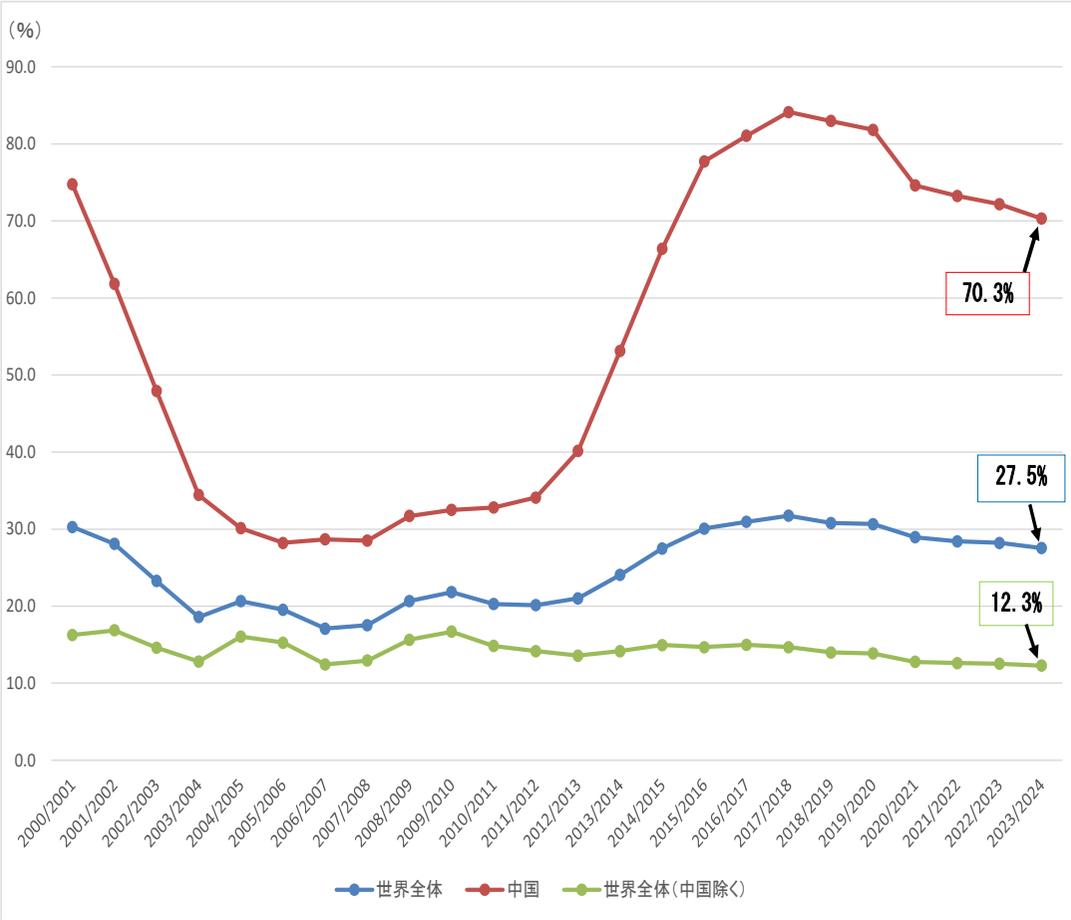


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(April 2024)、「PS&D」

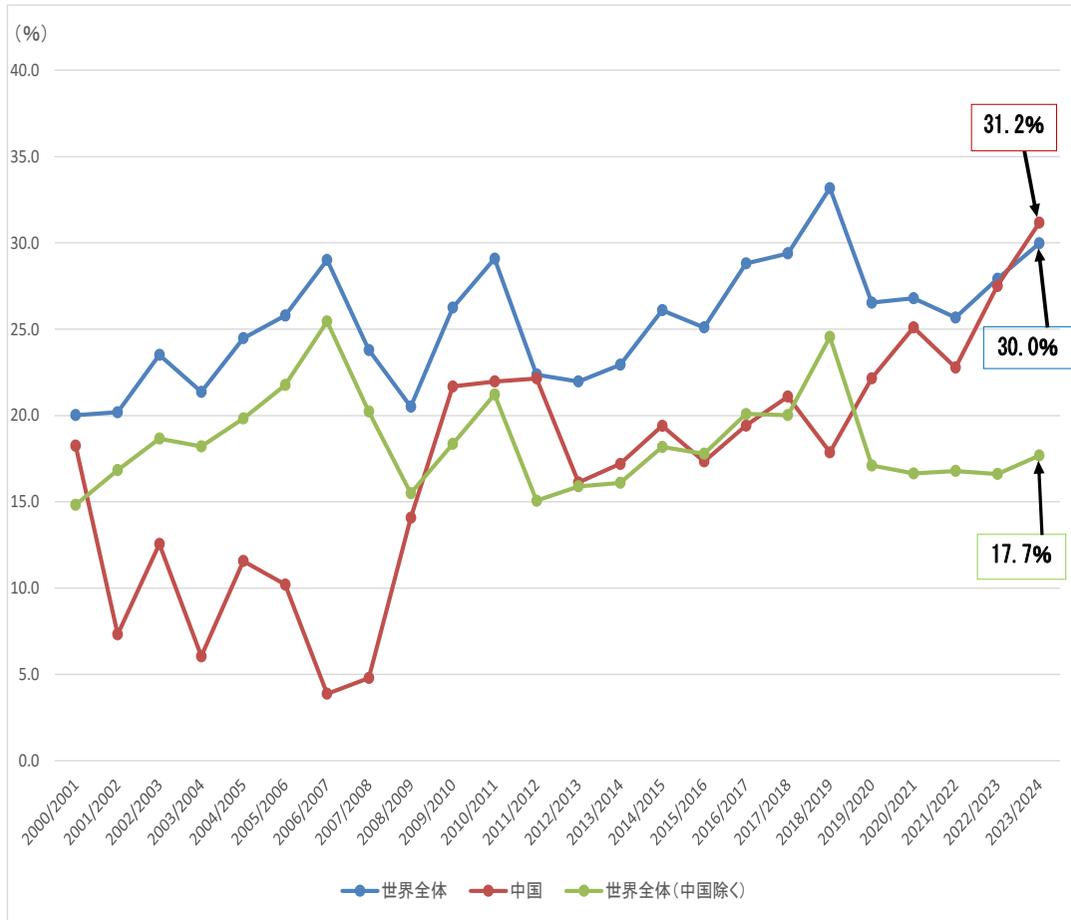
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(April 11, 2024)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

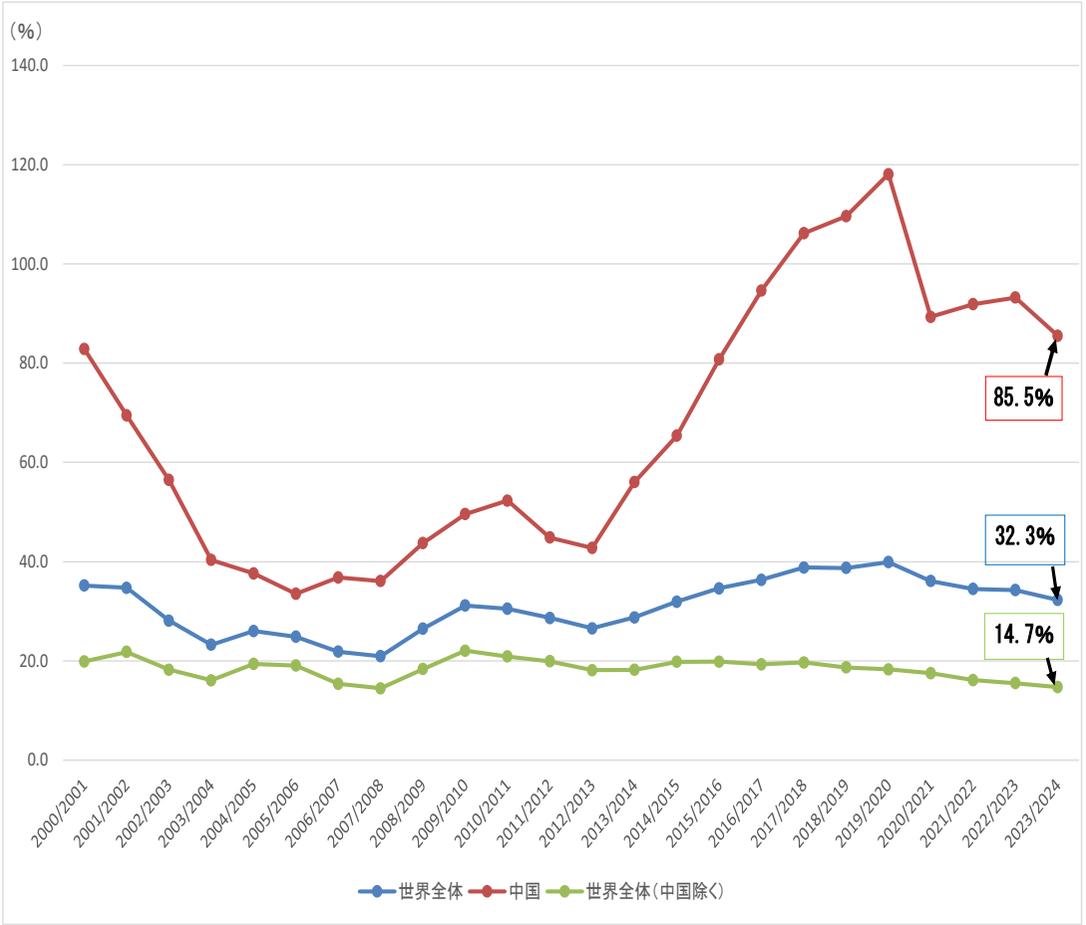
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

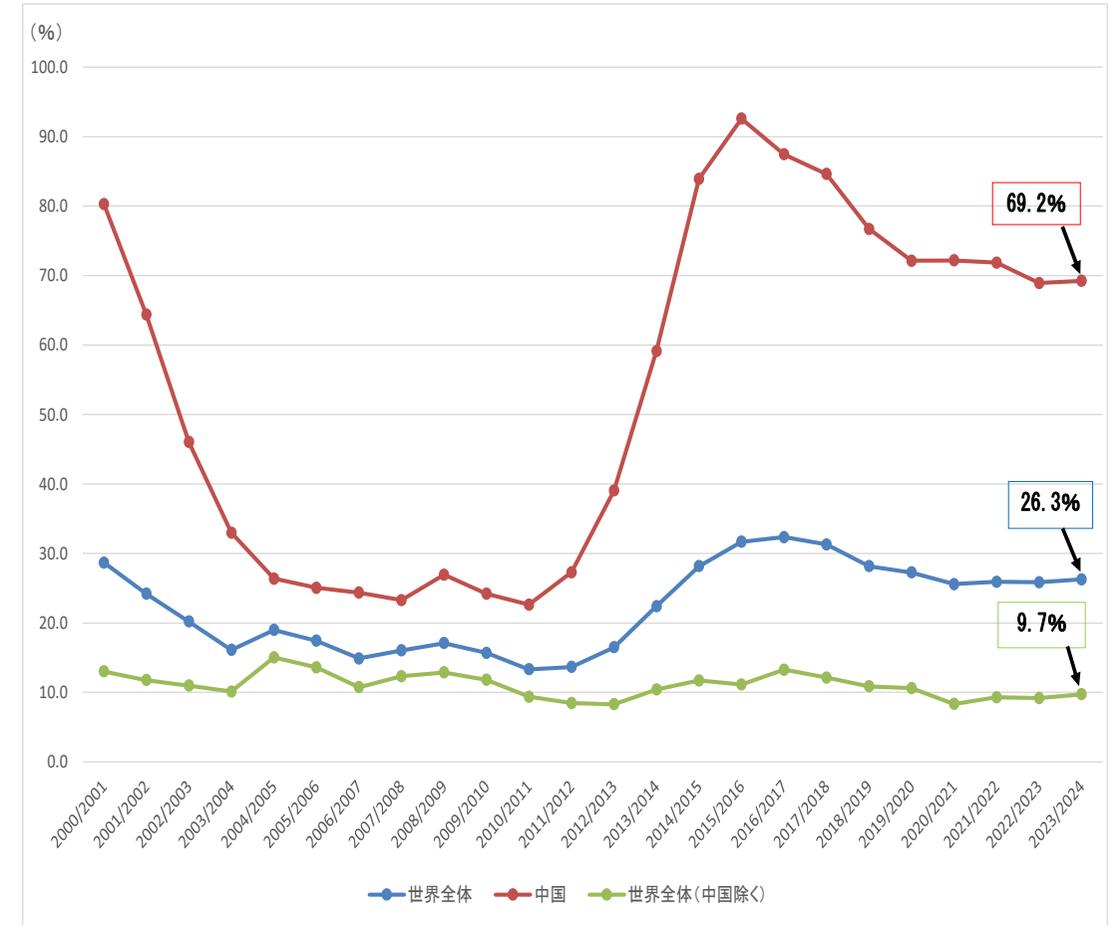
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移

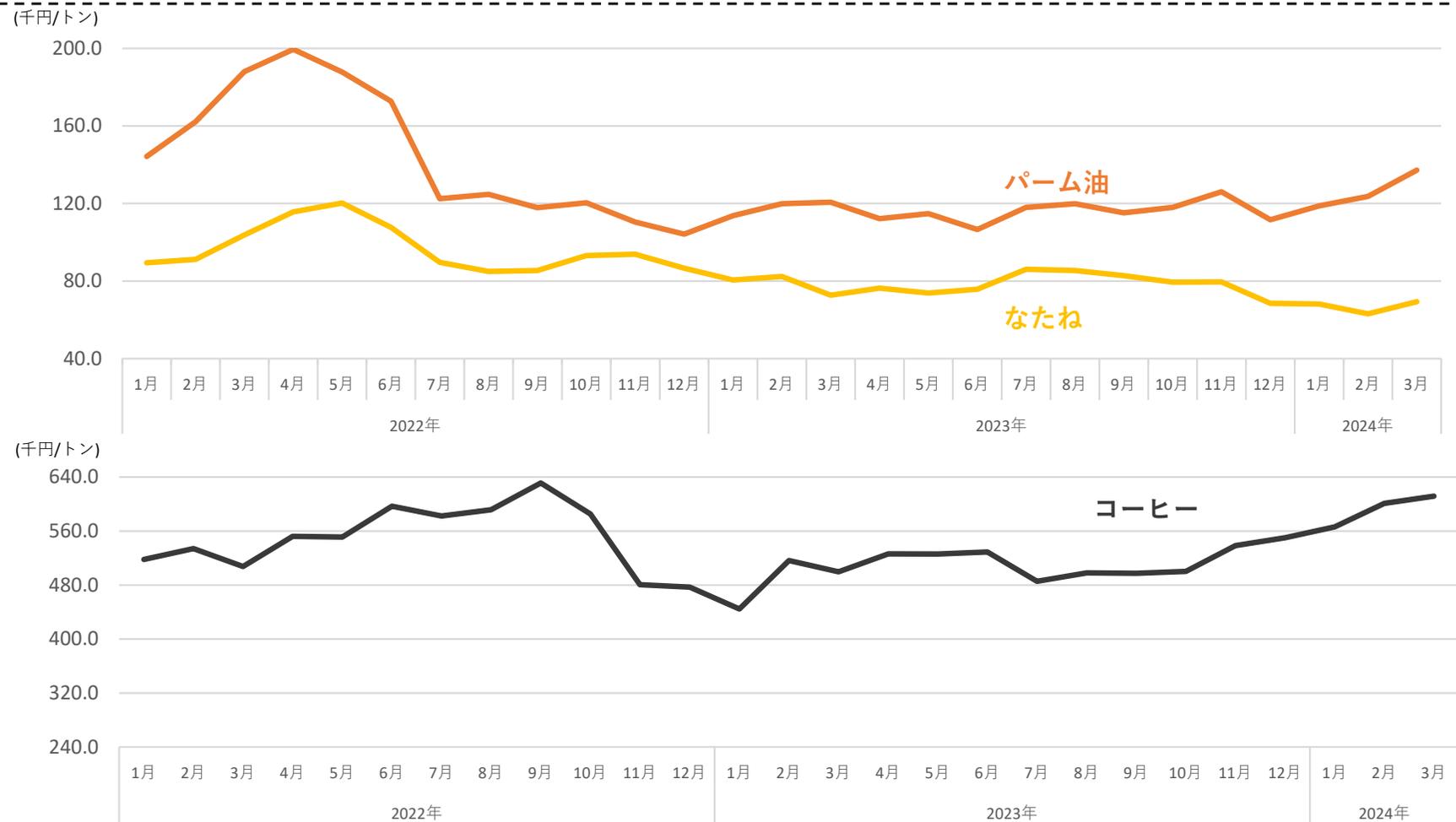


資料: 米国農務省「PS&D」(April 11, 2024)

- 注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。
- 2)世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100
- 3)中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100
- 4)中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料4-1 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油の需要の面では、世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などにより市場価格上昇の要因となっている。
- なたね、パーム油の供給の面では、なたねについては、2021年に主産地であるカナダで減産があったが、2022年以降は回復基調から平年並みの収量に近づいた。パーム油については、インドネシアの輸出禁止措置（2022年5月23日解除）があったが、マレーシアの生産量の増加によって供給不足の懸念が払拭された。いずれも2022年の高値からは落ち着きが見られるものの、依然高止まりしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面では、従来はアメリカやヨーロッパが消費の中心であったが、近年は中国やインドといった人口の多い国での消費の拡大等により、コーヒー消費量が増加したことを受け市場価格が上昇した。その後、消費地のインフレによる景況感の悪化やブラジルでの生産の回復によって市場価格は下降したが、高値が続いている。



2024年4月22日現在
□内は2022年1月以降の最高値。

パーム油
137.2千円/トン
199.5千円/トン (2022.4)

なたね
69.4千円/トン
120.3千円/トン (2022.5)

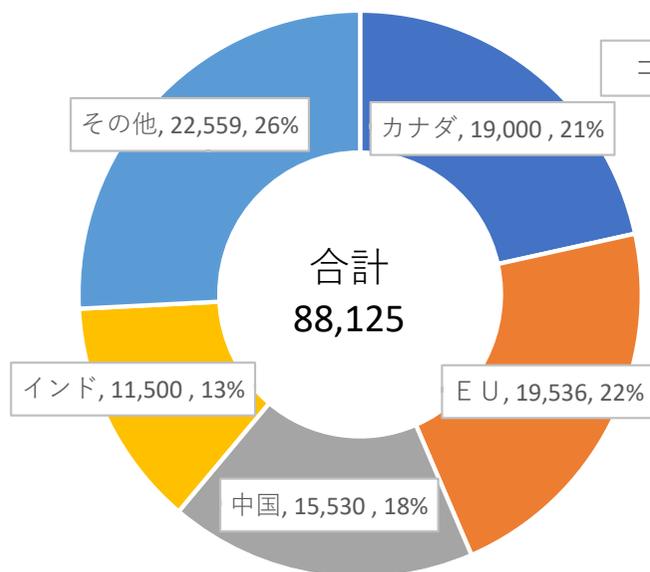
コーヒー
611.7千円/トン
631.1千円/トン (2022.9)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料4-2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

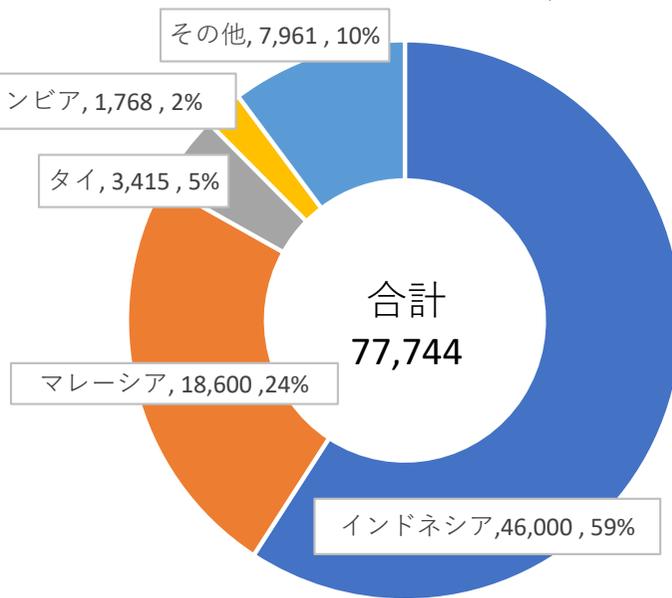
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2022/23）
（単位：千トン）



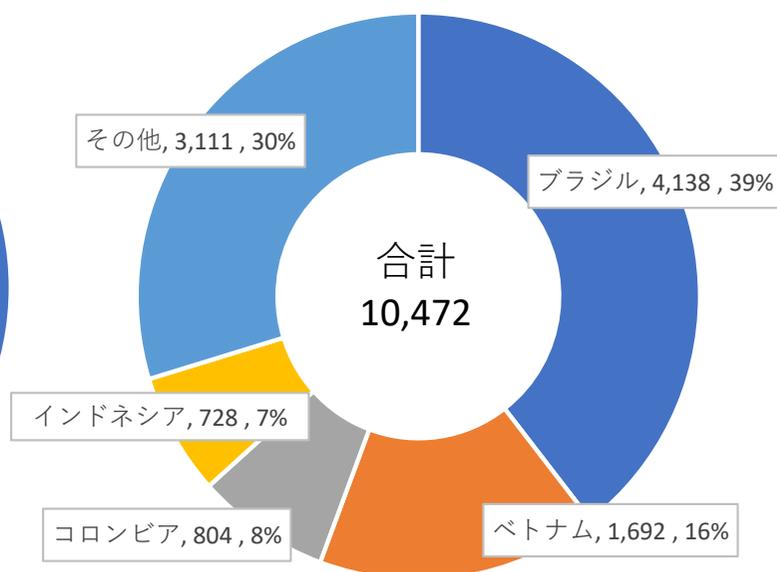
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）
2023年6月時点

パーム油生産量（2022/23）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）
2023年6月時点

コーヒー生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2022年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	1,248	59.4%
オーストラリア	853	40.6%
その他	0	0.0%
合計	2,101	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	500	78.7%
インドネシア	135	21.3%
その他	0	0.0%
合計	635	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	112	28.7%
ベトナム	106	27.2%
コロンビア	47	12.1%
その他	125	32.1%
合計	390	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料4-4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2022年												2023年												2024年															
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月				
コーヒー	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4	480.6	477.0	444.4	516.3	499.6	526.2	526.1	529.1	485.5	498.1	497.4	500.3	538.5	550.2	566.3	601.1	611.7													
前月比	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8	82.1	99.2	93.2	116.2	96.8	105.3	100.0	100.6	91.8	102.6	99.9	100.6	107.6	102.2	102.9	106.2	101.8													
前年同月比	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4	98.8	92.7	85.8	96.7	98.5	95.3	95.4	88.7	83.4	84.2	78.8	85.5	112.0	115.4	127.4	116.4	122.4													

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

注2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和6年3月の国内の加工食品の消費者物価指数は112.9～153.4(前年同月比で-9.7%～20.1%) の範囲内。

消費者物価指数(総務省) (令和5年9月～令和6年3月)

消費者物価指数(総務省)

品目	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R5				R6			上昇率 (前年 同月比)
	平均	平均	平均	平均	平均	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
食パン	100.2	101.1	100.0	99.2	110.3	122.5	122.7	123.2	122.7	122.1	121.8	122.1	6.8%
即席めん	95.3	98.5	100.0	100.1	107.6	123.3	125.7	122.9	122.2	122.2	125.2	123.9	9.5%
豆腐	98.8	99.1	100.0	101.3	105.3	116.3	117.2	117.0	117.2	116.9	117.5	117.6	5.0%
食用油 (キャノーラ油)	101.5	100.9	100.0	106.9	144.4	157.7	156.6	154.8	153.2	152.8	151.3	148.3	-9.7%
みそ	97.4	99.1	100.0	99.3	101.3	108.8	110.8	111.4	111.0	111.5	112.6	112.9	6.0%
マヨネーズ	100.8	100.7	100.0	105.6	125.6	154.7	154.2	153.9	154.7	153.5	154.2	153.4	10.3%
チーズ	100.9	101.3	100.0	98.7	107.5	135.0	135.2	135.0	131.3	133.0	132.7	134.5	10.3%
バター	99.5	99.9	100.0	99.9	99.2	111.5	111.6	111.3	115.5	119.0	119.1	118.8	20.1%
生鮮食品を 除く食料	97.9	99.0	100.0	100.2	104.1	114.3	114.8	115.2	115.1	115.0	115.1	115.3	4.6%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

資料: 総務省消費者物価指数

【参考】 食品価格動向調査(農林水産省) (令和5年9月～令和6年3月)

品目	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R5				R6			上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
	平均	平均	平均	平均	平均	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
食パン	97.9	101.3	100.0	98.6	107.8	118.2	118.0	117.1	118.6	117.6	117.4	118.6	1.0%	6.6%
即席めん	92.4	97.9	100.0	99.2	105.6	121.6	122.2	122.2	121.6	119.8	121.0	121.0	0.0%	9.4%
豆腐	100.1	100.9	100.0	100.6	103.7	114.1	114.6	114.1	114.6	114.6	114.6	115.0	0.3%	4.4%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	103.5	100.0	104.1	140.7	158.7	156.8	155.5	153.3	153.3	151.4	150.5	-0.6%	-7.0%
みそ	96.6	100.4	100.0	99.2	100.1	105.6	109.4	110.0	110.6	110.2	110.4	110.2	-0.2%	6.4%
マヨネーズ	97.9	103.1	100.0	102.2	117.7	144.1	144.8	143.7	143.7	144.1	144.4	143.4	-0.7%	10.1%
チーズ	98.6	100.9	100.0	98.1	105.7	130.7	130.3	130.7	122.3	125.8	128.8	129.8	0.8%	10.1%
バター	99.0	99.5	100.0	99.8	99.1	110.7	111.4	110.5	115.0	118.3	118.5	118.5	0.0%	20.4%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2024年5月号（4月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）24年1月の牛肉輸入量は過去最高

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003212.html

（カナダ）23年の牛肉輸出量は前年比2.4%減、24年も減少見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003213.html

（豪州）24年2月の牛肉輸出、日本が最大の輸出先

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003214.html

（ウルグアイ）23年の牛と畜頭数、牛肉輸出量ともに2年連続の減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003215.html

◆豚肉

（EU）23年の豚肉生産量は過去10年で最低、枝肉価格は高値で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003216.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（米国）乳価上昇、飼料費下落で、酪農マージンは拡大

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003218.html

（EU）24年2月の生乳取引価格、5カ月ぶりに前月を下回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003219.html

（NZ）24年2月の生乳生産量、乳製品輸出量ともに前年同月を上回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003220.html

（中国）生乳価格はさらに下落、乳製品輸入量も引き続き低迷

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003221.html

◆飼料穀物

（世界：トウモロコシ）主要国トウモロコシ生産量は据え置き、輸出増で期末在庫は微減も高水準維持

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003222.html

（世界：大豆）消費や輸出の増加から世界の大豆期末在庫は下方修正も、引き続き高い水準

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003223.html

（米国）米国のトウモロコシ生産量、輸出量などは据え置き、生産者価格は下方修正

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003224.html

（ブラジル）23/24年度トウモロコシ、大豆ともに生産予測を下方修正

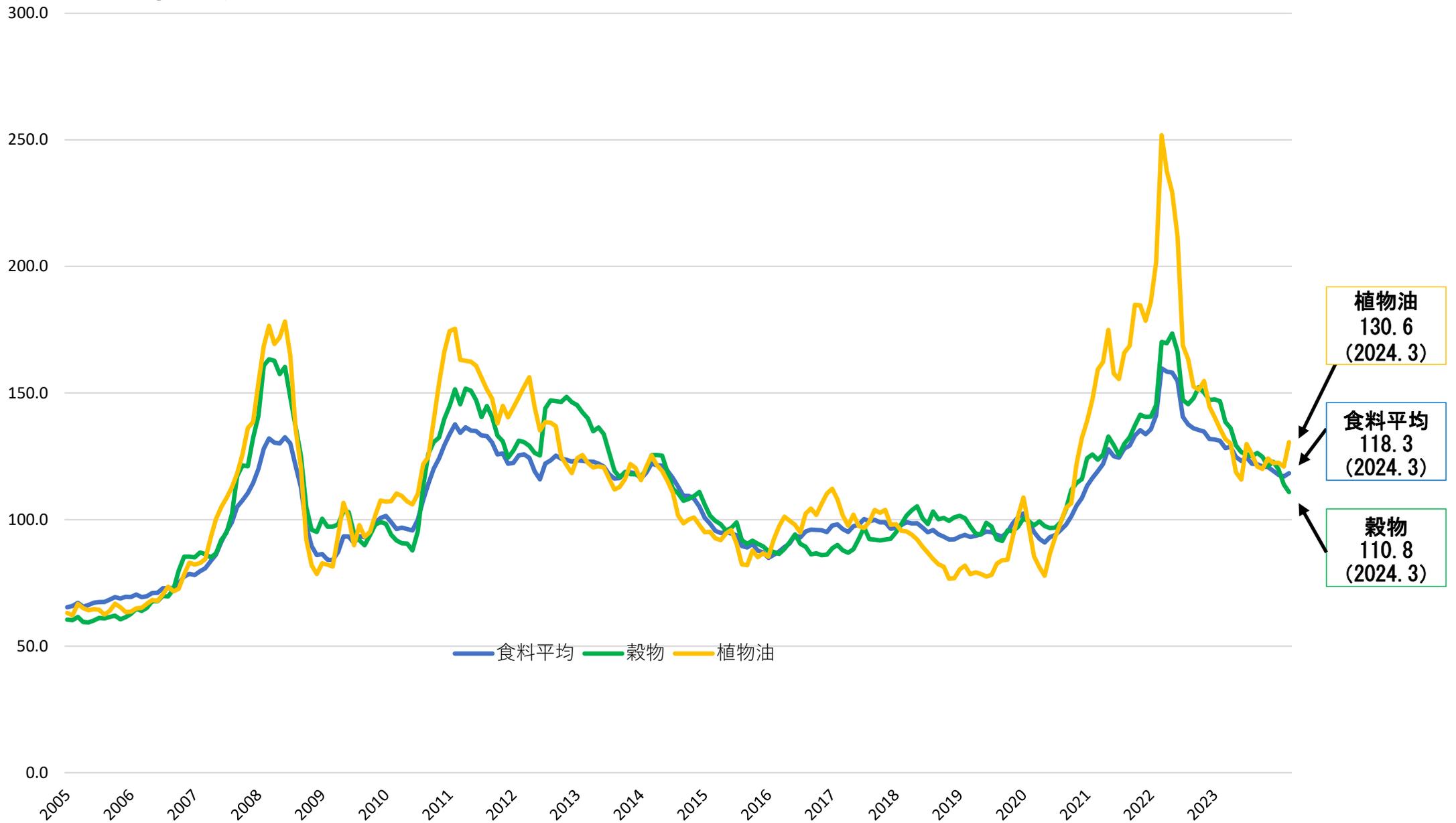
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003225.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003226.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2024.3)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

【今月のコラム】

ブラジル便り②：ブラジルの輸送インフラ

ブラジルは、コーヒー豆や砂糖の世界有数の生産・輸出国です。最近では、大豆・とうもろこしも世界第1位の輸出国となっており、我が国も輸入しています。

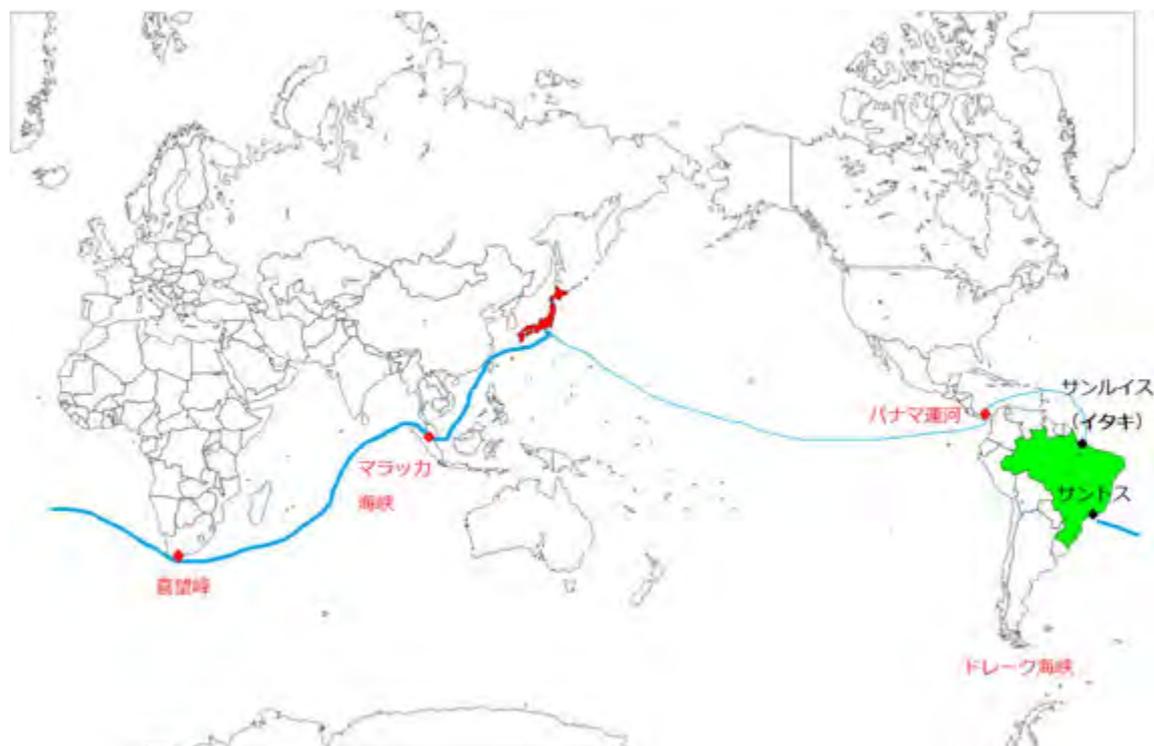
ブラジル産の大豆やとうもろこしは、どのような経路で日本に届くのでしょうか？今月は、ブラジル産の大豆・とうもろこしがどこを辿って日本に届くのかみていきます。

1. ブラジル産穀物等の海上輸送ルート

ブラジル産大豆・とうもろこしのアジア向けの海上輸送は、主に南部のサントス港からアフリカ南端の喜望峰を経由するルートです。喜望峰を通過した後、東南アジアのマラッカ海峡も経由します。なお、数量は少ないものの、北部のサンルイス港（イタキ港）からパナマ運河経由で輸出されるケースもあります。

なお、南米大陸南端のホーン岬と南極大陸を隔てるドレーク海峡は、世界で最も荒れる海域の1つであり、海上輸送にはほとんど利用されていません。ドレーク海峡を含む南緯60度付近は、陸地が全く存在せず、年間を通して温帯低気圧の通り道となっており、強風や海流が遮られないため、いつも荒れており、“shrieking sixties”（絶叫する60度）と呼ばれています。

図1 ブラジル産穀物等の海上輸送ルート



注：おおよそのルートであり実際とは異なる場合がある。

2. 主要輸出港（サントス港）

ブラジル最大の穀物輸出港であるサントス港を昨年11月に訪問したところ、収穫された冬とうもろこしが貯蔵されていました。訪問した港湾ターミナルには穀物用倉庫が4つあり、1つの倉庫に約9万トン貯蔵可能と、かなりの貯蔵能力を誇ります。他方で、サントス港には現在54の港湾ターミナルがあるものの、拡張する余地はないようです。

一方で、中国企業COFCO（糧油グループ）がターミナルを1つ保有しており、更に既存のセルロース会社の土地を買い取ることで、2025年までにもう1つのターミナルを建築する予定となっています。

訪問したターミナルの運営会社における輸送手段の比率は、鉄道とトラックで6：4となっていました。

ある穀物商社によると、10年前まではサントス港からの穀物輸出はブラジルの穀物輸出の約45%を占めていましたが、現在は約35%まで下がりました。

これは、北部のマトピバ地域（マラニョン州、トカンチンス州、ピアウイ州、バイーア州の頭文字を取って「マトピバ」と呼ばれる）での増産に伴い、「北のアーク」（北部のアマゾン川流域のサンタレン港やマラニョン州サンルイス港等）を経由する輸出が増加しているためです。

ただし、昨年は、エルニーニョに伴う降雨不足を受けてアマゾン川の水位が低下したため、「北のアーク」向けの国内輸送に制約が生じ、南東部のサントス港への輸送量が増加しました。



写真1 とうもろこしの貯蔵庫

図2 ブラジルの主要な穀物輸出港



サントス港からの輸出は、一部で滞船が見られたものの、概ね問題なく輸出されているとのことでした。

3. 主要な国内輸送ルート

ブラジル産大豆・とうもろこしの国内輸送ルートについて、主要生産州の中西部マット・グロッソ州のシノップを例に御紹介します。

従来、シノップからの穀物の輸送はトラックが主流でした（図3の①）。シノップから、幹線道路の国道163号を利用し、約2,100km先のサントス港までトラックで輸送します。

ただし、トラック輸送では一度に大量の穀物を輸送できず、コストがかかります。

そのため、近年、アマゾン川の水運を利用した「北のアーキ」からの輸出も増加しました（図3の②）。シノップから国道163号を利用し約1,000km先のイタイツバまでトラックで輸送し、その後、約200km先のサンタレン港までアマゾン川経由で輸送します。

さらに、鉄道輸送も増加しています（図3の③）。シノップから国道163号を利用し約700km先のロンドノポリスまでトラックで輸送した後に、約1,100km先のサントス港まで鉄道で輸送します。

鉄道を利用すれば、一度に大量の穀物等の輸送が可能です。

なお、鉄道運営会社によると、中西部マット・グロッソ州とサントス港を結ぶ鉄道は、現在、マット・グロッソ州南部のロンドノポリスまで開通しており、州中部のルーカスドリオベルデまで延伸予定です。



写真2 穀物輸送用のトラック

図3 マット・グロッソ州シノップからの主な穀物等輸送ルート



写真3 サントス港に向かう鉄道貨物車

4 生産地での穀物貯蔵

中西部マット・グロッソ州の生産地シノップでは、近年の急速な増産に穀物貯蔵施設の建設が追いついていませんでした。

現地の生産者によると、生産者がサイロを保有しているものの、マット・グロッソ州としては少なくとも生産量の30%は不足しているとのことでした。

貯蔵施設が不足している場合、豊作時に貯蔵し、凶作時に貯蔵施設から販売することができません。

そのため、輸入元としては、豊作時は供給量が確保されるものの、穀物輸送インフラのキャパシティの問題（例えば、サントス港の港湾キャパシティ）を注視する必要があります。

一方、凶作時は、生産地での貯蔵がなければ供給量が不足することに直結しやすくなるため、輸入国は他の国・地域に供給元を切り替える必要が生じるかもしれません。

このような生産地における貯蔵施設の不足は、日本における安定的な輸入確保の課題となります。

今回のブラジルの輸送インフラ事情の紹介は以上となります。次回、ブラジル便り③では、ブラジルの代表的料理など食文化についてお話ししたいと思います。

文責：辻 貫志（農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室）

本稿は、世界各国・地域の駐在員をはじめ、関係者の方々にご協力をいただき、最新の現地情報をご紹介します。日本とは異なる文化や経済、国土条件等を背景として、それぞれの国や地域における食料の生産、流通、消費の特徴や考え方、また、日本の食料品や文化等に対するイメージなどについてもご紹介したいと思います。

【データ・出典】

・宮路秀作（2022）、「地図でスッと頭に入る 世界の三大穀物」、昭文社



写真4 穀物サイロ



写真5 貯蔵倉庫

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

＜米国農務省（USDA）の見通し＞ 2023/24年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↑

- ・チュニジア等で下方修正されたものの、EU等で上方修正され、前月から上方修正された。

消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

- ・ロシア、米国等で下方修正されたものの、インド、EU等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↑

- ・EU等で下方修正されたものの、ウクライナ、ロシア等で上方修正され、前月から上方修正された。

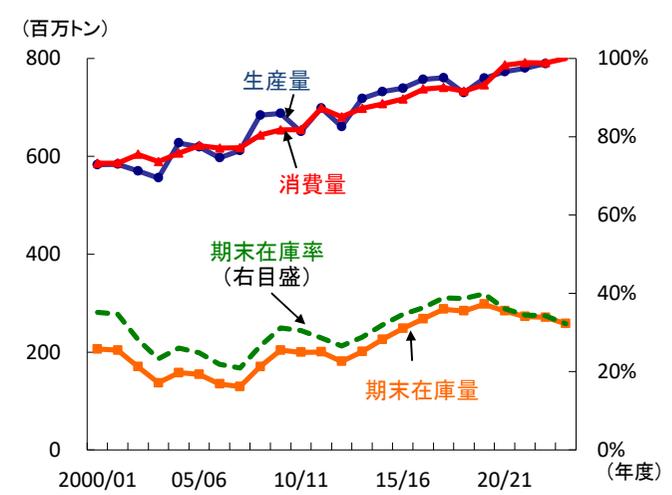
期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

◎世界の小麦需給

(単位：百万トン)

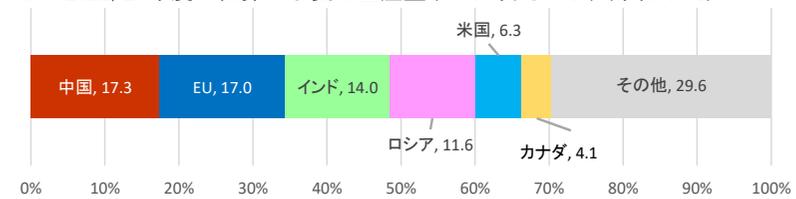
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	780.4	789.3	787.4	0.7	▲ 0.3
消費量	791.3	791.0	800.1	1.1	▲ 1.1
うち飼料用	160.7	155.2	161.3	▲ 0.7	4.0
輸出量	202.8	220.2	213.5	1.3	▲ 3.0
輸入量	200.2	212.0	212.3	1.1	0.2
期末在庫量	272.7	271.0	258.3	▲ 0.6	▲ 4.7
期末在庫率	34.5%	34.3%	32.3%	▲ 0.1	▲ 2.0

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (11 April 2024)

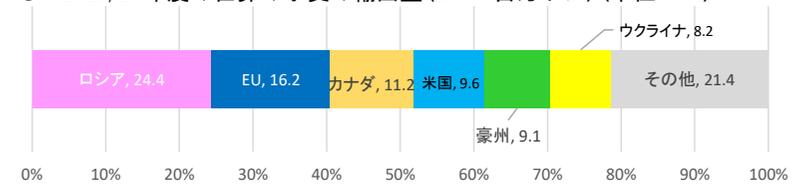


資料：USDA「PS&D」(2024. 4. 11) をもとに農林水産省にて作成

○ 2023/24年度の世界の小麦の生産量(787.4百万トン)(単位：%)



○ 2023/24年度の世界の小麦の輸出量(213.5百万トン)(単位：%)



○ 2023/24年度の世界の小麦の輸入量(212.3百万トン)(単位：%)



(2) 国別の小麦の需給動向

< 米国 > 2024/25 年度の小麦の作付意向面積は前年度比 4.2%減少

【生育・生産状況】米国農務省(USDA)によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく 49.3 百万トンと、前年度に比べ 9.8%増、過去 5 年平均(48.6 百万トン)に比べ 1.4%増となる見込み。種類別には、冬小麦が 34.0 百万トン(前年度比 13.1%増)、春小麦が 13.7 百万トン(同 4.6%増)、デュラム小麦が 1.6 百万トン(同 7.3%減)。

USDA「Prospective Plantings」(2024.3.28)によれば、2024/25 年度の作付意向面積は、19.22 百万ヘクタール(前年度比 4.2%減)。種類別では、冬小麦は 13.81 百万ヘクタール(同 7.0%減)と減少幅が大きい。「Wheat Outlook」(2024.4.15)によれば、小麦が相対的に収益の高いとうもろこしと大豆の輪作に組み込まれたことが要因の一つとみられる。他方で、デュラム小麦は 0.82 百万ヘクタール(同 21.0%増)で、米國小麦連合会によれば、米国産デュラム小麦の価格がフランス産やカナダ産の価格に比べ高い水準であることが要因とみられる。春小麦は 4.59 百万ヘクタール(同 1.2%増)となっている。

USDA「Crop Progress」(2024.4.15)によれば、冬小麦は出穂が始まっており、作柄は「やや良～良」の割合が 55%と、干ばつの影響があった前年度の 27%から 28 ポイント増加している。

また、春小麦の作付けが開始されているが、主要生産 6 州(アイダホ州、ミネソタ州、モンタナ州、ノースダコタ州、サウスダコタ州、ワシントン州)の作付進捗率は 7%となっており、前年度同期の 3%、過去 5 年平均の 6%を上回っている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測から変更はなく 19.3 百万トンと、前年度に比べ 6.4%減少し、1972/73 年度以降で最低の見込み。2023 年 6 月～2024 年 2 月の輸出量は、13.6 百万トンと、前年度同期の 16.2 百万トンを 16%下回る見込み。4 月 8 日時点のハード・レッド・ウインター(HRW)の輸出価格(FOB)は、272 ドル/トンとなっており、主要輸出 6 か国(米国のほか、カナダ、豪州、EU、ロシア、アルゼンチン)の輸出価格と比較するとカナダ 283 ドル/トンに続き高い水準であり、国際市場での価格競争力が乏しい状態である。

2023/24 年度の期末在庫量は、飼料用の消費量が下方修正されたこと等から、前月予測から 0.7 百万トン上方修正され、19.0 百万トン(前年度比 22.5%増)の見込み。

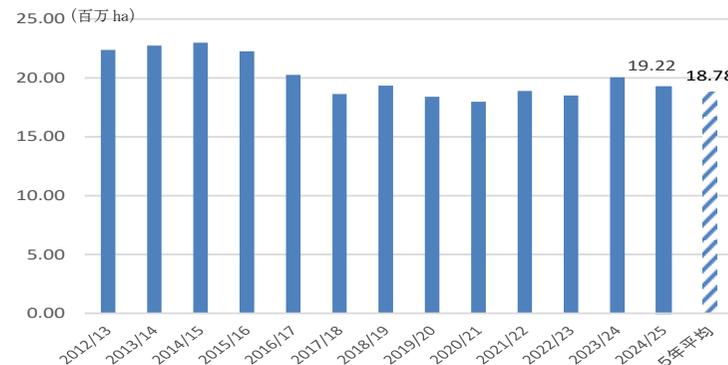
小麦－米国(冬小麦が全体の 7 割、春小麦は 3 割)

(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年6月～24年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	44.8	44.9	49.3	-	9.8
消費量	30.4	30.4	30.3	▲ 0.8	▲ 0.3
うち飼料用	2.4	2.1	2.5	▲ 0.8	17.2
輸出量	21.7	20.7	19.3	-	▲ 6.4
輸入量	2.6	3.3	3.8	▲ 0.1	14.8
期末在庫量	18.4	15.5	19.0	0.7	22.5
期末在庫率	35.3%	30.4%	38.2%	2.0	7.9
(参考)					
収穫面積(百万ha)	15.03	14.36	15.08	-	5.0
単収(t/ha)	2.98	3.13	3.27	-	4.5

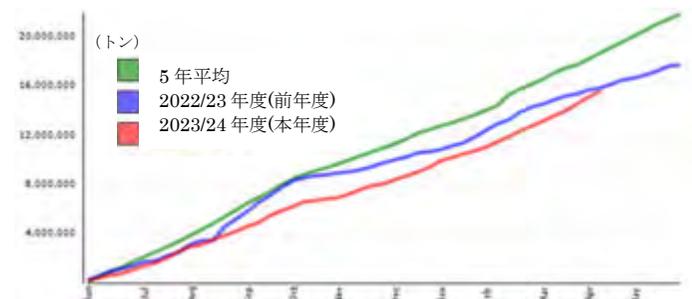
資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(11 April 2024)

図: 米国産小麦の作付面積の推移 (2012/13～2024/25 年度)



資料: USDA「PS&D」(2024.4.11)をもとに農林水産省で作成

図: 米国産小麦の輸出量の推移



資料: USDA FAS「Export Sales Reporting」(2024.4.11)

< カナダ > 2024/25 年度の生産量は前年度比 8.3%増の 34.6 百万トン

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2024.4.19)によれば、2023/24 年度の小麦全体の生産量は、前月予測からの変更はなく 32.0 百万トンと、前年度に比べ 6.9%減少するものの、過去 5 年平均に比べ 1.6%増加の見込み。種類別の生産量は、普通小麦は収穫面積が増加するものの、干ばつによる単収の低下を受け 27.9 百万トンと前年度比 2.2%減少も、5 年平均比では 6.5%増加。デュラム小麦は、干ばつによる収穫面積の減少と単収の低下を受け 4.0 百万トンと前年度比 29.9%減、5 年平均比 22.7%減の見込み。

カナダ統計局「Principal field crop areas, 2024」(2024.3.11)によれば、2024/25 年度の作付意向面積は、10.95 百万ヘクタール(前年度比 0.1%増)となる見込み。種類別には、春小麦は 7.78 百万ヘクタール(同 1.2%減)、デュラム小麦は 2.57 百万ヘクタール(同 5.1%増)の見込み。2023/24 年度のデュラム小麦生産量が干ばつにより大きく減少し、需要に対して供給が足りていないことからデュラム小麦の作付けが増加したものとみられる。冬小麦の面積は 0.59 百万ヘクタールとなっている。

AAFC によれば、2024/25 年度の小麦全体の生産量は、前月予測から変更はなく、前年度比 8.3%増の 34.6 百万トンの見込み。なお、単収は干ばつから回復し例年並みになるとしている。種類別の生産量は、普通小麦は、前年度比 3.7%増の 28.9 百万トン。デュラム小麦は、作付面積の増加と単収の回復から前年度比 39.8%増の 5.7 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく 23.5 百万トンと、生産量の減少を受け前年度比 8.6%減少の見込み。種類別の輸出量は、普通小麦は 20.3 百万トンと、前年度に比べ 1.8%減少。デュラム小麦は 3.2 百万トンと、生産量減少による輸出余力低下と豊作となったトルコとの競合の強まり等を受け前年度に比べ 36.7%の減少。

カナダ穀物委員会(CGC)によれば、2024 年 2 月の輸出量は、普通小麦が 189.8 万トンで、輸出先国は中国(22.6%)、バングラデシュ(15.7%)、インドネシア(9.7%)の順。デュラム小麦は 30.0 万トンで、アルジェリア(47.7%)、モロッコ(19.4%)、米国(16.3%)の順。

AAFC によれば、2024/25 年度の輸出量は、前年度比 4.9%増の 24.6 百万トンの見込み。種類別には、普通小麦は、国際的な供給増等により前年度比 0.7%減の 20.1 百万トンとなった一方、デュラム小麦は前年度の干ばつの影響による供給不足を受けた需要回復の期待から前年度比 40.6%増の 4.5 百万トンとなる見込み。

小麦－カナダ（春小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年8月～24年7月)		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	22.4	34.3	32.0 (32.0)	-	▲ 7.0
消費量	10.2	9.5	8.7 (8.6)	-	▲ 7.9
うち飼料用	5.2	4.3	3.5 (4.1)	-	▲ 18.8
輸 出 量	15.1	25.6	24.0 (23.5)	-	▲ 6.2
輸 入 量	0.6	0.6	0.6 (0.1)	-	9.1
期末在庫量	3.7	3.5	3.4 (3.6)	-	▲ 4.0
期末在庫率	14.5%	10.0%	10.3% (11.1%)	-	0.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	9.20	10.08	10.68 (10.68)	-	6.0
単収(t/ha)	2.44	3.41	2.99 (2.99)	-	▲ 12.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2024)
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(19 April 2024)

図 カナダ産小麦の生産量の推移(冬・春・デュラム小麦)



資料：AAFC 「Outlook for Principal field crops」(2024.4.19)のデータ
をもとに農林水産省で作成

表 カナダ産小麦の輸出量と輸出先国 (2024 年 2 月)

(輸出量:万トン, シェア%)

普通小麦			デュラム小麦		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
中国	42.9	22.6	アルジェリア	14.3	47.7
バングラデシュ	29.8	15.7	モロッコ	5.8	19.4
インドネシア	18.4	9.7	米国	4.9	16.3
日本	14.5	7.6	イタリア	2.7	9.0
グアテマラ	9.8	5.2	ベネズエラ	1.0	3.3
その他	74.4	39.2	その他	1.3	4.3
	189.8	100.0		30.0	100.0

資料：「Canadian Grain Commission」のデータをもとに農林水産省で作成

< 豪州 > 2023/24 年度の輸出量はアジア向けの輸出が好調で 0.5 百万トン上方修正

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予想からの変更はなく、26.0 百万トンの見込み。史上最高の前年度に比べ、降雨不足による単収の低下と収穫面積の減少から 35.9%減少するものの、10 年平均(26.5 百万トン)に比べ 1.8%の減少とほぼ平年並みの見込み。

豪州農業資源経済科学局(ABARES)「Australian Crop Report」(2024.3.5)によれば、2023/24 年度の実生産量は、ニューサウスウェールズ(NSW)州等での生産量の引上げを受け前回の 12 月予測から 0.5 百万トン上方修正され 26.0 百万トンと、史上最高の前年度(40.5 百万トン)から 36.0%減少するものの、過去 10 年平均比(26.5 百万トン)2.0%の減少に留まる見込み。

主要生産州では、ウェスタンオーストラリア州(WA 州)の生産量は、乾燥した天候が続いたことから、7.7 百万トンと前年度比 47% 減であり、過去 10 年平均比でも 20%減の見込み。なお、生産量は減少したものの、タンパク質含有量は高い水準となった。ニューサウスウェールズ州(NSW 州)の生産量は、北部において乾燥した天候が続いたことから、7.1 百万トンと前年度比 33%減であるも、過去 10 年平均比では 4%減に留まる見込み。サウスオーストラリア州 (SA 州) の生産量は、乾燥した天候が続いたことから、4.8 百万トンと前年度比 35%減である一方、過去 10 年平均比では 8%増の見込み。また、同州の一部では収穫期の降雨を受け品質が低下した。

西豪州穀物産業協会 (GIWA) (2023.4.19)によれば、西豪州の大部分が乾燥し、土壌水分量も低い状態となっている。また、豪州気象局の季節予測によれば、5 月に入っても乾燥した状態が続く可能性が高いことが示されており、2024/25 年度の実小麦の作付面積の見込みは 4.96 百万ヘクタールの予想であるが、土壌水分量の不足により、小麦から大麦等への作付けの変更を受けた作付面積の減少や、生産量の減少につながる可能性がある。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、アジア市場向けの輸出が好調なことから前月予測から 0.5 百万トン上方修正され 20.5 百万トンの見込み。過去最高の前年度に比べ、乾燥天候による生産量の減少から 35.6%減少するものの、10 年平均(18.9 百万トン)比では 8.4%増加。ABARES によれば、2024 年の 2 月の輸出量は 231.2 万トンで、輸出先国は、中国(25.5%)、インドネシア(23.6%)、フィリピン(7.0%)の順となっており、アジア市場向けの輸出が多くなっている。

小麦－豪州(冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	36.2	40.6	26.0 (30.1)	-	▲ 35.9	
消費量	8.5	8.0	7.0 (8.3)	-	▲ 12.5	
うち飼料用	5.0	4.5	3.5 (4.5)	-	▲ 22.2	
輸出量	27.5	31.8	20.5 (21.0)	0.5	▲ 35.6	
輸入量	0.2	0.2	0.2 (0.3)	-	-	
期末在庫量	3.5	4.4	3.1 (3.9)	▲ 0.5	▲ 29.7	
期末在庫率	9.6%	11.0%	11.2% (13.4%)	▲ 2.1	0.2	

(参考)

収穫面積(百万ha)	12.73	13.05	12.50 (12.42)	-	▲ 4.2	
単収(t/ha)	2.85	3.11	2.08 (2.09)	-	▲ 33.1	

資料:USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2024)
IGC 「Grain Market Report」(14 March 2024)

図 豪州の州別小麦生産量の推移



資料:ABARES 「Australian Crop Report (2024.3.5)」をもとに農林水産省で作成

表 豪州産小麦の輸出状況

(輸出量:万トン、シェア:%)

2024年2月		
国 名	輸出量	シェア
中国	58.9	25.5
インドネシア	54.5	23.6
フィリピン	16.2	7.0
韓国	14.7	6.4
日本	11.9	5.1
その他	75.0	32.4
計	231.2	100.0

資料:ABARES 「Trade dashboard (beta)」をもとに農林水産省で作成

< EU27 > 2023/24年度の輸入量は史上最高の13.5百万トン

【生育・生産状況】欧州委員会(2024.3.27)によれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、132.6百万トンと、前年度比で0.5%減少も過去5年平均比では0.8%増加する見込み。

小麦全体のうち普通小麦は125.6百万トンと、前年度比で0.2%減少するも5年平均比では1.5%増加。また、デュラム小麦は7.0百万トンと、前年度比で6.3%減少となるとともに、5年平均比でも10.3%減少する見込み。

欧州委員会によれば、2024/25年度の作付面積は、22.9百万ヘクタールと前年度比で4.2%減少する見込み。小麦全体のうち、普通小麦は20.9百万ヘクタールと前年度比で3.7%減少する見込みであるとともに、デュラム小麦も2.0百万ヘクタールと、前年度比で8.8%減少する見込み。これらは、秋の多雨により冬小麦の作付けが困難になったため、フランス、ドイツ等で作付面積が減少したことや、過剰な降雨によりチェコ、オーストリア、フランス等で前年度から単収が減少する見込みであることによる。

フランスアグリメールによれば、4月1日時点でのフランス産小麦の生育状況については、「良～優良」の割合は、普通小麦は65%、デュラム小麦は72%と、それぞれ前年度の93%、92%を下回っている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸入量は、価格競争力のあるウクライナからの輸入が増加していることから13.5百万トンと、前年度及び過去5年平均をそれぞれ11.5%、101.9%上回り史上最高となる見込み。

輸出量は前月予測から2.0百万トン下方修正され34.5百万トンと、前年度比で1.7%減であるものの、過去5年平均比では7.0%増の見込み。4月8日時点でのフランス産小麦の輸出価格(FOB)は222ドル/トンである一方、ロシア産小麦の輸出価格は211ドル/トンとなっており、ロシア産小麦の輸出価格は上昇しているものの、引き続き価格競争力のあるロシア産小麦との競合により、サウジアラビアやアルジェリアといった中東及び北アフリカでの市場シェアを減らしており、輸出量が減少している。

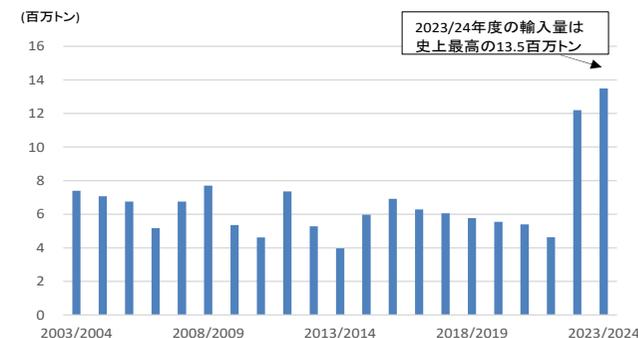
小麦－EU27 (冬小麦を主に栽培)

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年7月～24年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	138.5	134.3	134.2 (130.5)	0.4	▲ 0.1
消費量	108.3	109.0	112.5 (108.7)	1.0	3.2
うち飼料用	45.0	45.0	48.0 (44.5)	1.0	6.7
輸 出 量	31.9	35.1	34.5 (32.3)	▲ 2.0	▲ 1.7
輸 入 量	4.6	12.2	13.5 (6.4)	0.5	10.7
期末在庫率	9.7%	11.1%	11.4% (10.4%)	1.1	0.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	24.29	24.40	24.20 (23.89)	▲ 0.02	▲ 0.8
単収(t/ha)	5.70	5.50	5.54 (5.46)	0.02	0.7

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2024)
IGC 「Grain Market Report」(14 March 2024)

図 EUの小麦輸入量の推移



資料：USDA「PS&D」(2024.4.11)をもとに農林水産省で作成

表 EUの普通小麦の輸出量と輸出先国

(単位：万トン)

2023年7月～2024年1月			2022年7月～2023年1月		
国名	輸出量	シェア (%)	国名	輸出量	シェア (%)
モロッコ	313.7	14.5%	モロッコ	287.3	14.2%
アルジェリア	211.0	9.7%	アルジェリア	267.2	13.2%
ナイジェリア	191.5	8.8%	エジプト	162.9	8.0%
エジプト	143.2	6.6%	ナイジェリア	157.9	7.8%
中国	130.8	6.0%	サウジアラビア	106.7	5.3%
インドネシア	105.0	4.8%	中国	103.0	5.1%
その他	1,070.9	49.4%	その他	941.6	46.5%
合計	2,166.1	100.0%	合計	2,026.6	100.0%

資料：欧州委員会「Cereals exports and imports」をもとに農林水産省で作成

< 中国 > 2024/25 年度の冬小麦の生育は概ね順調

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、136.6 百万トンの見込み。収穫面積は増加したものの単収の低下から、史上最高の前年度(137.7 百万トン)に比べ、生産量は 0.8%減少するものの、過去 5 年平均の 134.8 百万トンを 1.3%上回る。なお、収穫前に豪雨に見舞われた影響を受け、生産量が減少するとともに生産量に占める飼料用グレード小麦の割合が増加した。

中国国家気象センター「中国気象農業頻道」の 4 月上旬の情報によれば、2024/25 年度の冬小麦については、気温が平年に比べ高く、また、ほとんどの地域で土壌水分状態に恵まれたことから、生育は概ね順調となっている。

3 月末から 4 月初めの冬小麦の生育段階は、河北省等では分けつ期となっており、河南省、山東省、安徽省、江蘇省等では節間伸長期、湖北省等では開花期に入っている。なお、生育は平年並みか平年より若干早くなっている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測から変更はなく、153.5 百万トンの見込み。このうち飼料用消費量は、2023 年 5 月の降雨による品質低下に伴う飼料用グレード小麦が増加を受けて飼料用需要が増加したことから 37.0 百万トンと、前年度に比べ 12.1%増加する見込み。

中国農業農村部「中国農産品供需形勢分析月報」によれば、国内小麦の品質低下による高品質小麦の国内需給の逼迫と国際小麦価格の低下を受け、2023 年の小麦及び小麦製品の輸入量は、増加している。

中国海関統計によれば、2023 年 1 月から 12 月までの輸入量合計は 1,209.9 万トンで、前年に比べ 21.5%増加。同期間の輸入先国別のシェアは、豪州 57.4%(前年度同期 57.5%)、カナダ 21.1%(同 18.0%)、フランス 6.8%(同 17.1%)、米国 7.7%(同 6.3%)の順で、豪州とカナダの 2 か国で輸入シェアの 79%を占めている。2024 年 1 月から 2 月の輸入量は 250.3 万トンで、豪州が 96.4 万トン、カナダが 63.6 万トン、フランスが 44.0 万トン、米国が 33.6 万トンとなっており、豪州の輸入シェアは減少したものの、依然として約 40%と高い水準となっている。

小麦－中国（冬小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	137.0	137.7	136.6 (138.0)	-	▲ 0.8
消費量	148.0	148.0	153.5 (146.3)	-	▲ 3.7
うち飼料用	35.0	33.0	37.0 (28.0)	-	▲ 12.1
輸 出 量	0.9	1.0	0.9 (1.2)	-	▲ 5.3
輸 入 量	9.6	13.3	11.0 (10.7)	-	▲ 17.2
期末在庫量	136.8	138.8	132.0 (139.7)	-	▲ 4.9
期末在庫率	91.9%	93.2%	85.5% (94.8%)	-	▲ 7.7
(参考)					
収穫面積(百万ha)	23.57	23.52	23.63 (23.63)	-	0.5
単収(t/ha)	5.81	5.86	5.78 (5.78)	-	▲ 1.4

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2024)
IGC 「Grain Market Report」(14 March 2024)

図 中国の小麦生産量、消費量、輸入量の推移



表 中国の小麦輸入量と輸入先国

(輸出货量：万トン、シェア：%)

国 名	2024年1月～2024年2月		2023年1月～2023年12月		2022年1月～2022年12月	
	輸入量	シェア	輸入量	シェア	輸入量	シェア
豪州	96.4	38.5	693.9	57.4	572.2	57.5
カナダ	63.6	25.4	254.8	21.1	179.1	18.0
フランス	44.0	17.6	82.5	6.8	170.4	17.1
米国	33.6	13.4	92.6	7.7	62.6	6.3
カザフスタン	6.6	2.6	51.9	4.3	3.6	0.4
ロシア	5.6	2.2	28.5	2.4	4.0	0.4
その他	0.5	0.2	5.7	0.5	4.0	0.4
計	250.3	100.0	1,209.9	100.0	996.0	100.0

資料：中国海関統計をもとに農林水産省で作成

< ロシア > 2023/24 年度の輸出量は史上最高の 52.0 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量(クリミア地域分を含まず)は、前月予測からの変更はなく、91.5 百万トンの見込み。史上最高であった前年度(92.0 百万トン)に比べ 0.5%減少するものの、過去 5 年平均(79.6 百万トン)を 15.0%上回り史上 2 位となる見込み。

種類別の生産量は、冬小麦及び春小麦とも前月予測からの変更はなく、それぞれ 64.0 百万トン(前年度比 5.9%減)、27.5 百万トン(同 14.6%増)の見込み。春小麦の単収は、生育期の乾燥天候の影響や収穫期の降雨の影響を受けず史上最高となった。

ロシア気象センターによれば、2024/25 年度の冬穀物の生育状況は、2024 年 3 月時点でロシアヨーロッパ部北部・中部では、気温が大部分の地域で平年より高く、気温の上昇で雪溶け地域が広がり、再生長期に入っている地域があるものの、スノーカバーに覆われ再成長が始まっていない地域も残っている。なお、一部地域では根腐れの懸念がある。ヨーロッパ部南部では、気温は概ね平年並みで、一部地域では平年より高く、生長が進んでおり、作柄は概ね良好である。ロシアアジア部では、気温が平年より高く、作柄は概ね平年並みである。

ロシア農業省によれば、4 月 12 日現在の春小麦の作付面積は 27.3 万ヘクタールであり、作付予定面積に対し進捗率 2%、前年同期に比べ 5.5 万ヘクタール減となっている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、4 月 8 日時点の輸出価格(FOB)は、競争力のある価格を背景に旺盛な需要となり 12 ドル/トン上昇し、211 ドル/トンとなったものの、主要輸出 6 か国(ロシアのほか、米国、カナダ、豪州、EU、アルゼンチン)中で最も価格競争力がある。

2023/24 年度の輸出量は、前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、52.0 百万トンとなる見込み。輸出余力が潤沢で好調な輸出ペースを受け史上最高であった前年度(47.5 百万トン)を更に 9.5%上回る見込み。

現地情報会社等によれば、2023/24 年度のうち 2023 年 7 月から 2024 年 3 月までの輸出量は、3,936.0 万トンと、過去最高であった 2022/23 年度の同期間(3,585.3 万トン)を 9.8%上回った。また、3 月の輸出量は 434.6 万トンと、過去 3 年平均(260.8 万トン)を 66.6%上回った。同月の輸出先国は、エジプト(27.0%)、トルコ(8.3%)、カザフスタン(6.5%)の順。なお、デュラム小麦は欧州への輸出量増加で国内価格が上昇したため、2023 年 12 月～本年 5 月まで禁輸措置を導入。

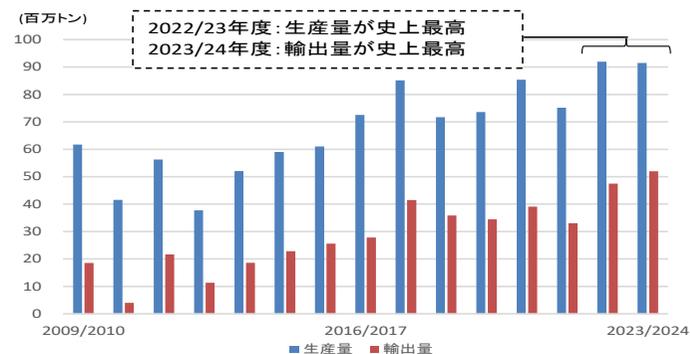
小麦—ロシア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年7月～24年6月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	75.2	92.0	91.5 (90.4)	-	▲ 0.5	
消費量	41.8	42.3	42.0 (43.4)	▲ 1.0	▲ 0.6	
うち飼料用	18.5	19.0	19.0 (18.9)	▲ 1.0	-	
輸出量	33.0	47.5	52.0 (48.1)	1.0	9.5	
輸入量	0.3	0.3	0.3 (0.1)	-	-	
期末在庫量	12.1	14.6	12.4 (10.4)	-	▲ 15.0	
期末在庫率	16.2%	16.3%	13.2% (11.3%)	-	▲ 3.1	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	27.63	29.00	28.83 (29.00)	-	▲ 0.6	
単収(t/ha)	2.72	3.17	3.17 (3.14)	-	-	

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2024)
IGC 「Grain Market Report」(14 March 2024)

図 ロシアの小麦生産量と輸出量の推移



資料: USDA 「PS&D」(2024.4.11)

表 ロシア産小麦の輸出量と輸出先国

(輸出量:万トン、シェア:%)

2023/24年度 (2024年3月)			2023/24年度 (2023年7月～2024年3月)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
エジプト	117.3	27.0	エジプト	605.2	15.4
トルコ	36.2	8.3	トルコ	518.7	13.2
カザフスタン	28.4	6.5	バングラデシュ	285.6	7.3
リビア	25.3	5.8	カザフスタン	223.2	5.7
サウジアラビア	23.8	5.5	パキスタン	202.0	5.1
バングラデシュ	22.4	5.2	アルジェリア	178.5	4.5
メキシコ	14.6	3.4	インドネシア	143.7	3.7
その他	166.6	38.3	その他	1,779.1	45.2
計	434.6	100.0	計	3,936.0	100.0

資料: 現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞ 2023/24年度の輸出量は前月予測から1.5百万トン上方修正

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、前月予測からの変更はなく23.4百万トンの見込み。収穫面積は前年度に比べ減少も、良好な天候による単収の上昇を受け、前年度(21.5百万トン)を8.8%上回っている。ただし、ロシアのウクライナ侵攻前の2021/22年度(33.0百万トン)と比べると29.1%下回る。

ウクライナ農業政策食料省によれば、2024/25年度の冬小麦の作付面積は4.3百万ヘクタールと、前年度から0.3百万ヘクタール減少する見込み。2024年3月は、国内全体で非常に温暖な天候となっており、3月上旬は国内全体でほとんど降雨がなかったが、中旬から下旬では大部分の地域で平年を上回る降雨となっている。この温暖な天候と十分な降水量を受け、3月末時点での冬小麦の生育段階は、分けつ期から三葉形成期を迎えており、作柄は概ね良好及び並となっている。

2024/25年度の春小麦の作付面積は0.2百万ヘクタールと、前年度から僅かに増加する見込み。4月11日現在の春小麦の作付進捗率は70.7%（前年同期74.8%）となっている。

【貿易状況・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、臨時回廊からの輸出が好調に推移していることから、前月予測から1.5百万トン上方修正され17.5百万トンと、前年度に比べ2.2%増加するものの、5年平均(18.0百万トン)では2.6%減少の見込み。黒海のアデーサ港等の主要輸出港からのアフリカ及びアジア向け輸出が黒海穀物イニシアティブの履行停止の影響を受け輸出量が減少していたが、2023年8月の臨時回廊の設置で輸出量は増加している。

ウクライナ政府等によれば、2023/24年度のうち2023年7月から2024年3月までの輸出量は、1,365.9万トン(ロシアのウクライナ侵攻前の2020/21年度同時期の5.2%減)。この間、黒海穀物イニシアティブの履行停止に伴い7月の輸出量は84.1万トンに減少したものの、2023年8月の臨時回廊の設置を受け、輸出量は増加傾向となり2024年3月の輸出量は200.1万トンとなっている。同月の輸出先国は、スペイン(23.9%)、エジプト(10.7%)、バングラデシュ(8.4%)の順。また、同月の輸送手段別の小麦輸出量は、船舶94.3%、鉄道4.6%、自動車0.5%と大部分が船舶輸送となっている。小麦の安定的な供給の維持には臨時回廊が支障なく機能し続けることが条件となっている。

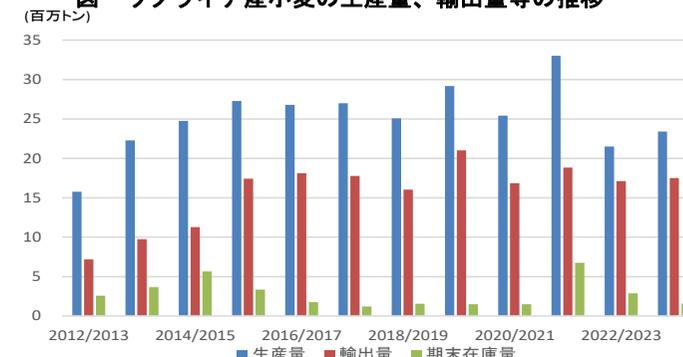
小麦－ウクライナ（主に冬小麦を栽培）

(単位:百万トン)

年度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年7月～24年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	33.0	21.5	23.4 (24.5)	-	8.8
消費量	9.5	7.8	7.3 (12.3)	▲ 0.4	▲ 6.4
うち飼料用	3.5	3.0	2.5 (2.4)	▲ 0.2	▲ 16.7
輸出量	18.8	17.1	17.5 (12.5)	1.5	2.2
輸入量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	33.3
期末在庫量	6.3	2.9	1.6 (1.6)	▲ 1.7	▲ 45.5
期末在庫率	22.1%	11.6%	6.4% (6.3%)	▲ 7.5	▲ 5.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	7.41	5.60	5.05 (6.32)	-	▲ 9.8
単収(t/ha)	4.45	3.84	4.63 (4.54)	-	20.6

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(史上最高の穀物単収→ 33.0 t/ha)
IGC「Grain Market Report」(14 March 2024)

図 ウクライナ産小麦の生産量、輸出量等の推移



資料：USDA「PS&D」(2024.4.11)をもとに農林水産省で作成

表 ウクライナ産小麦の輸出量の推移

(単位:千トン)

年度	月	小麦輸出量	輸送手段別			
			港湾	鉄道	自動車	フェリー他
2023年	7月	841	678	123	33	8
	8月	1,224	972	159	50	44
	9月	1,273	964	235	43	31
	10月	1,341	1,065	232	24	21
2024年	11月	1,131	956	160	11	4
	12月	1,844	1,730	85	7	22
	1月	1,504	1,376	101	20	7
	2月	2,499	2,383	95	16	6
	3月	2,001	1,887	92	10	13
計		13,659	12,009	1,282	213	156

資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2023/24 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・EU 等で上方修正されたものの、南アフリカ、アルゼンチン、メキシコ等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

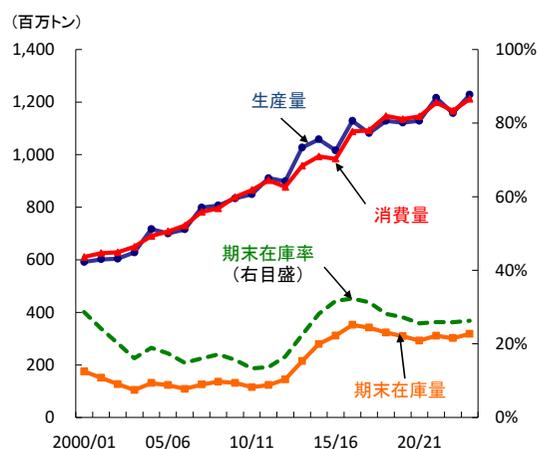
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・米国、インド等で上方修正されたものの、アルゼンチン等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・ロシアで上方修正されたものの、南アフリカ、インド等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」（2024.4.11）をもとに農林水産省にて作成

◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

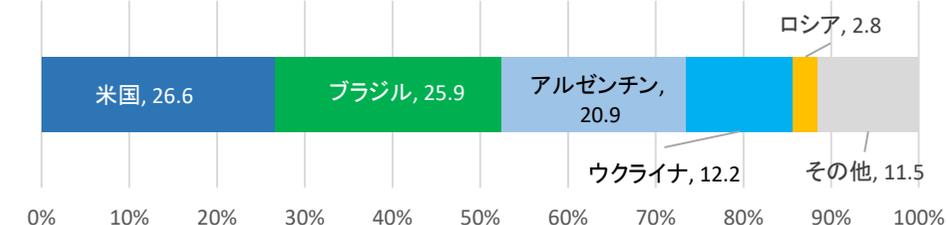
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	1,216.1	1,157.7	1,227.9	▲ 2.4	6.1
消費量	1,198.3	1,166.3	1,211.8	▲ 0.5	3.9
うち飼料用	743.3	729.6	759.0	▲ 2.7	4.0
輸出量	206.4	180.2	200.6	▲ 1.7	11.3
輸入量	184.4	172.8	187.5	▲ 2.0	8.5
期末在庫量	310.8	302.2	318.3	▲ 1.4	5.3
期末在庫率	25.9%	25.9%	26.3%	▲ 0.1	0.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(11 April 2024)

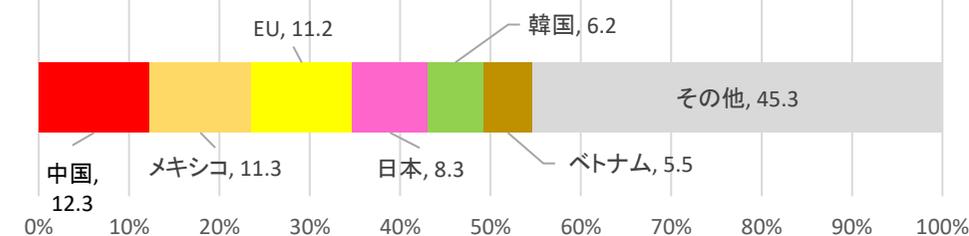
○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,227.9 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの輸出量(200.6 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの輸入量(187.5 百万トン) (単位：%)



(2) 国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 2024/25 年度の作付意向面積は、前年度より 4.9%減

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積の増加（対前年度比 9.9%増）や単収の増加（同 2.2%増で史上最高）を受け、前年度より 12.4%増の 389.7 百万トンと史上最高の見通し。収穫面積の増加については、肥料価格の高騰が前年度から落ち着いたことを受けて、とうもろこしを選択した農家が増加したことも要因とみられる。

USDA 「Prospective Plantings」(2024.3.28) によれば、これから作付けされる 2024/25 年度の作付意向面積は、36.4 百万ヘクタールと、前年度より 4.9%減の見込み。現在の価格相場は大豆の作付けに有利であるため、多くの農家がとうもろこしから大豆の作付けに切り替えるとみられる。

USDA 「Crop Progress」(2024.4.15) によれば、とうもろこしの作付進捗率は 6%と、前年度同期（7%）を下回り、過去 5 年平均（5%）を上回っている。

USDA 「Weekly Weather and Crop Bulletin」(2024.4.16) によれば、4 月上旬、中西部の一部地域で降雨過多により作付作業が遅れたものの、作物の発芽に必要な水分量が確保された。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、直近の飼料用及びエタノール用等消費量が予想を上回ったことなどを受け前月予測から 1.3 百万トン上方修正され、飼料用、エタノール用等の需要の増加により、前年度に比べ 3.8%増の 317.6 百万トンの見通し。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、国際的なとうもろこし価格の低下に伴う需要増加を受けた輸出の回復期待から、前年度より 26.4%増の 53.3 百万トンの見込み。他方で、2023/24 年度に輸入が増加すると見込まれる中国への輸出をめぐり、前年度が史上最高の生産見通しとなったブラジル産等との輸出競争が激化する見通し。

なお、2024 年 3 月の輸出量は 588.5 万トンと、前年同月の 498.4 万トンより 18.1%増加。干ばつにより減産したメキシコ向けの輸出量が前年同月比で 27.8%増加した。

USDA によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、消費量の増加を受けて前月予測から 1.3 百万トン下方修正されたものの、増産を受けて前年度より 56.0%増の 53.9 百万トンの見込み。期末在庫率は前年度より 4.6 ポイント上昇し 14.5%と、過去 3 年平均（9.2%）を上回っている。

とうもろこし－米国

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年9月～24年8月)		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	381.5	346.7	389.7	-	12.4
消費量	315.7	306.0	317.6	1.3	3.8
うち飼料用	144.0	139.4	144.8	0.6	3.9
エタノール用等	135.1	131.5	137.2	0.6	4.3
輸 出 量	62.8	42.2	53.3	-	26.4
輸 入 量	0.6	1.0	0.6	-	▲ 34.7
期末在庫量	35.0	34.6	53.9	▲ 1.3	56.0
期末在庫率	9.2%	9.9%	14.5%	▲ 0.4	4.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	34.39	31.85	35.01	-	9.9
単収(t/ha)	11.09	10.89	11.13	-	2.2

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2024)

図 米国産とうもろこしの生産量、収穫面積、単収の推移

(千万 t, 百万 ha) (t/ha)



資料：USDA 「PS&D」(2024.4.11) をもとに農林水産省にて作成。

表 米国産とうもろこしの輸出量と輸出先国 (輸出量：万トン、シェア：%)

2024年3月			2022/23年 (2022年9月～2023年8月)		2021/22年 (2021年9月～2022年8月)			
国	輸出量	シェア	国	輸出量	シェア	国	輸出量	シェア
メキシコ	212.2	36.1	メキシコ	1342.1	36.1	中国	3123.0	59.8
日本	116.6	19.8	中国	749.5	20.2	メキシコ	455.8	8.7
コロンビア	71.4	12.1	日本	676.6	18.2	ドイツ	321.6	6.2
韓国	57.5	9.8	コロンビア	228.8	6.2	日本	208.7	4.0
その他	130.8	22.2	その他	718.1	19.3	その他	1393.1	21.3
計	588.5	100	計	3715.1	100	計	5502.2	100

資料：USDA 「Federal Grain Inspection Service Yearly Export Grain

Totals」をもとに農林水産省にて作成。

＜ ブラジル ＞ 2023/24 年度の生産量は高温乾燥により減少

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、史上最高の豊作となった前年度より 9.5%減の 124.0 百万トンの見込み。

ブラジル食料供給公社 (CONAB) の月例報告 (2024.4.11) によれば、2023/24 年度のとうもろこしの生産量は、前年度比 15.9%減の 111.0 百万トンの見込み (P.23 大豆-ブラジルのクローズアップ参照)。夏とうもろこしは、エルニーニョ現象による南部での作付期の降雨過多の影響等により、前年度比 14.7%減の 23.4 百万トンの見込み。冬とうもろこしも、中西部での高温乾燥の影響を受け、前月から 1.7 百万トン下方修正され、前年度比 16.2%減の 87.6 百万トンの見込み。

USDAによれば、夏とうもろこしが主に栽培されている南部では、4月上旬、生育に適した降雨と夏の温暖な気候からとうもろこしの成熟が急速に進んだ。南部のリオ・グランデ・ド・スール州における夏とうもろこしの収穫進捗率は4月11日時点で77%と、前年度同期(80%)より遅れている。

一方、冬とうもろこしについては、4月上旬現在、生育に適した降雨があった。冬とうもろこしの最大生産州である中西部のマット・グロッソ州等では、順調に生育している。一方、南部のパラナ州等の一部地域では、3月の降雨不足により作柄の悪化が懸念されている。

【需要状況】USDAによれば、2023/24 年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用及び加工用ともに需要増加等から、前年度より 2.6%増の 78.5 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、史上最高となった前年度より 4.2%減の 52.0 百万トンとなり、米国に次ぐ世界第2位の輸出国に後退する見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2024 年 1～3 月の輸出量は 7.0 百万トンで、前年度同期比 28%減。内訳は、中国 (1.5 百万トン)、イラン (0.9 百万トン)、エジプト (0.7 百万トン) の順。2024 年 3 月のとうもろこし輸出量は季節的に減少しており、大豆の輸出が一巡し、輸送や港湾の輸出キャパシティに余裕が出てくる本年後半以降、冬とうもろこしの収穫を受け本格化するとみられる。

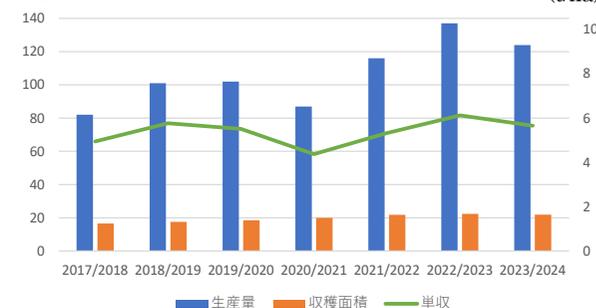
とうもろこし-ブラジル

(大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが約8割、夏とうもろこしは約2割)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年3月～25年2月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	116.0	137.0	124.0 (121.5)	-	▲ 9.5
消費量	70.5	76.5	78.5 (82.7)	-	▲ 2.6
うち飼料用	59.5	63.5	64.5 (57.0)	-	▲ 1.6
輸 出 量	48.3	54.3	52.0 (40.9)	-	▲ 4.2
輸 入 量	2.6	1.3	1.2 (2.0)	-	▲ 9.8
期末在庫量	4.0	11.5	6.2 (5.7)	0.1	▲ 45.9
期末在庫率	3.3%	8.8%	4.8% (4.6%)	0.1	▲ 4.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	21.80	22.40	21.90 (20.60)	-	▲ 2.2
単収(t/ha)	5.32	6.12	5.66 (5.90)	-	▲ 7.5

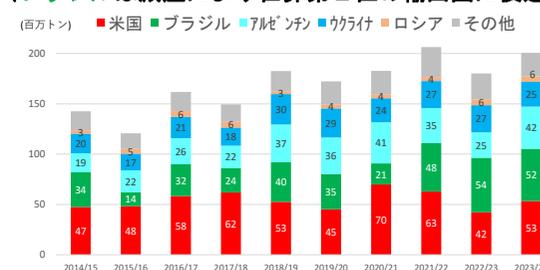
資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2024)、
IGC「Grain Market Report」(14 March 2024)

図 ブラジル産とうもろこしの生産量、収穫面積、単収の推移
(百万t,百万ha) (t/ha)



資料：USDA「PS&D」(2024.4.11) をもとに農林水産省にて作成。

図 世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移
(百万トン) (ブラジルは減産により世界第2位の輸出国に後退)



資料：USDA「PS&D」(2024.4.11) をもとに農林水産省にて作成。

< アルゼンチン > 2023/24 年度の生産量は、前年度から回復する見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実績は、単収の引下げを受けて前月予測から 1.0 百万トン下方修正されたものの、高温・乾燥により生産量が激減した前年度に比べ降雨に恵まれ単収が増加することを受けて、大きく回復する見通しから、52.8%増の 55.0 百万トンで史上最高となる見込み。

アルゼンチン政府によれば、4 月 11 日時点でとうもろこしの収穫進捗率は 19%と、前年度同期 (18%) より進んでいる。

ブエノスアイレス取引所週報 (2024.4.11) によれば、主産地の中部で収穫が順調に進められている一方、病害虫のヨコバイによる被害が発生している。

USDA によれば、4 月上旬、温かい天候で降雨に恵まれ、生育に好影響となった。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、飼料用需要の引下げを受けて前月予測から 1.0 百万トン下方修正されたものの、増産に伴い需給が緩和し、飼料用需要が回復することから、前年度より 14.9%増の 13.1 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、高温・乾燥により減産した前年度から生産量が大きく回復し、供給余力が出てきていることに加え、ペソ安により輸出競争力が高まる見通しから、前年度より 66.4%増の 42.0 百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2024 年 1・2 月の輸出量は 3.9 万トンで、2022/23 年度産の減産から回復したことを受け、前年度同期 (2.5 万トン) 比で 56%増となった。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7%から 12%へ引き上げ、継続している。また、国内向け穀物供給不足の回避と食料品価格の上昇を抑制するため、輸出上限数量を設定しており、2022/23 年度のとうもろこし輸出上限数量は 26 百万トン。

前年 12 月 10 日、新大統領に右派のミレイ氏が就任した。同 12 日、カプート経済相は通貨ペソの公式レートを引下げ、1 ドル=800 ペソとした。なお、「OIL WORLD Weekly」(2024.2.2) によれば、政府は、とうもろこしの輸出税を 12%から 15%に引き上げることを検討していたものの、農業団体等の強い抵抗を受けて断念し、当面の間 12%のまま維持される見通し。

とうもろこしーアルゼンチン

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年3月~25年2月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	49.5	36.0	55.0 (60.0)	▲ 1.0	52.8
消費量	14.2	11.4	13.1 (21.3)	▲ 1.0	14.9
うち飼料用	10.1	7.2	8.8 (16.0)	▲ 1.0	22.2
輸 出 量	34.7	25.2	42.0 (39.0)	-	66.4
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	0.01	-
期末在庫量	1.8	1.2	1.1 (3.4)	0.02	▲ 6.8
期末在庫率	3.7%	3.2%	2.0% (5.7%)	0.04	▲ 1.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	7.10	6.75	7.00 (8.20)	-	3.7
単収(t/ha)	6.97	5.33	7.86 (7.44)	▲ 0.14	47.5

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2024)
IGC 「Grain Market Report」(14 March 2024)

図 アルゼンチン産とうもろこしの生産量、収穫面積、単収の推移



資料：USDA 「PS&D」(2024.4.11) をもとに農林水産省にて作成。

写真：北部サンタフェ州の遅植えとうもろこしの圃場風景 (2024 年 3 月 30 日撮影)



本圃場のとうもろこしの生育ステージは開花期～乳熟期にある。
収穫作業は、現在の生育状況から 6～7 月に見込まれる。
予想単収は 10 トン/ヘクタールを上回る見込み。

< 中国 > 単収及び収穫面積の増加を受け、生産量は史上最高

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、中国国家统计局による収穫面積及び単収の増加見込みを受けて、前年度より4.2%増の288.8百万トンとなり、史上最高となる見込み。

4月上旬、四川省では作付期を迎えている。主産地の黒竜江省で今後作付けが開始される見通し。

【需要状況】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、とうもろこし国際価格の低下等から、前年度より2.3%増の306.0百万トンと史上最高の見込み。背景には国内の堅調な食肉需要があり、中国国家统计局（2024.1.17）によれば、2023年の食肉生産量は9,641万トンと、前年比で4.5%増。ただし、業界情報によれば、直近では中国の経済成長が鈍化し、豚肉の価格が低迷する中、中国政府は3月から国内の養豚飼育数の生産目標を減らす供給過剰対策を開始しており、飼料用需要減少につながるとの見方もある。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内の飼料用需要の増加を背景として、国際価格が国内価格を下回っているほか、特に2022年末から開始されたブラジルからの輸入が増加すると予想されていることもあり、前年度より22.9%増の23.0百万トンの見込み。

農業農村部によれば、2024年1・2月の輸入量は、前年度同期より16.2%増の619.2万トン。内訳は、ブラジル（410.3万トン）、ウクライナ（114.1万トン）、米国（76.7万トン）の順。2022年11月以降開始されたブラジル産とうもろこしの輸入が、2022/23年度のブラジル産の豊作による安価な輸出価格を受けて大幅に増加し、第1位の輸入先国となった。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報2024年2月号」によると、2月の国内価格は、春節等の休日が重なったため売買活動が不活発となったことにより、2,480元/トンと前月（2,500元/トン）から小幅に下落した。

USDAによれば、2023/24年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、国内産の増産と輸入の増加により前年度より2.8%増の211.9百万トンの見込み。

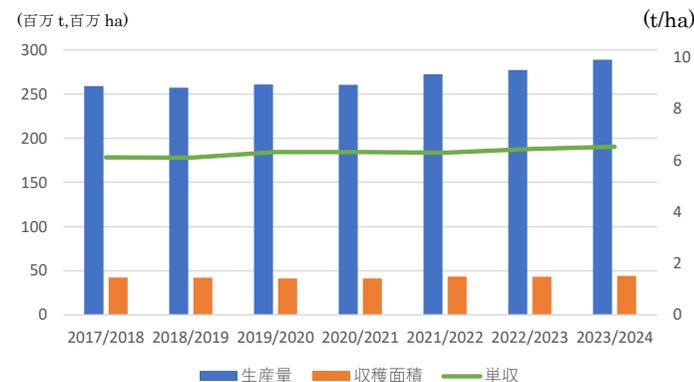
とうもろこし—中国

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	272.6	277.2	288.8 (291.0)	-	4.2
消費量	291.0	299.0	306.0 (315.5)	-	2.3
うち飼料用	209.0	218.0	225.0 (213.0)	-	3.2
輸 出 量	0.0	0.0	0.0 (0.1)	-	-
輸 入 量	21.9	18.7	23.0 (23.0)	-	22.9
期末在庫量	209.1	206.0	211.9 (178.3)	-	2.8
期末在庫率	71.9%	68.9%	69.2% (56.5%)	-	0.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	43.32	43.07	44.22 (44.20)	-	2.7
単収(t/ha)	6.29	6.44	6.53 (6.58)	-	1.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2024)、
IGC「Grain Market Report」(14 March 2024)

図 中国産とうもろこしの生産量、収穫面積、単収の推移



資料：USDA「PS&D」(2024.4.11)をもとに農林水産省にて作成。

表 中国産とうもろこしの輸入量と輸入元国

(輸入量：万トン、シェア：%)

2024年1・2月			2023年1月～2023年12月			2022年1月～2022年12月		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
ブラジル	410.3	66.3	ブラジル	1,280.6	47.2	米国	1,486.5	72.1
ウクライナ	114.1	18.4	米国	714.4	26.3	ウクライナ	526.4	25.5
米国	76.7	12.4	ウクライナ	551.8	20.3	ミャンマー	19.4	0.9
南アフリカ	5.6	0.9	ブルガリア	73.9	2.7	ブルガリア	14.7	0.7
ロシア	5.5	0.9	ミャンマー	38.1	1.4	ロシア	9.5	0.5
ブルガリア	4.6	0.7	ロシア	29.4	1.1	ラオス	5.1	0.2
その他	2.4	0.4	その他	24.5	0.9	その他	0.2	0.0
計	619.2	100	計	2,712.7	100	計	2,061.8	100

資料：中国海関統計をもとに農林水産省で作成。

< ウクライナ > 2023/24 年度の生産量は、侵攻前の 2021/22 年度より 29.9%減

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実績は、前月予測からの変更はなく、前年度より収穫面積が減少（前年度比 6.2%減）も、天候に恵まれ単収が上昇（前年度比 16.3%増）したことを受け、前年度より 9.3%増となった。ただ、侵攻前の史上最高の豊作だった 2021/22 年度比では 29.9%減の 29.5 百万トンとなる見通し。

2023/24 年産の収穫は終了したとみられる。ウクライナ農業政策食料省によれば、4 月 11 日現在、2024/25 年産の作付けが開始されており、作付進捗率は 3 %と、前年度同期（1 %）より進んでいる。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、増産による供給増を受けて前年度より 2.0%増の 5.0 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、2023/24 年度の期首在庫の減少、黒海穀物イニシアティブの停止、主要輸出先である EU での増産による輸入需要の減少の影響を受け、前年度より 9.7%減、侵攻前の 2021/22 年度からも 9.3%減の 24.5 百万トンの見込み。オデーサ港から陸路を経由せず直接臨時回廊を経由するルートによる輸出も増加しつつあり、中国を始めとする世界各国への輸出が可能となっている。なお、4 月 5 日現在のウクライナ産の輸出価格は 177 ドル/トンと、米国産（193 ドル/トン）、ブラジル産（199 ドル/トン）を大きく下回っているものの、紅海情勢の悪化から海上保険料が上昇している点に留意する必要がある。

ウクライナ政府等によれば、2023 年 10 月～2024 年 3 月の輸出量は 1,571.5 万トン（海上輸送、陸路等による全ての輸出が含まれる）と、臨時回廊により輸出量が増加（2023 年 7～9 月平均と比較し、月平均で 201.8%増）したものの、黒海穀物イニシアティブが履行されていた前年度同期比では 8.5%減。輸出先国は、スペイン（408.5 万トン）、中国（255.6 万トン）、エジプト（195.6 万トン）、イタリア（131.0 万トン）の順。2023/24 年度に干ばつとなったスペイン向けが最大となっている。

USDA によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、増産による供給増から前年度より 0.7%増の 2.8 百万トンの見込み。ただし、輸出量がウクライナ侵攻前に比べ低水準に留まるため、侵攻前の 5 か年平均より 12%増。2023/24 年度の期末在庫率は、前年度から 0.8 ポイント増の 9.6%となる見込み。

とうもろこし-ウクライナ

(単位: 百万トン)

年度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)		
			予測値、() はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	42.1	27.0	29.5 (27.7)	-	9.3
消費量	8.2	4.9	5.0 (6.3)	-	2.0
うち飼料用	7.2	4.0	4.0 (4.5)	-	-
輸出量	27.0	27.1	24.5 (21.5)	-	▲ 9.7
輸入量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-
期末在庫量	7.8	2.8	2.8 (5.0)	-	0.7
期末在庫率	22.2%	8.7%	9.6% (18.0%)	-	0.8

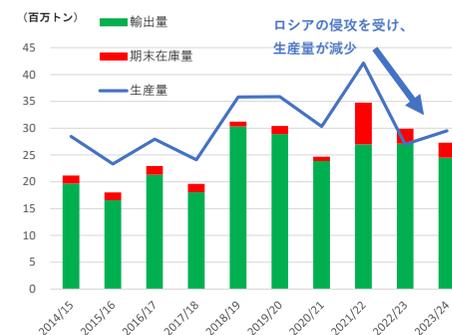
(参考)

収穫面積(百万ha)	5.49	4.05	3.80 (4.06)	-	▲ 6.2
単収(t/ha)	7.68	6.67	7.76 (6.83)	-	16.3

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2024)
IGC 「Grain Market Report」(14 March 2024)

図 とうもろこしの生産量、輸出量、期末在庫量の推移

(2023/24 年度の輸出量は、2017/18 年度以来の低水準の見通し)



資料: USDA 「PS&D」(2024.4.11) をもとに農林水産省にて作成。

表 ウクライナ産とうもろこしの主な輸出相手国

(単位: 千t)

	2024年3月		2023年10月～2024年3月	
	国名	輸出量	国名	輸出量
1	トルコ	630	スペイン	4,085
2	中国	615	中国	2,556
3	スペイン	340	エジプト	1,956
4	エジプト	268	イタリア	1,310
5	イタリア	170	オランダ	1,265
6	イスラエル	157	トルコ	1,037

資料: ウクライナ国家統計局のデータを基に農林水産省にて作成。

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2023/24 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・インドネシア等で下方修正されたものの、フィリピン等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

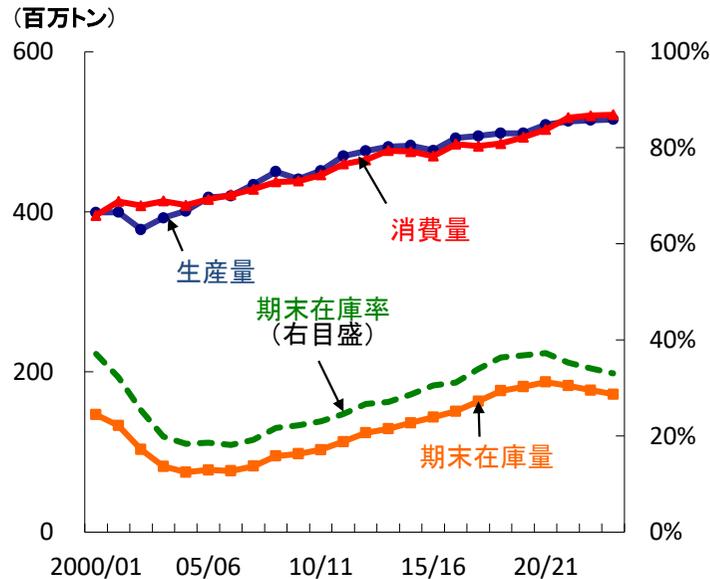
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・タイ等で上方修正されたものの、中国や米国等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↑

・中国等で下方修正されたものの、ベトナム等で上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↑



資料：USDA「PS&D」（2024.4.11）をもとに農林水産省にて作成

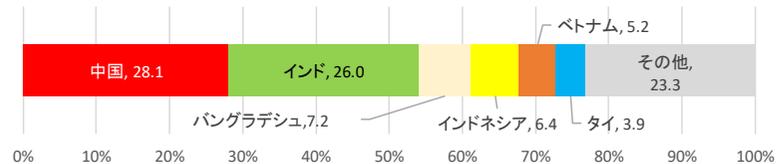
◎世界のコメ需給

(単位：百万精米トン)

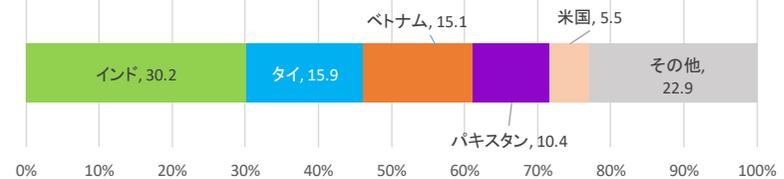
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	513.1	514.4	515.5	0.1	0.2
消 費 量	517.6	519.6	521.4	▲ 1.5	0.3
輸 出 量	56.9	54.1	52.9	0.4	▲ 2.1
輸 入 量	54.5	55.7	50.3	0.2	▲ 9.6
期末在庫量	183.2	178.0	172.2	2.5	▲ 3.3
期末在庫率	35.4%	34.2%	33.0%	0.6	▲ 1.2

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(11 April, 2024)

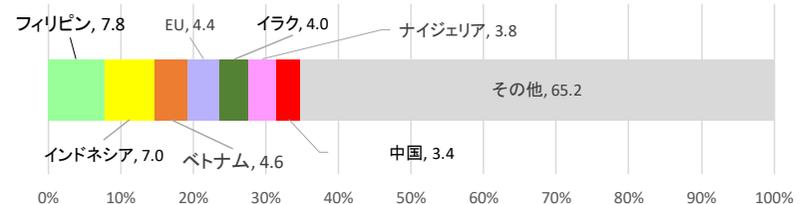
○ 2023/24年度 世界のコメの生産量(515.5百万トン) (単位：%)



○ 2023/24年度 世界のコメの輸出量(52.9百万トン) (単位：%)



○ 2023/24年度 世界のコメの輸入量(50.3百万トン) (単位：%)



(2) 国別のコメの需給動向

< 米国 > 2024/25 年度の作付面積はわずかに増加の見込み

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度比36.4%増の6.9百万トンの見込み。特に2年連続の干ばつに見舞われ生産量が激減していた中・短粒種の生産量が2.0百万トンと、前年度(1.0百万トン)から104.0%増で大きく回復することが要因。長粒種の生産量は4.9百万トンと、前年度(4.1百万トン)から19.8%増加。

同「Prospective Plantings」(2024.3.28)によれば、2024/25年度の作付意向面積は118.7万ヘクタールと、前年度(117.1万ヘクタール)からわずかに増加の見込み。このうち、長粒種の作付面積は、インドの輸出規制等を受けた高水準の価格の継続等から93.1万ヘクタールと、前年度(83.5万ヘクタール)から11.5%増加の見込み。これに対し、中・短粒種の面積は、2023/24年度の輸出の鈍化等から25.6万ヘクタールと、前年度(33.6万ヘクタール)から24.0%減少の見込み。

同「Crop Progress」(2024.4.15)によれば、主要生産6州の4月14日時点の作付進捗率は44%と、前年同期(33%)、過去5年平均(26%)よりも進展している。なお、カリフォルニア州ではまだ作付けが開始されていない。発芽率は18%と、前年同期(17%)、過去5年平均(14%)より高い。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、2023年12月~2024年2月の長粒種の消費量(推計)及び2024年3~7月の消費減少予測に基づき、前月予測から0.2百万トン下方修正されたものの、増産による供給量増加の見込みから、前年度比8.2%増の5.0百万トンと史上最高の見込み。

2023/24年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、本年7月まで、タイ等アジア諸国から香米の輸入が当初予想以上の水準での輸入見込みから、前年度比7.9%増の1.4百万トンと史上最高となる見込み。

2023/24年度の輸出量は、本年2月以降のメキシコ等中南米諸国からの長粒種の需要増大及びその継続見込みを受け、前月予測より0.1百万トン上方修正された。国内生産量の増加と、昨年秋からの南米のタイトな供給から、前年度比41.7%増の2.9百万トンの見込み。ただし今月から南米からの輸出が見込まれ、米国产と競合する見込み。2023/24年度(2023年8月1日~2024年4月4日)の主な輸出先国はメキシコ(73.1万トン)、ハイチ(28.7万トン)、日本(28.6万トン)、の順。

USDA「Rice Outlook」(2024.4.15)によれば、4月9日までの週のイラク向け長粒種(2等、碎米4%混入)の価格は800と、中南米諸国からの需要増大を受け先月から高止まりしている(P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照)。地中海向けカリフォルニア米(1等、碎米4%混入)である中粒種の4月9日までの週の価格は、生産量の増加見込みを受け835ドル/トンと、2023年9月初旬の史上最高値(1,650ドル/トン)から815ドル/トン下落し、本年2月以降、2021年5月以来の安値となっている。

コメー米国

主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは1/4
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約2割

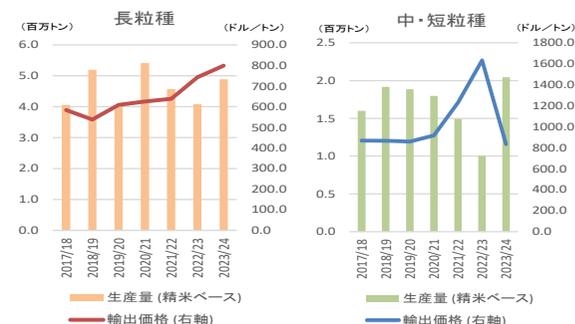
年度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年8月~24年7月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	6.1	5.1	6.9	-	36.4
消費量	4.7	4.6	5.0	▲0.2	8.2
輸出量	2.7	2.0	2.9	0.1	41.7
輸入量	1.2	1.3	1.4	-	7.9
期末在庫量	1.3	1.0	1.4	0.1	43.8
期末在庫率	17.1%	14.4%	17.5%	0.9	3.1

(単位:百万精米トン)

(参考)	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (見込み)	対前年度 増減率(%)
収穫面積(百万ha)	1.00	0.88	1.16	-
単収(もみt/ha)	8.64	8.28	8.57	-

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April, 2024)

図:米国の長粒種と中・短粒種の生産量・輸出価格の推移



資料:USDA「Rice Outlook」
(2024.4.15)より。価格は年度内の平均価格。なお、2023/24年度は2024年4月の価格。

< インド > ラビ米の収穫が開始

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、134.0百万トンと、前年度比で1.3%減も、過去5年平均比で7.2%増の見込み。単収は4.19もみトン／ヘクタールと、前年度比1.6%減となったものの、作付面積が48.00百万ヘクタールと、前年度より0.4%増加したことが要因。

農産物市場情報システム(2024.4)によると、3月28日現在、播種期及び生育期に水不足に見舞われた南部の州を除き、ラビ米の収穫が概ね良好な状況の中で始まっている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、政府が前年11月初旬に、2024年1月以降の穀物配給計画を5年間(2028年まで)延長したことで、人口増加に伴い配給対象者も増加する見込みから、前年度比3.0%増の118.0百万トンの見込み。政府の配給プログラムは8.13億人が対象となっており、コメ等が低所得世帯向けに無償又は低価格で配給される見込み。2023/24年度の調達量は、53~54百万トンと、政府の設定水準(42~44百万トン)を大きく上回る見込み(インド全体の消費量の半分に相当)。

2023/24年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、輸出規制強化による直近の輸出量減少を受け、前年度比21.0%減の16.0百万トンの見込み。ただ依然として世界第1位の輸出シェアを維持しており、世界全体のコメ輸出総量の約30%を占める。前年10月から2024年1月までの主な輸出先国は、イラク(36.9万トン)、サウジアラビア(26.9万トン)、ベナン(23.3万トン)、ソマリア(20.1万トン)の順。イラク、サウジアラビア向けはバスマティ米の輸出が主流となっている。

なお、インドは、非バスマティ米を中心に、2022年9月9日以降、様々な輸出規制を発動・強化している。本年2月21日には、インド財務省が、本年3月31日までの予定だったパーボイルド米の20%の輸出関税を無期限に延長した。詳細は右表を参照のこと。

USDA「Grain: World Markets and Trade」(2024.3.8)によれば、インド産米(碎米5%混入)の価格は、輸出規制強化後のデータが提示されていない。なお、規制前の前年7月時点の輸出価格は485ドル/トンと、アジア主要輸出国の中で最低水準の価格となっていた(P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照)。

2023/24年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度と同水準の35.0百万トンの見込み。

コメーインド

雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ(小麦)の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

(単位:百万精米トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月~24年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	129.5	135.8	134.0 (129.3)	-	▲ 1.3	
消費量	110.5	114.5	118.0 (113.7)	-	3.0	
輸出量	22.0	20.3	16.0 (13.7)	-	▲ 21.0	
輸入量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-	
期末在庫量	34.0	35.0	35.0 (35.7)	-	-	
期末在庫率	25.7%	26.0%	26.1% (28.0%)	-	0.1	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	46.28	47.83	48.00 (47.83)	-	0.4	
単収(もみt/ha)	4.20	4.26	4.19 (2.84)	-	▲ 1.6	

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April, 2024)
IGC「Grain Market Report」(14 March, 2024) (単収は精米t/ha)

表:インドのコメ輸出規制(2022年9月9日~)

対象品目	措置内容	発動日
全ての種類のコメの籾 (HS 1006 10)	輸出税 (20%)	2022.9.9~
全ての種類のコメの玄米 (HS 1006 20)	輸出税 (20%)	2022.9.9~
バスマティ米・精米 (HS1006 30 20)	関税: 12,000ルピー/t (日本円で約2万円/t) 最低輸出価格導入(1,200 ドル/ト→950ドル/トに引き 下げ(2023.10.26))	- 2023.8.27~
パーボイルド米・精米 (HS1006 30 10)	輸出税 (20%)	2023.8.25~
バスマティ米・パーボ イルド米以外の精米 (HS1006 30 90)	輸出禁止	2023.7.20~ 2024.12.31
碎米 (HS1006 40 00)	輸出禁止	2022.9.9~

※食料安全保障上の理由でインド政府が認める場合は、輸出を許可。
※有機米は本措置の対象外。
資料: インド政府の公示等をもとに農林水産省にて作成。

< 中国 > 東部から南部の早稲の生育は平年より早く良好

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、2023年7～9月の豪雨等により東北部(特に吉林省、黒竜江省及び遼寧省)で作付面積が引き下げられたことを受け、前年度比0.9%減の144.6百万トンの見込み。ただし、良好な土壌水分等を受け、単収は史上最高の見込み。なお東北部では、政府による大豆作付推進政策の反動を受けコメ作付面積が減少傾向にある。

USDA及び中国国家気象センター「中国気象農業頻道」(2024.4.8)によると、東部から南部にかけて、3月中旬から平年を上回る気温と平年よりも多い降雨が見られ、南東部では作付けされたばかりの早稲の生育に良好な条件となった。ただ、3月下旬から、南東部及び南部のほとんどの地域で季節外れの高温(30度以上)となり、特に南東部の早稲の生育に負荷がかかったが、4月初旬に豪雨があり、平年並みの気温に戻ったため早稲のストレスは軽減された。3月末現在、長江下流域の早稲は育苗期にある。南部の大部分は発芽期から移植・栄養生長期にある。平年より発育が早く、生育は良好。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測から1.7百万トン下方修正され、2023年9月以降のとうもろこし価格低下を受けた飼料用米の需要減少や、高齢化の進展や若年層の食生活の西洋化等に伴う食用需要の減少から、前年度比4.4%減の148.2百万トンの見込み。

2023/24年度の輸入量は、国際価格高騰による昨今の輸入量の減少から、前月予測から0.4百万トン下方修正され、前年度比61.2%減の1.7百万トンの見込み。中国はこれまで、もち米や香米に加え、特にとうもろこし等飼料用穀物の価格高騰を背景に、代替としてインド等から砕米を輸入してきたが、2022年9月以降、インドの輸出禁止等により輸入量は規制前の年度(2021/22年度、6.0百万トン)と比較して71.7%減少している。中国海関統計によれば、2024年1～2月の輸入量は21.8万トン(前年同月比64.1%減)、2023年1～12月の輸入量は259.7万トン(前年同期比57.8%減)となった。輸入国別では、1位がタイ(40.3%)、2位はミャンマー(38.1%)、3位がベトナム(9.6%)の順。

また、2023/24年度の輸出量は、本年3月の輸出量が予想を下回ったことから、前月予測から0.3百万トン下方修正され、2023/24年度の輸出量は、前年度とほぼ同水準の1.7百万トンの見込み。「一帯一路」政策の賛同国を拡大する目的から、同政策の関係国に対しコメの輸出促進を図っており、主要輸出先は、同政策の賛同国であるエジプトやトルコ。

期末在庫量は、消費量の下方修正を受け、前月予測から1.6百万トン上方修正されたものの、前年度比3.4%減の103.0百万トンの見込み。ただし、インドの期末在庫量(35.0百万トン)と合計すると世界の期末在庫量の約80%を占める。

コメー中国

北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ(粳)米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは3割程度

(単位:百万精米トン)

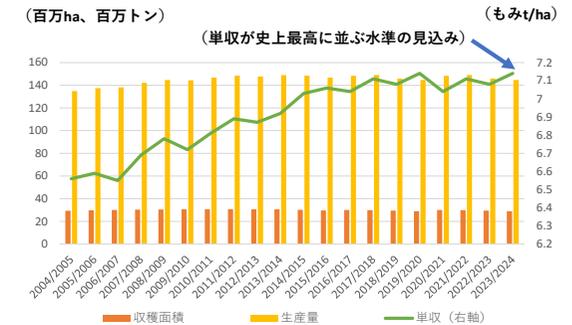
年度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	149.0	146.0	144.6 (144.6)	-	▲ 0.9
消費量	156.4	155.0	148.2 (148.0)	▲ 1.7	▲ 4.4
輸出量	2.1	1.7	1.7 (2.2)	▲ 0.3	▲ 2.3
輸入量	6.0	4.4	1.7 (2.7)	▲ 0.4	▲ 61.2
期末在庫量	113.0	106.6	103.0 (101.4)	1.6	▲ 3.4
期末在庫率	71.3%	68.0%	68.7% (67.5%)	2.0	0.7

(参考)

収穫面積(百万ha)	29.92	29.45	28.95 (29.45)	-	▲ 1.7
単収(もみt/ha)	7.11	7.08	7.14 (4.96)	-	0.8

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April, 2024)
IGC 「Grain Market Report」(14 March, 2024) (単収は精米t/ha)

図: 中国の生産量、収穫面積、単収の推移
(2004/05～2023/24年度)



資料: USDA 「PS&D」(2024.4.11)をもとに農林水産省にて作成

< タイ > 乾季米は灌漑用水不足や高温等から減産見込み

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、2023年5月から9月中旬にかけての平年を下回る降雨量から、前年度比4.4%減の20.0百万トンの見込み。

USDA及び現地情報によると、前年11月中旬から続く乾期の中、エルニーニョ現象の影響により、2月初旬から平年以上の気温の上昇がみられ、3月中旬には40度を超える暑さとなった。下旬には季節外れの降雨があったものの、3月末から4月中旬にかけて、再び40度以上と平年より高温となった。高温不稔による単収減少防止のため、灌漑用水を増水したものの、乾季米が収穫の最盛期を迎える中、水源の制約等から、作付面積、収穫量が前年度比で減少する見込み。

アセアン食料安全保障情報システム(2024.4)及び現地情報によると、乾季米は収穫期にある。作付面積は1.54百万ヘクタールで、収穫進捗率は70%。干ばつと激しい寒暖差で、中央部でイネ白葉枯病が発生したことから、単収は昨年度より減少の見込み。収穫面積も減少するため、生産量は昨年度より12%程度減少の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、減産見込みから、前年度比3.9%減の8.4百万トンの見込み。

タイ関税局によれば、2024年1~2月の輸出量は、前年同期比24.4%増の174.8万トンとなった。このうち、政府備蓄の不足に対処するため輸入を拡大しているインドネシア向けの輸出量は、前年同期の25.4万トンから倍増して51.1万トンと、最大の輸出先国となった。また、エルニーニョ現象による降雨不足で減産が見込まれるフィリピンは18.1万トン（前年同期1.3万トン）、米国は13.3万トン（同10.9万トン）、検疫問題で7年間輸入を停止していたタイ産米の輸入を2022年に再開したイラクは10.6万トン（同16.4万トン）をそれぞれ輸入した。

USDA「Grain: World Markets and Trade」(2024.4.11)によれば、4月9日までの週のタイ産米（長粒、2等精米）の輸出価格は、新穀の流入から値を下げ、前月から26ドル/トン下落し、590ドル/トンとなった（P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照）。なお、2023年12月中旬以降、不安定な情勢が続く紅海を迂回することによる、欧州や中東向けの輸送コストの増加や輸送日数の増加が懸念されている。

期末在庫量は、消費量の上方修正から前月より0.1百万トン下方修正され、減産予測から前年度比20.8%減の3.1百万トンの見込み。

コメータイ

夏期の雨季作と冬の乾季作で行われる。主にインデ
イカ米を栽培

(単位:百万精米トン)

年度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年1月~24年12月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	19.9	20.9	20.0 (19.7)	-	▲ 4.4
消費量	12.5	12.5	12.5 (12.7)	0.1	-
輸出量	7.7	8.7	8.4 (8.4)	-	▲ 3.9
輸入量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	100.0
期末在庫量	4.1	3.9	3.1 (3.2)	▲ 0.1	▲ 20.8
期末在庫率	20.5%	18.1%	14.6% (15.2%)	▲ 0.6	▲ 3.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.70	11.07	10.65 (11.00)	-	▲ 3.8
単収(もみt/ha)	2.81	2.86	2.85 (1.89)	-	▲ 0.3

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (11 April, 2024)

IGC 「Grain Market Report」 (14 March, 2024) (単収は精米t/ha)

表: タイの国別輸出量

(単位:万トン)

国名	2023年 1-2月	2024年 1-2月	増減量
1 インドネシア	25.4	51.1	25.7
2 フィリピン	1.3	18.1	16.8
3 米国	10.9	13.3	2.5
4 イラク	16.4	10.6	-5.8
5 コートジボアール	0.5	10.0	9.5
6 セネガル	9.9	6.3	-3.5
7 南アフリカ	8.9	6.2	-2.7
8 アンゴラ	0.8	4.7	3.8
9 中国	6.7	5.2	-1.5
10 日本	7.9	3.8	-4.1
計	140.5	174.8	34.3 (前年比24.4%増)

資料: タイ関税局 (2024.4)

< ベトナム > 南部メコンデルタ地域の冬春作（乾季米）は海水侵入で生産量減少

【生育・生産動向】USDA によれば、2023/24 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、単収が過去最高だった前年度の水準からわずかに減少も、収穫面積の増大により、前年度比 0.2%増の 27.0 百万トンの見込み。なお、肥料価格の高騰や高収益作物等（果物・野菜・養殖）への転換等から、生産量が史上最高の 2014/15 年度（28.2 百万トン）を境に緩やかな低下傾向にある。

アセアン食料安全保障情報システム（2024.4）によると、①北部は、冬春作（乾季米）が分けつ期から幼穂形成期にある。良好な天候と豊富な灌漑用水から、単収は増加見込み。②南部では、冬春作（乾季米）が収穫期にある。1.89 百万ヘクタールの作付面積のうち、現時点の収穫面積は 0.92 百万ヘクタール（48.7%）。現時点での単収は、6.8 もみトン／ヘクタール。メコンデルタ地域の海水の浸潤から生産量は平年より減少の見込み。③メコンデルタ地域では、夏秋作（雨季米）の作付が始まった。現在の作付面積は 0.24 百万ヘクタール。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の実輸出量は、2024 年 3 月の輸出が予想を上回ったことから、前月予測から 0.2 百万トン上方修正されたものの、アジア諸国等からの精米輸入需要が落ち着く見込みから、前年度比 2.8%減の 8.0 百万トンの見込み。

USDA 及び現地情報によれば、2022/23 年度の実輸出量は、フィリピンによる史上最高の輸入量の継続見込みや、インドネシアの 2023 年中の追加需要を受け、8.2 百万トンと前年度比 15.5%増で史上最高の見込み。特にインドネシアは、エルニーニョ等によるコメの減産見込みや、燃料価格高騰による投入財費用の高騰から、国内コメ価格が上昇。価格抑制のための在庫放出に加え、低所得世帯へのコメ配給等を受け、政府が設定する最低水準以下に在庫が低下。これを補うため、2023 年（1～12 月）は合計 306.3 万トンを輸入し、うちベトナム産の輸入は 114.8 万トン（37.5%）。なお、2024 年 1～4 月のコメの収穫量も前年度比で減少する見込みから、インドネシア政府は合計 360 万トンの輸入枠を決定した。

ベトナム関税総局によれば、2024 年 1～3 月の輸出量は 218.2 万トンと、前年同期（185.3 万トン）に比べ 17.8%増加した。主な輸出先国は、フィリピン（101.1 万トン、13.4%増）、インドネシア（44.5 万トン、199.7%増）、マレーシア（9.9 万トン、28.8%増）、コートジボワール（9.2 万トン、91.7%増）の順。

USDA 「Grain: World Markets and Trade」(2024.4.11)によれば、ベトナム産米（長粒種、5%碎米混入）の 4 月 9 日までの週の価格は、冬春作の流入から、前月の価格より 9 ドル／トン下落し、578 ドル／トンとなった。

コメベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

(単位:百万精米トン)

年度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年1月～24年12月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	26.7	26.9	27.0 (28.0)	-	0.2
消費量	21.4	21.4	21.2 (21.9)	-	▲ 0.9
輸出量	7.1	8.2	8.0 (8.1)	0.2	▲ 2.8
輸入量	1.7	1.8	2.3 (1.6)	0.7	27.8
期末在庫量	2.7	1.8	1.9 (2.6)	0.5	5.6
期末在庫率	9.3%	6.0%	6.4% (8.6%)	1.7	0.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	7.10	7.10	7.15 (7.11)	-	0.7
単収(もみt/ha)	6.01	6.07	6.05 (3.90)	-	▲ 0.3

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April, 2024)、
IGC 「Grain Market Report」(14 March, 2024) (単収は精米t/ha)

図：長粒種の FOB 価格の推移



資料: USDA 「Grain: World Markets and Trade」(2024.4.11)より。

II 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2023/24 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

- ・パラグアイで上方修正されたものの、南アフリカ等で下方修正され前月から下方修正された。史上最高の見込み。

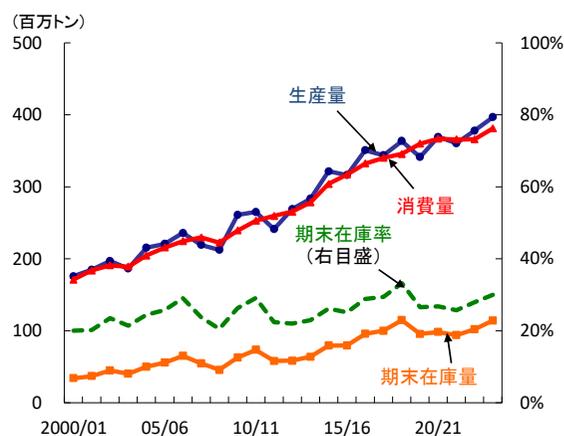
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

- ・EU 等で上方修正されたものの、米国等で下方修正され前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

- ・パラグアイ等で上方修正されたものの、米国、南アフリカ等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↓



資料：USDA 「PS&D」 (2024. 4. 11) をもとに農林水産省で作成

◎ 世界の大豆需給

(単位：百万トン)

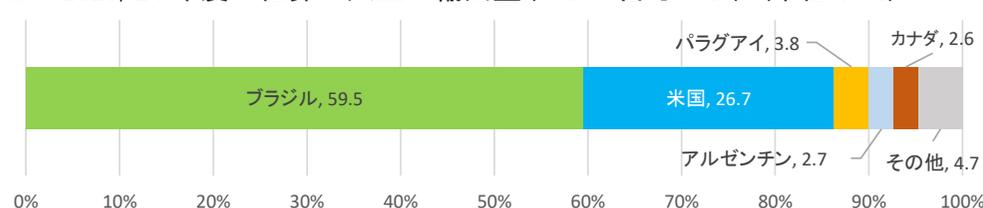
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	360.5	378.2	396.7	▲ 0.1	4.9
消費量	366.0	365.8	381.1	▲ 0.8	4.2
うち搾油用	316.5	315.0	328.0	▲ 0.2	4.1
輸出量	154.4	172.1	173.1	▲ 0.6	0.6
輸入量	154.5	167.9	170.3	▲ 0.4	1.5
期末在庫量	93.1	101.3	114.2	▲ 0.0	12.7
期末在庫率	25.4%	27.7%	30.0%	0.1	2.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (11 April 2024)

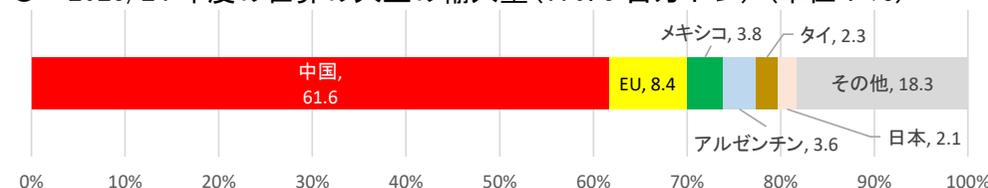
○ 2023/24 年度の世界の大豆の生産量 (396.7 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度の世界の大豆の輸出量 (173.1 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度の世界の大豆の輸入量 (170.3 百万トン) (単位：%)



(2) 国別の大豆の需給動向

< 米国 > 2024/25 年度の作付意向面積は、前年度より 3.5%増

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積の減少を受け前年度より 2.5%減の 113.3 百万トンの見通し。肥料価格の高騰が前年度から落ち着いたことを受けた大豆からとうもろこしへの作付転換により、大豆の収穫面積が減少したとみられる。

USDA 「Prospective Plantings」(2024.3.28) によれば、これから作付けされる 2024/25 年度の作付意向面積は、35.0 百万ヘクタールと、前年度より 3.5%増の見込み。現在の価格相場は大豆の作付けに有利であるため、多くの農家がとうもろこしから大豆の作付けに切り替えるとみられる。

USDA 「Crop Progress」(2024.4.15) によれば、作付進捗率は前年度同期並みの 3%と、過去 5 年平均(1%)を上回っている。

USDA 「Weekly Weather and Crop Bulletin」(2024.4.16) によれば、4月上旬、中西部の一部地域で降雨過多により作付作業が遅れたものの、作物の発芽に必要な水分量が確保された。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、作付意向面積が 2月のアウトルック・フォーラムでの予想を下回ったことによる種子用等消費の引下げを受けて前月予測から 0.3 百万トン下方修正されたものの、バイオ燃料・飼料用需要増による搾油の収益改善の見通しから、前年度より 4.3%増の 65.7 百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、直近の輸出ペースを受けて前月予測から 0.5 百万トン下方修正され、前年度より 14.6%減の 46.3 百万トンの見込み。8割以上の収穫が進展したブラジル産、収穫が開始したアルゼンチン産と比べ相対的な価格競争力が落ちていることが要因とみられる。また、米国国内のバイオ燃料用消費量が増加していることも要因である。

USDA によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、輸出量の引下げを受けて前月予測から 0.7 百万トン上方修正され、前年度より 28.8%増の 9.3 百万トンとなる見込み。期末在庫率は 8.3%で、過去 5 年平均(11.0%)を下回っており、引き続き低水準に留まる見通し。

大豆－米国

(単位：百万トン)

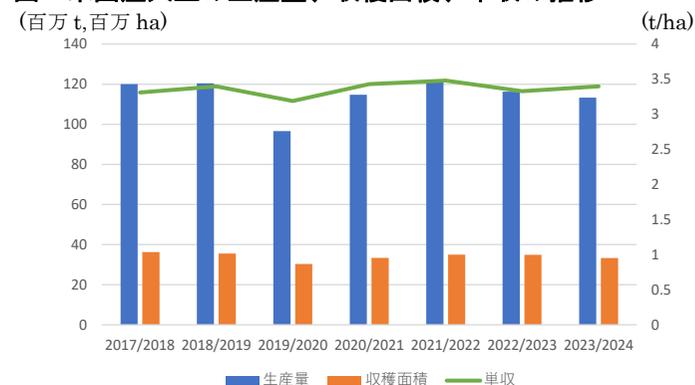
年度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年9月～24年8月)		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	121.5	116.2	113.3	-	▲ 2.5
消費量	62.9	63.0	65.7	▲ 0.3	4.3
うち搾油用	60.0	60.2	62.6	-	4.0
輸出量	58.6	54.2	46.3	▲ 0.5	▲ 14.6
輸入量	0.4	0.7	0.7	▲ 0.1	1.5
期末在庫量	7.5	7.2	9.3	0.7	28.8
期末在庫率	6.2%	6.1%	8.3%	0.7	2.1

(参考)

収穫面積(百万ha)	34.92	34.87	33.33	-	▲ 4.4
単収(t/ha)	3.48	3.33	3.40	-	2.1

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2024)

図 米国産大豆の生産量、収穫面積、単収の推移



資料：USDA 「PS&D」(2024.4.11) をもとに農林水産省にて作成

表 米国の大豆輸出量と輸出先国

2024年3月			2022/23年 (2022年9月～2023年8月)			2021/22年 (2021年9月～2022年8月)		
国	輸出量	シェア	国	輸出量	シェア	国	輸出量	シェア
中国	190.5	62.7	中国	312.3	59.8	中国	299.7	52.6
メキシコ	31	10.2	メキシコ	455.8	8.7	メキシコ	532.5	9.4
インドネシア	19	6.3	ドイツ	321.6	6.2	エジプト	396.8	7
日本	12.8	4.2	日本	208.7	4.0	ドイツ	291.8	5.1
ドイツ	12.7	4.2	インドネシア	188.1	3.6	日本	224.3	3.9
その他	37.9	12.4	その他	922.7	17.7	その他	1254.2	22.0
計	303.9	100	計	5219.9	100	計	5696.6	100

資料：USDA 「Federal Grain Inspection Service Yearly Export Grain

Totals」をもとに農林水産省にて作成。

< ブラジル > 2023/24 年度の生産量 (CONAB) は前年度より 5.2%減

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実績は、前月予測からの変更はなく、155.0 百万トン。作付面積は史上最高となるものの、単収が減少することから、生産量は史上最高の前年度より 4.3%減も、引き続き高水準を維持している。

ブラジル食料供給公社 (CONAB) の月例報告 (2024.4.11) によれば、2023/24 年度の実績は、とうもろこし等から収益性が高い大豆に作付けがシフトすることで収穫面積が増加するものの、生育初期の高温乾燥による単収減から前年度より 5.2%減の 146.5 百万トンの見込み。中西部マット・グロッソ・ド・スール州と南部パラナ州、南東部サンパウロ州等における降雨不足と高温を受けて、前月予測から 0.3 百万トン下方修正された。

USDA によれば、4月8日現在、パラナ州の収穫進捗率は 97%と、前年度同期 (94%) を上回り、収穫はほぼ完了している。CONAB によれば、4月8日時点の全国の収穫進捗率は 76%、最大生産州のマット・グロッソ州では 98%とほぼ完了した。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の実績は、前月予測からの変更はなく、減産による供給減を受けて前年度より 0.3%減の 56.8 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の実績は、前月予測からの変更はなく、生産量が 2年連続で高水準を維持し、価格競争力も高まる見込みから、前年度より 7.8%増の 103.0 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2024年1～3月の輸出量は 22.1 百万トンで、前年度同期 (19.1 百万トン) に比べ 15.7%増となっており、中国向け輸出が昨年引き続き堅調に推移していることが要因。輸出先は、中国 (15.9 百万トン)、スペイン (8.2 百万トン)、タイ (0.8 百万トン) の順。大豆収穫後の 3月となり、輸出最盛期に入っている。

2023年6月、北部のマラニョン州イタキ港と南部のサンパウロ州サントス港を結ぶ南北鉄道が開通した。さらに、マット・グロッソ州から南部サントス港まで輸送する鉄道の拡張工事も行われており、これらのアクセス改善が輸出のボトルネックを回避する一助になることが期待されている。

大豆—ブラジル

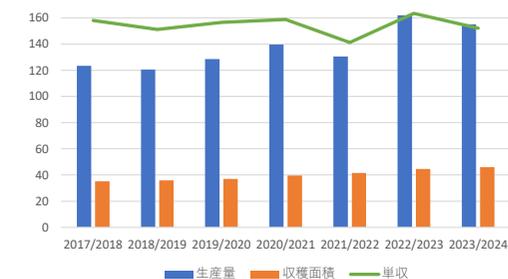
(単位: 百万トン)

年度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	130.5	162.0	155.0 (160.0)	-	▲ 4.3
消費量	54.0	56.9	56.8 (58.0)	-	▲ 0.3
うち搾油用	50.7	53.1	53.0 (55.0)	-	▲ 0.2
輸出量	79.1	95.5	103.0 (101.7)	-	7.8
輸入量	0.5	0.2	0.5 (0.5)	-	200.0
期末在庫量	27.6	37.4	33.1 (2.2)	-	▲ 11.5
期末在庫率	20.7%	24.5%	20.7% (1.4%)	-	▲ 3.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	41.60	44.60	45.90 (41.49)	-	2.9
単収(t/ha)	3.14	3.63	3.38 (3.86)	-	▲ 6.9

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (11 April 2024)
IGC 「Grain Market Report」 (14 March 2024)

図 ブラジル産大豆の生産量、収穫面積、単収の推移

(百万 t, 百万 ha) (t/ha)



資料: USDA 「PS&D」 (2024.4.11) をもとに農林水産省にて作成。

ブラジルのクロープカレンダー(中部から南部)

2023/24年度の実績は、2023年9月以降、順次開始。
2024年2月以降、大豆の収穫が行われ、その後、一部の圃場でとうもろこしを栽培。

2023/24年度	2023年				2024年								
	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9
夏とうもろこし (リオ・グランデ・ド・スール州等)	作付 4.0(百万ha)				収穫 23.4(百万t) → 収穫夏冬作計 111.0百万t								
冬とうもろこし (マット・グロッソ州、パラナ州等)	作付面積夏冬作計 20.4百万ha				作付 16.4(百万ha) → 収穫 87.6(百万t)								
大豆 (マット・グロッソ州、パラナ州等)	作付 45.2(百万ha)				収穫 146.5(百万t)								

資料: CONAB穀物レポート (2024.4.11)

< アルゼンチン > 2023/24 年度の生産量は、前年度より倍増

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、高温・乾燥の影響を強く受け大幅な減産となった前年度から回復する見通しから、前年度の2倍の50.0百万トンの見込み。

アルゼンチン政府によれば、4月11日現在、大豆の収穫進捗率は10%と、前年度同期（4%）より進んでいる。

USDA によれば、4月上旬、温かい天候で降雨に恵まれ、遅植え作物の生育に好影響となった。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、増産に伴い搾油量が回復することから、前年度比16.9%増の42.8百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】2023/24 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内生産量の増加に伴い輸入需要が減少することから、前年度より32.7%減の6.1百万トンの見込み。

2023/24 年度の輸出量は、前月予測から変更はなく、干ばつにより減産し価格競争力が弱まった前年度から生産量が回復する見込みから、前年度より9.8%増の4.6百万トンの見込み。

なお、2024年1～2月の輸出量は、前年度の干ばつによる減産からの回復を受けて385.7万トンで前年度（259.9万トン）より48%増。輸出先は、ベトナム（72.4万トン）、アルジェリア（64.6万トン）、ペルー（52.4万トン）の順。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021年1月以降、輸出税を大豆最大33%、大豆油及び大豆粕31%と設定。2022年3月に、大豆油及び大豆粕の輸出税について2022年末まで2%引き上げたが、2023年1月からは31%に戻している。

2023年12月10日、新大統領に右派のミレイ氏が就任した。同12日、経済相は通貨ペソの公式レートを現行の1ドル=350ペソから50%以上切り下げ、1ドル=800ペソにした。また、大豆の輸出税は引き続き最大33%に設定すると発表した。

なお、「OIL WORLD Weekly」（2024.2.2）によれば、政府は、大豆油及び大豆粕の輸出税を31%から33%に引き上げることを検討していたものの、農業団体等の強い抵抗を受けて断念し、当面の間31%のまま維持される見通し。ペソの更なる切り下げも見送られている。

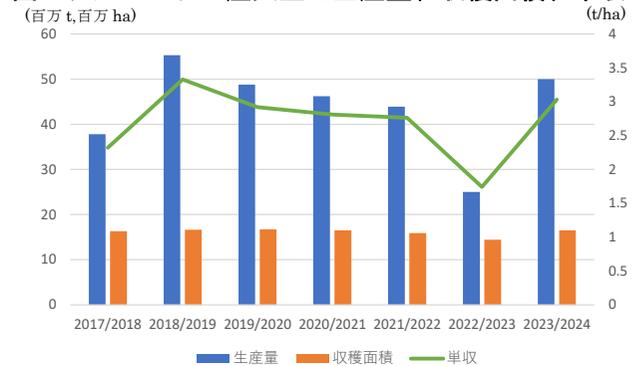
大豆—アルゼンチン

(単位: 百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	43.9	25.0	50.0 (50.0)	-	100.0
消費量	46.0	36.6	42.8 (49.3)	-	16.9
うち搾油用	38.8	30.3	35.5 (42.3)	-	17.1
輸 出 量	2.9	4.2	4.6 (4.9)	-	9.8
輸 入 量	3.8	9.1	6.1 (5.7)	-	▲ 32.7
期末在庫量	23.9	17.2	26.0 (10.8)	-	50.8
期末在庫率	48.9%	42.2%	54.8% (19.9%)	-	12.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	15.90	14.40	16.50 (15.87)	-	14.6
単収(t/ha)	2.76	1.74	3.03 (3.15)	-	74.1

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (11 April 2024)
IGC 「Grain Market Report」 (14 March 2024)

図 アルゼンチン産大豆の生産量、収穫面積、単収の推移



資料: USDA 「PS&D」 (2024.4.11) をもとに農林水産省にて作成。

写真: 北部サンタフェ州の大豆の圃場風景 (2024年3月26日撮影)



本圃場の大豆は、通常より遅い11月中旬に作付された。生育ステージは完熟期であり、1・2月の高温乾燥にも関わらず莢付きは良い。収穫作業は4月中旬が見込まれている。

< 中国 > 2023/24 年度の生産量・消費量・輸入量は史上最高

【生産・生育状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、中国国家统计局による収穫面積及び単収の増加見込みを受けて前年度より 2.8%増の 20.8 百万トンで史上最高の見込み。

なお、例年、4 月後半から主産地の黒竜江省等で作付けが開始される見込み。

2 月 3 日に発表された中国共産党・国務院（内閣に相当）の中央一号文件には、引き続き大豆の作付け確保や単収の向上等の取組等について記載された。

USDA 「Grain and Feed Annual」(2024.4.2)によれば、政府は大豆ととうもろこしの間作を奨励しており、2023/24 年度に間作の面積は、130 万ヘクタールと、前年度から 30%増加した。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、旺盛な食料需要に加え、国内の畜産物需要から大豆粕需要が増加することから、前年度より 2.6%増の 120.5 百万トンと史上最高の見込み。ただし、業界情報によれば、直近では中国の経済成長が鈍化し、豚肉の価格が低迷する中、中国政府は 3 月から国内の養豚飼育数の生産目標を減らす供給過剰対策を開始しており、飼料用需要減少につながるとの見方もある。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、ブラジルからの輸入増により前年度より 0.5%増の 105.0 百万トンと史上最高の見込み。

農業農村部によれば、2024 年 1・2 月の輸入量は、前年度同期より 8.8%減の 1,303.7 万トン。内訳は、ブラジル（696.4 万トン）、米国（495.7 万トン）、カナダ（68.2 万トン）の順となっている。ブラジルと米国を合わせたシェアが 9 割以上を占めている。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2024 年 2 月号」によると、2 月の国内価格は、春節等の休日重なったため売買活動が不活発となったことにより、5,620 元/トンと前月（5,660 元/トン）から下落した。

USDA によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 16.2%増の 37.6 百万トンと史上最高の見込み。2023/24 年度の期末在庫率は、前月予測からの変更はなく、前年度より 3.7 ポイント増の 31.2%となる見込み。

大豆—中国

(単位:百万トン)

年度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	16.4	20.3	20.8 (21.5)	-	2.8
消費量	110.3	117.5	120.5 (124.4)	-	2.6
うち搾油用	90.0	96.0	98.0 (102.5)	-	2.1
輸出量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	11.1
輸入量	90.3	104.5	105.0 (103.0)	-	0.5
期末在庫量	25.2	32.3	37.6 (39.9)	-	16.2
期末在庫率	22.8%	27.5%	31.2% (32.1%)	-	3.7

(参考)

収穫面積(百万ha)	8.42	10.24	10.47 (8.40)	-	2.2
単収(t/ha)	1.95	1.98	1.99 (1.95)	-	0.5

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2024)、
IGC 「Grain Market Report」(14 March 2024)

図 中国産大豆の生産量、収穫面積、単収の推移

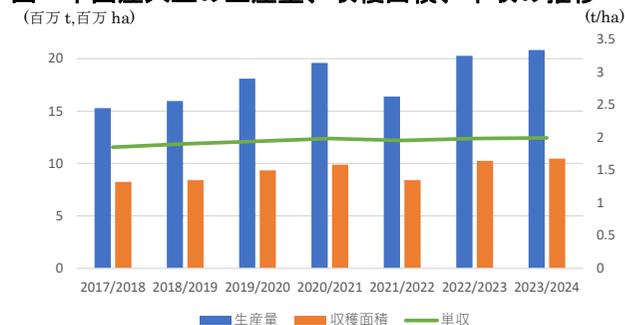


表 中国産大豆の輸入量と輸入元国

(輸入量: 万トン、シェア: %)

2024年 1・2 月			2023年 1 月～2023年 12 月		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
ブラジル	696.4	53.4	ブラジル	6,993.0	70.7
米国	495.7	38.0	米国	2,374.3	24.0
カナダ	68.2	5.2	アルゼンチン	199.2	2.0
アルゼンチン	21.3	1.6	カナダ	146.6	1.5
ロシア	14.8	1.1	ロシア	129.3	1.3
ウルグアイ	3.2	0.2	南アフリカ	14.7	0.1
その他	4.1	0.3	その他	38.6	0.4
計	1303.7	100	計	9,895.7	100

資料: 中国海関統計をもとに農林水産省で作成

< カナダ > 2024/25 年度の生産量は 6.9 百万トンの見込み (AAFC)

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省 (AAFC) 「Outlook for Principal Field Crops」(2024.4.19)によれば、2023/24 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 6.7%増、過去 5 年平均比も 6.8%増の 7.0 百万トンの見込み。単収が 3.09 トン/ヘクタールと、前年度並みの史上最高となり、収穫面積が 2.26 百万ヘクタールと前年度より 6.6%増と大幅に増加することによる。収穫面積の増加は、マニトバ州において前年度の史上最高の単収を受け農家が作付面積を増やしたことが要因とみられる。

カナダ統計局「Principal field crop areas, 2024」(2024.3.11)によれば、2024/25 年産の作付意向面積は、前年度より 1%減の 226 万ヘクタールとなった。前年度に作付面積が大幅に増加したマニトバ州において、作付面積が前年度より 7.2%減と減少に転じることが主な要因とみられる。

AAFC によれば、2024/25 年度の実生産量は、作付面積が前年より減少することを受け、前年度から 1%減の 6.9 百万トンの見込み。大豆価格が低下しているものの、大豆粕需要と輸出は堅調であり、生産量は微減に留まるとみられる。土壌水分量は現時点で十分とみられる。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 12.2%増の 2.9 百万トンの見込み。バイオ燃料需要増による搾油の収益改善が見込まれていることによる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、増産による輸出余力の増大を受けて、前年度より 7.3%増の 4.6 百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会 (Canadian Grain Commission) によれば、2023/24 年度 (2023 年 8 月～2024 年 7 月) の 2023 年 8 月～2024 年 2 月の輸出量は 321.8 万トンで、前年度同期 (297.1 万トン) を上回っている。国別では、中国 (143.9 万トン) が 40%以上のシェアを占め、次いでアルジェリア (54.9 万トン)、イラン (54.6 万トン)、イタリア (15.0 万トン) の順となっている。2022/23 年度の実輸出量は、前年度比で 12%増の 128.8 万トンとなっており、3 年連続で増加している。

AAFC によれば、2023/24 年度の実在庫量は、前月予測からの変更はなく、増産により前年度から 26.3%増の 0.5 百万トンの見込み。

大豆—カナダ

(単位: 百万トン)

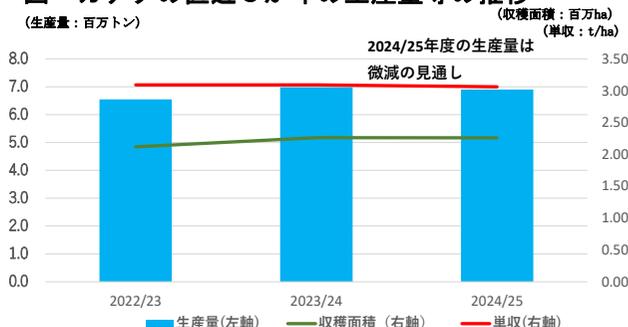
年度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年8月～24年7月)		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	6.2	6.5	7.0 (7.0)	-	6.7
消費量	2.3	2.6	2.9 (2.5)	-	12.2
うち搾油用	1.8	1.8	1.9 (1.8)	-	6.4
輸出量	4.3	4.2	4.6 (4.9)	-	7.3
輸入量	0.5	0.5	0.5 (0.5)	-	-
期末在庫量	0.4	0.6	0.7 (0.4)	-	4.8
期末在庫率	6.5%	9.5%	9.1% (5.7%)	-	▲ 0.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	2.08	2.12	2.26 (2.26)	-	6.6
単収(t/ha)	2.99	3.09	3.09 (3.09)	-	-

資料: USDA 「PS&D」

「World Agricultural Production」(11 April 2024)

AAFC 「Outlook for Principal Field Crops」(19 April 2024)

図 カナダの直近3か年の生産量等の推移



資料: AAFC 「Outlook for Principal Field Crops」(2024.4.19) を

もとに農林水産省にて作成。

表 カナダ産大豆の輸出量と輸出先国

(輸出量: 万トン、シェア: %)

2024年2月		2023/24年度 (2023年8月～2024年2月)			2022/23年度 (2023年8月～2024年2月)			
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
中国	16.8	85.3	中国	143.9	44.7	中国	128.8	43.3
アルジェリア	2.9	14.7	アルジェリア	54.9	17.1	イラン	44.8	15.1
米国	0.1	0.5	イラン	54.6	17.0	アルジェリア	32.1	10.8
			イタリア	15.0	4.7	イタリア	25.1	8.4
			その他	53.4	16.5	その他	66.3	22.3
計	19.7	100.0	計	321.8	100.0	計	297.1	100.0

資料: カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)のデータ

をもとに農林水産省にて作成。

(参考1)本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2023/24年度)

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	23年6月～24年5月	23年9月～24年8月	23年8月～24年7月	23年9月～24年8月
カナダ	23年8月～24年7月			23年8月～24年7月
豪州	23年10月～24年9月		24年3月～25年2月	
EU	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		
中国	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月
ロシア	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		23年9月～24年8月
ウクライナ	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		
ブラジル		24年3月～25年2月	24年4月～25年3月	23年10月～24年9月
アルゼンチン	23年12月～24年11月	24年3月～25年2月		23年10月～24年9月
タイ			24年1月～12月	
インド	23年4月～24年3月		23年10月～24年9月	
ベトナム			24年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
 例えば、2023/24年度は、米国の小麦では2023年6月～2024年5月、ブラジルのとうもろこしでは2024年3月～2025年2月です。
 なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads> (「Reference Data」タブを参照)

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel (ブッシェル) (穀物により異なる)	0.027216	メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリックトン	大麦	
	0.025401	メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリックトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリックトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.40469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国

1LAKH(ラーク)	10万	位取り	インド
------------	-----	-----	-----

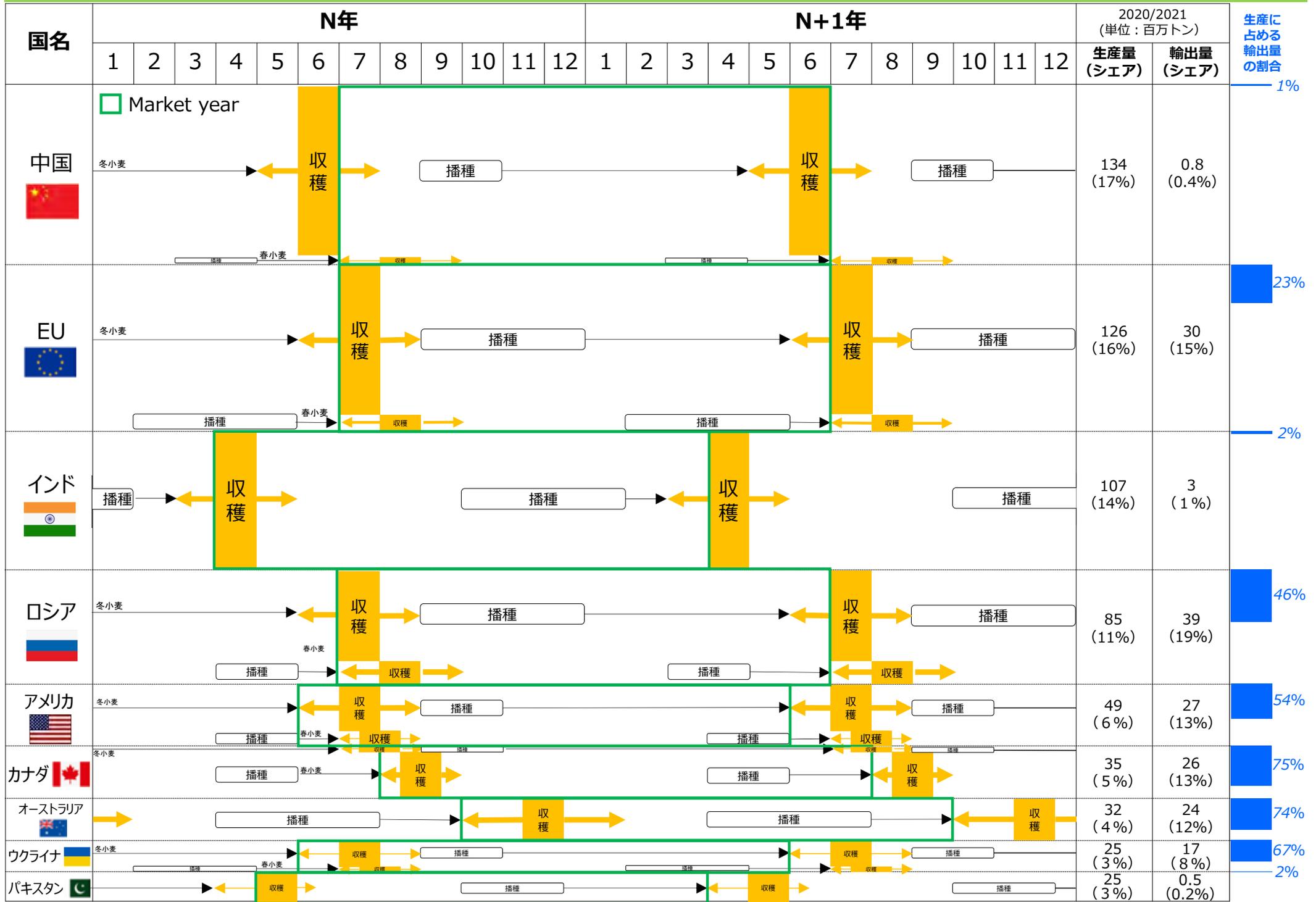
1斤	500g	重量	中国
----	------	----	----

華氏→摂氏 : °C = (° F - 32) ÷ 1.8			
-------------------------------	--	--	--

(参考3)各国のクロープカレンダー一覧(主要品目毎)

主要生産国のクロープカレンダー(小麦)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



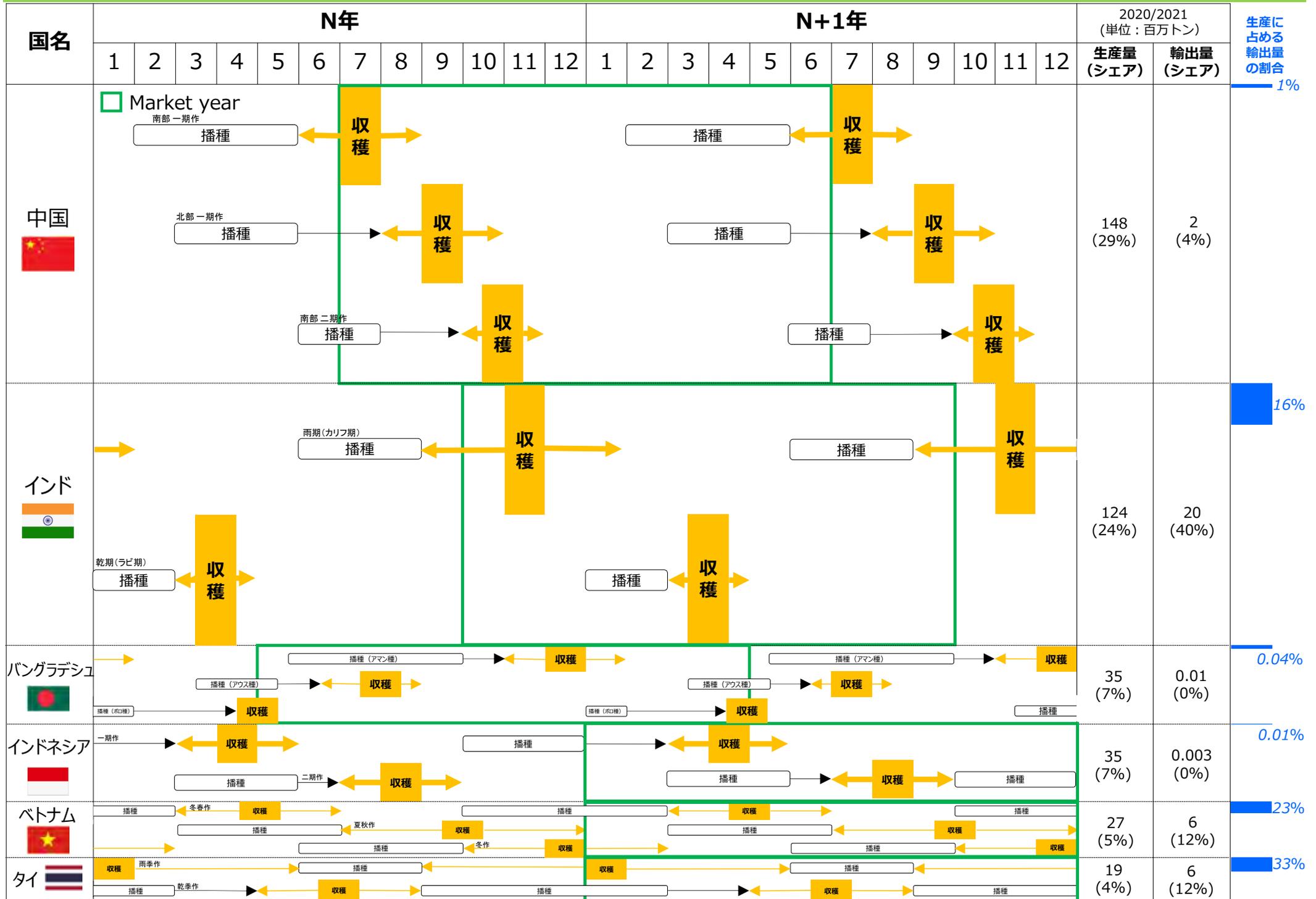
資料：AMIS [Supply and demand balances manual]、USDA [PS&D]

注：シェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。
冬小麦と春小麦の収穫量の割合は便宜的にデュラム小麦は全て春小麦としている。

その他：(20%) (18%)

主要生産国のクロープカレンダー(米)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」 注：シェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。

その他： 121 (24%) 16 (32%)

主要生産国のクロープカレンダー(とうもろこし)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

国名	N年												N+1年												2020/2021 (単位：百万トン)		生産に 占める 輸出量 の割合
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	生産量 (シェア)	輸出量 (シェア)	
アメリカ 	<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div> 播種 → 収穫												358 (32%)	70 (38%)	19%												
中国 	播種 → 春作 → 収穫 播種 → 夏作 → 収穫												261 (23%)	0.004 (0%)	0.002%												
ブラジル 	夏とうもろこし → 播種 → 収穫 冬とうもろこし → 播種 → 収穫												87 (8%)	20 (12%)	24%												
EU 	播種 → 収穫												67 (6%)	4 (2%)	6%												
アルゼンチン 	播種 → 収穫												52 (5%)	40 (22%)	79%												
インド 	乾期(ラビ期) → 播種 → 収穫 雨期(カリフ期) → 播種 → 収穫												31 (3%)	4 (2%)	11%												
ウクライナ 	播種 → 収穫												30 (3%)	23 (13.1%)	79%												
資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」	注：シェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。												242 (19)	21 (11%)	その他：												

主要生産国のクロープカレンダー(大豆)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

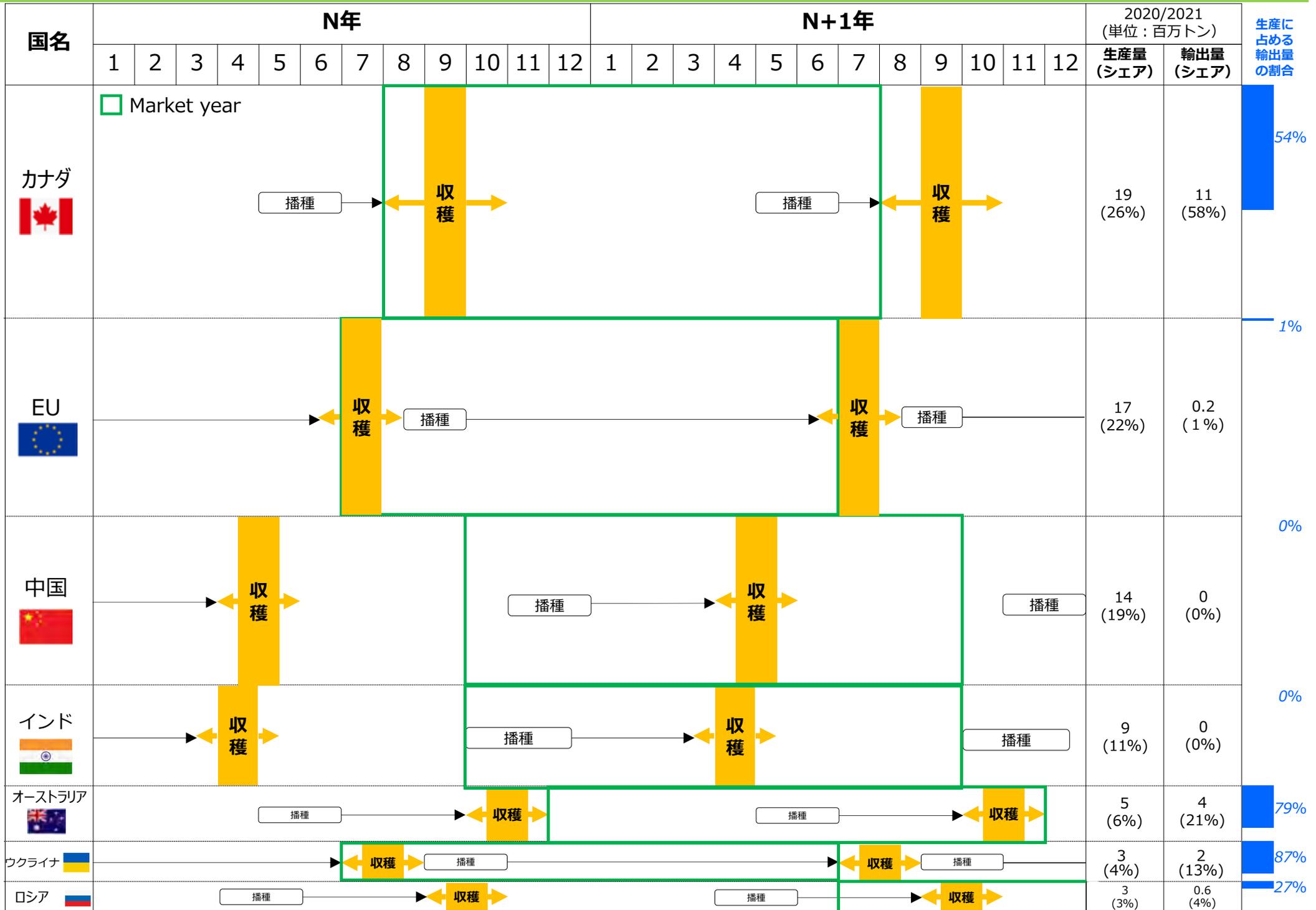
国名	N年												N+1年												2020/2021 (単位：百万トン)		生産に 占める 輸出量 の割合
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	生産量 (シェア)	輸出量 (シェア)	
ブラジル 	<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div>												<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div>												140 (38%)	82 (50%)	59%
アメリカ 	<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div>												<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div>												115 (31%)	62 (37%)	54%
アルゼンチン 	早植え → 収穫 播種 → 遅植え → 収穫												<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div>												46 (13%)	5 (3%)	11%
中国 	播種 → 収穫												<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div>												20 (5%)	0.07 (0.04%)	0.4%
インド 	播種 → 収穫												<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div>												10 (3%)	0.03 (0.02%)	0.3%
パラグアイ 	収穫												<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div>												10 (3%)	6 (4%)	66%
資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」																								28 (8%)	19 (10%)	その他：	

注：シェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。

その他：

主要生産国のクロープカレンダー(菜種)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料：USDA「Crop Calendars」、「PS&D」 注：シェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している

その他：

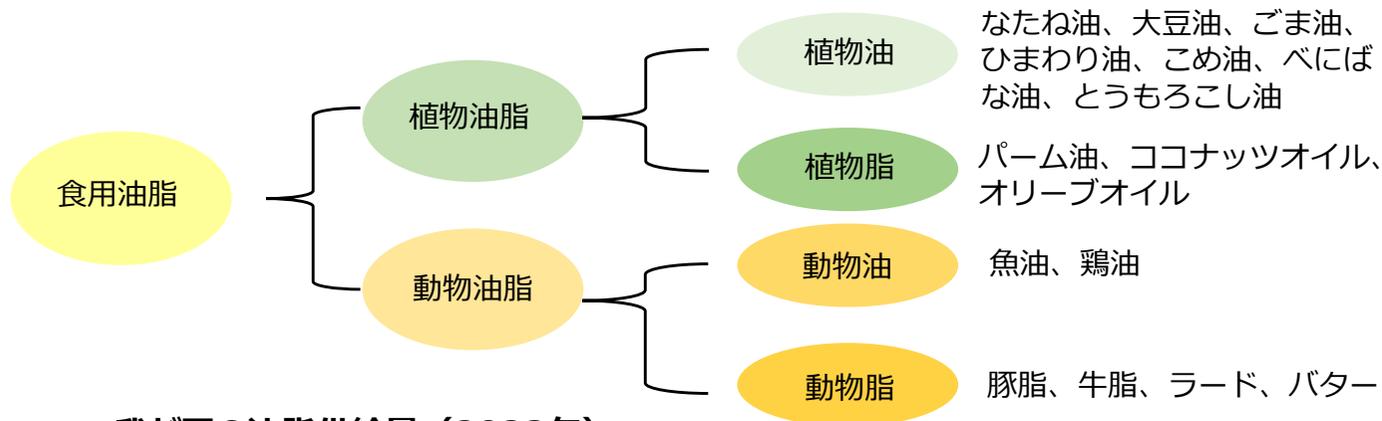
第34号特別分析トピック：我が国と世界の油脂をめぐる動向

基礎編・国内編

食用油脂の種類、油脂原料の分類

○ 食用油脂は植物由来と動物由来に大別され、油脂原料（農産物）は特に油分を多く含む植物が選抜・利用されており、形態別に見ると植物の種子、果肉、副産物に分類。

■ 油脂の種類



原料 融点・凝固点

種子

-18~-30℃
(常温で液体)

果実

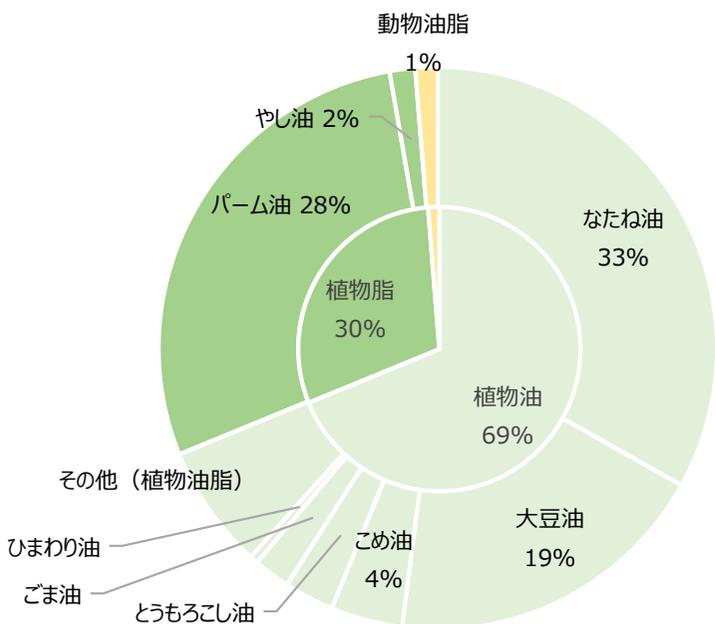
24~-50℃

動物

28~-55℃

融点・凝固点
が違うため
代替性低い

我が国の油脂供給量（2023年）



資料：農林水産省「油糧生産実績調査」、財務省「貿易統計」、動物油脂については推定値。
注：パーム油はパーム殻油を含む。その他（植物油脂）については一部植物脂も含むが、大部分が植物油なため、便宜的に植物油に含めている。

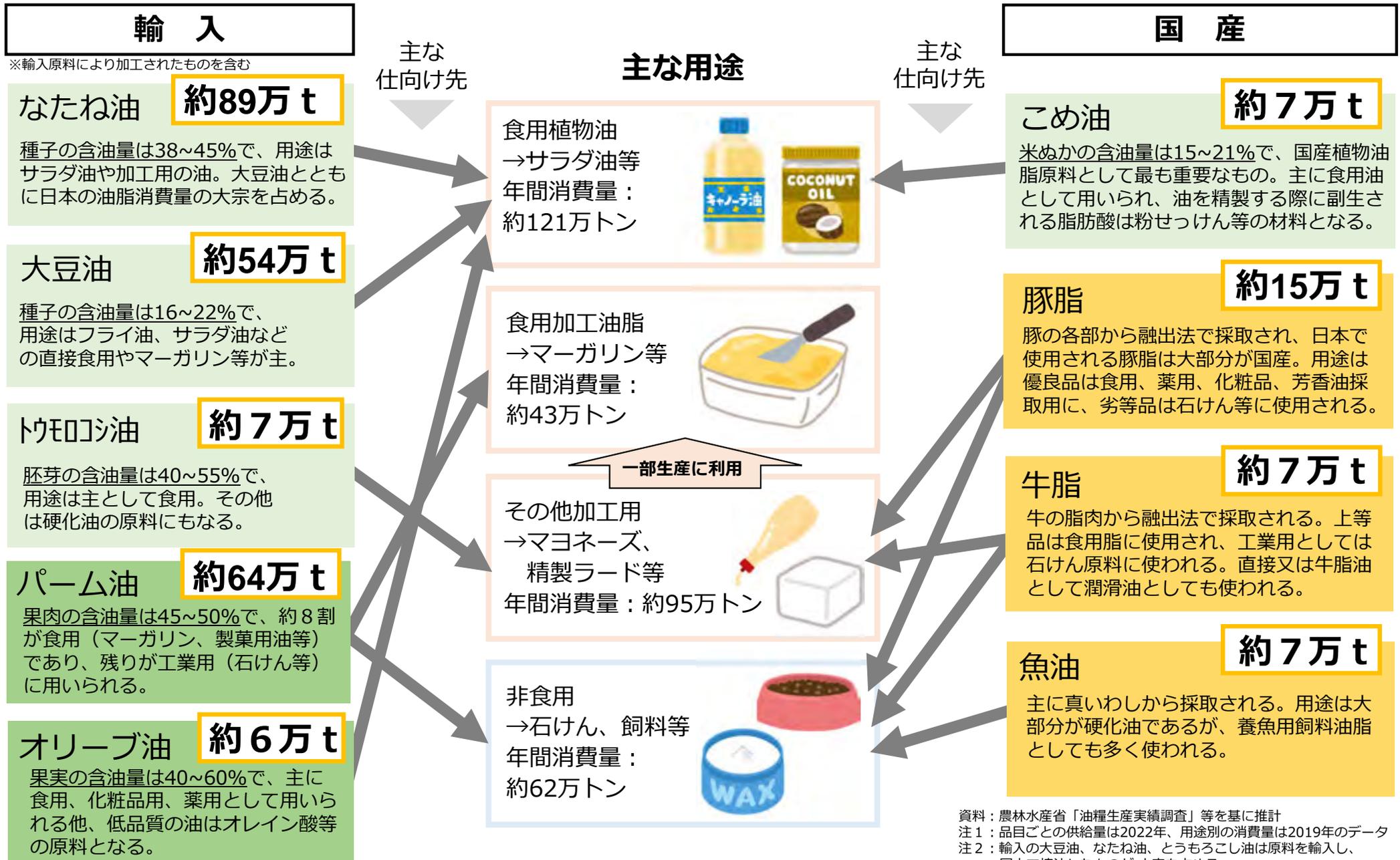
表1：植物油原料の形態による分類

資料：日本植物油協会のHPより引用

分類	説明	主な原料名
植物の種子	代表的な植物油の原料。植物の種子で油分を多く含むもので、油糧種子と呼ばれる。通常の条件で保管しても変質が少ないため、種子の形状で国際的に流通する。	大豆、なたね（キャノーラ）、ひまわりの種、綿実、落花生、ごま、サフラワー（ベに花）、パーム核（パームの種の部分）、ひまの実、あまに、オリーブの種（ポマース）、椿の実、茶の実、エゴマ、やし（コブラ）、ブドウの種
果肉	植物の果実の果肉の部分に多くの油分を含むもの。果肉は腐敗するため輸送には適していないので、油の形状で国際的に流通する。	パーム（油やし）、オリーブ、ココナッツ
副産物	主産物から分離された副産物で、油分を多く含むもの。変質が早く進むので、発生後できるだけ早く集荷し、搾油される。	米ぬか（玄米を精米した副産物）、とうもろこし胚芽、小麦の胚芽

油脂の種類と用途

○ 油脂は常温で液状のものを油、固体のものを脂と呼び、植物由来から動物由来まで様々な種類が存在するが、融点・凝固点といった物理的性質や脂肪酸組成の違い等によって用途が異なる。

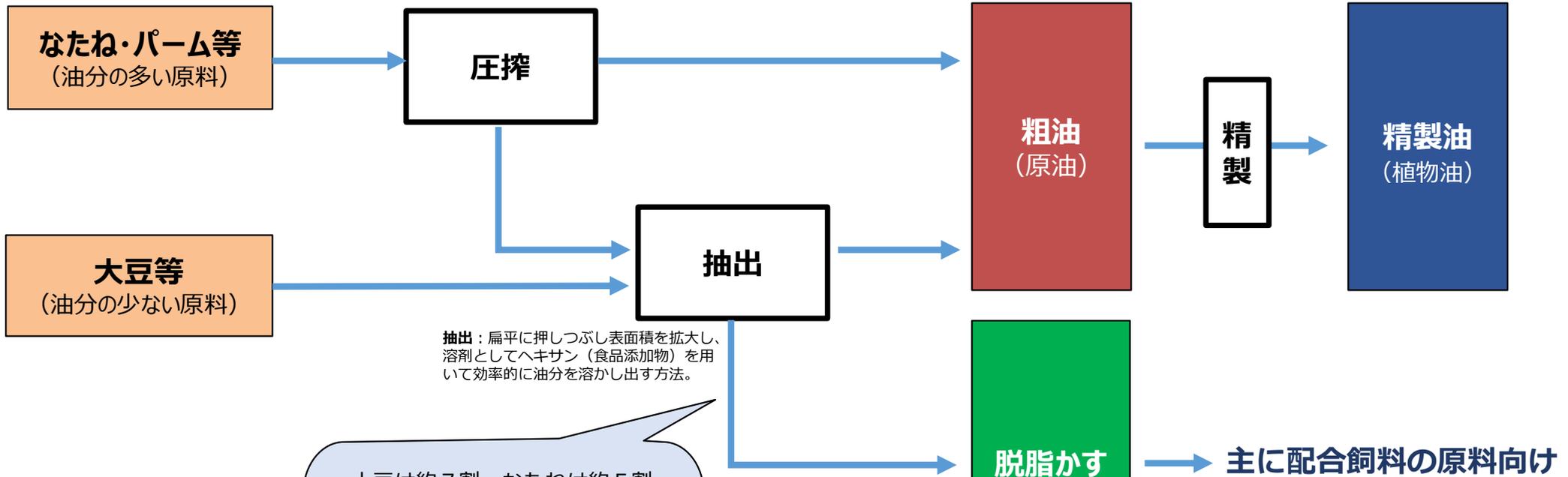


植物油の製造工程

- 植物油は、含有する油分の量に応じて、製造工程が異なる。含油量の多い、なたね・パーム等は圧搾工程（物理的に圧力を掛けて、油を絞り出す工程）を経る一方で、大豆等の油分が少ないものについては、圧搾工程を経ずに抽出工程（扁平に押しつぶした上で、溶剤（ヘキサン）を用いて油分を溶かし出す工程）を行う形が一般的。
- 抽出工程の中で生成される脱脂粕（ミール）は、大豆の場合、粗蛋白質が44%~48%と高く、またアミノ酸バランスにも優れているため、主に配合飼料の副原料として活用。

【主な製造工程】

圧搾：物理的に高い圧力をかけることにより油を搾り出す。油分のおよそ1/2~1/3を搾り採る。

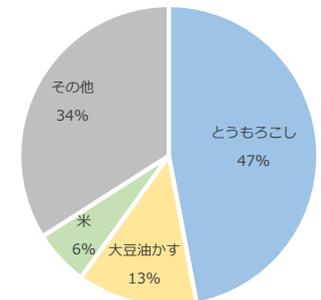


抽出：扁平に押しつぶし表面積を拡大し、溶剤としてヘキサン（食品添加物）を用いて効率的に油分を溶かし出す方法。

大豆は約7割、なたねは約5割が脱脂かす（ミール）となる。

種子・果実	含油割合
なたね	38~45%
パーム	45~50%
大豆	16~22%

(参考) 配合飼料の構成割合(令和4年度)

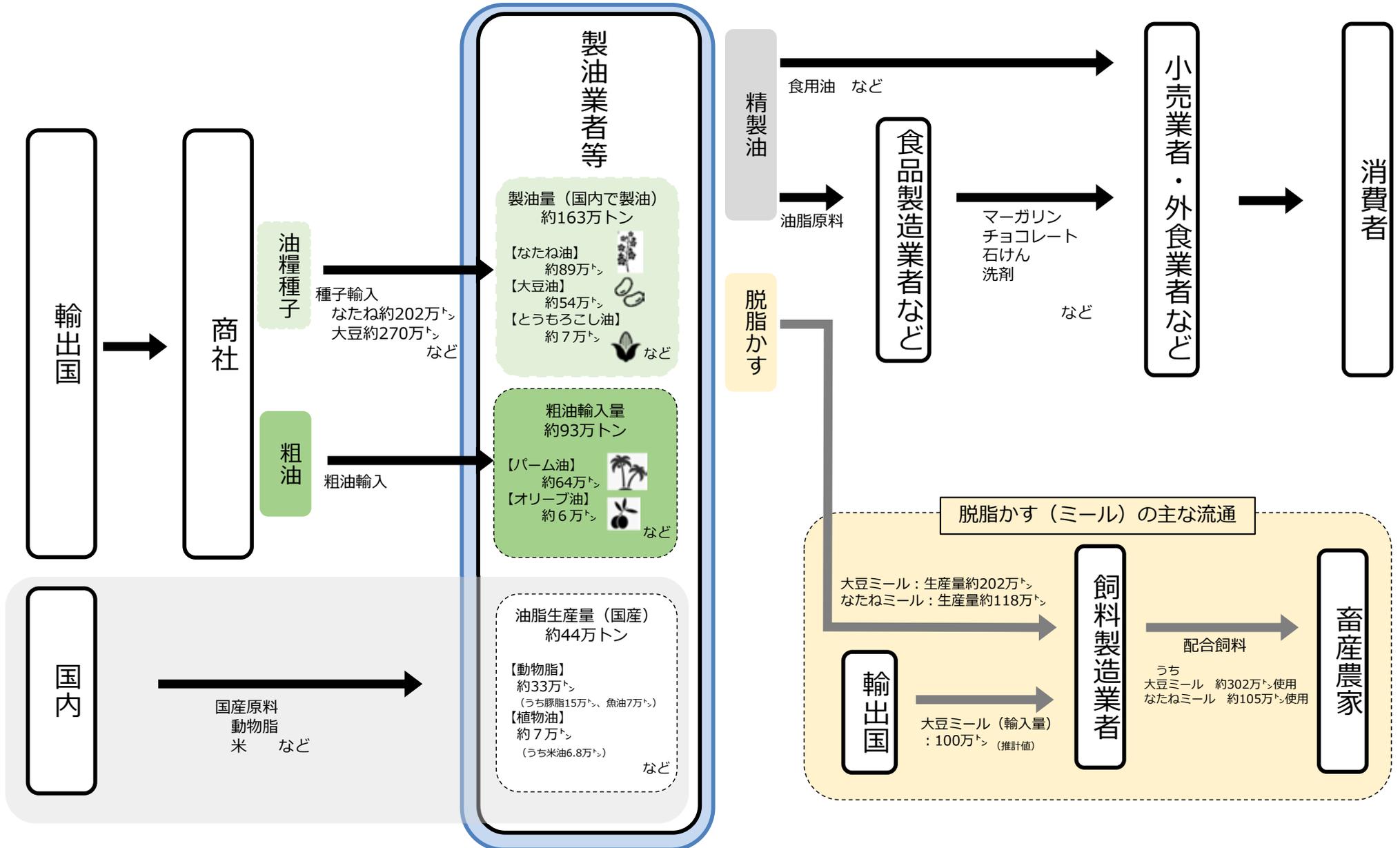


油糧種子・油脂の流通構造

原料調達

加工

流通・販売



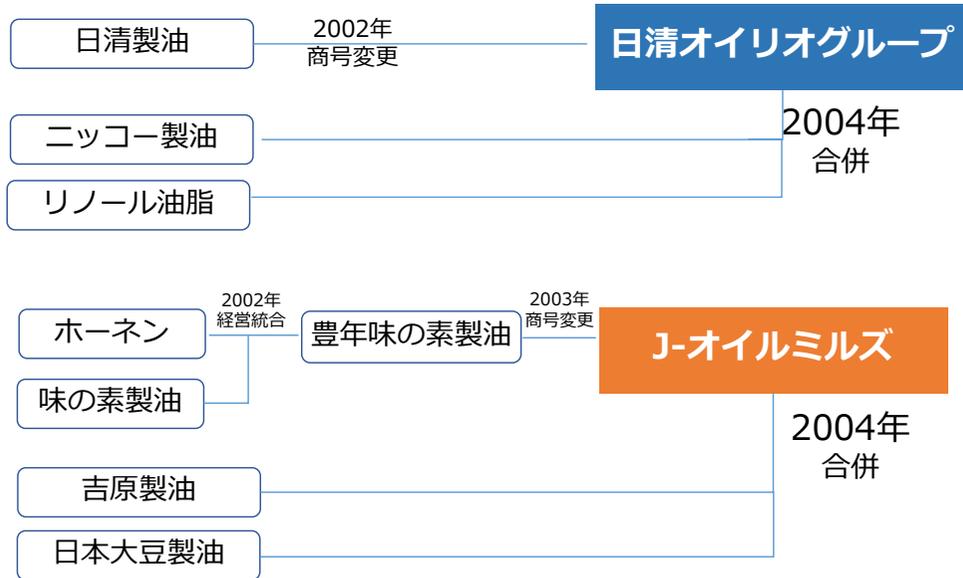
資料：農林水産省「油糧生産実績調査」、「飼料月報<速報版>」、財務省「貿易統計」、(財)油脂工業会館「世界の油脂原料事情」を基に作成。フロー図における数値は2022年の数値。

注：大豆ミールの輸入量は、配合飼料の大豆ミール使用量から、大豆ミール生産量を控除して推計。

我が国の油脂関連業界の動向

○ 食用植物油脂については、日清オイリオグループとJ-オイルミルズの2社が大手。2000年代の業界再編等により大手に集約化が進行。加工油脂類では、チョコレート等の油脂加工品を手掛ける不二製油が最大手。

食用植物油脂の大手は集約化が進行

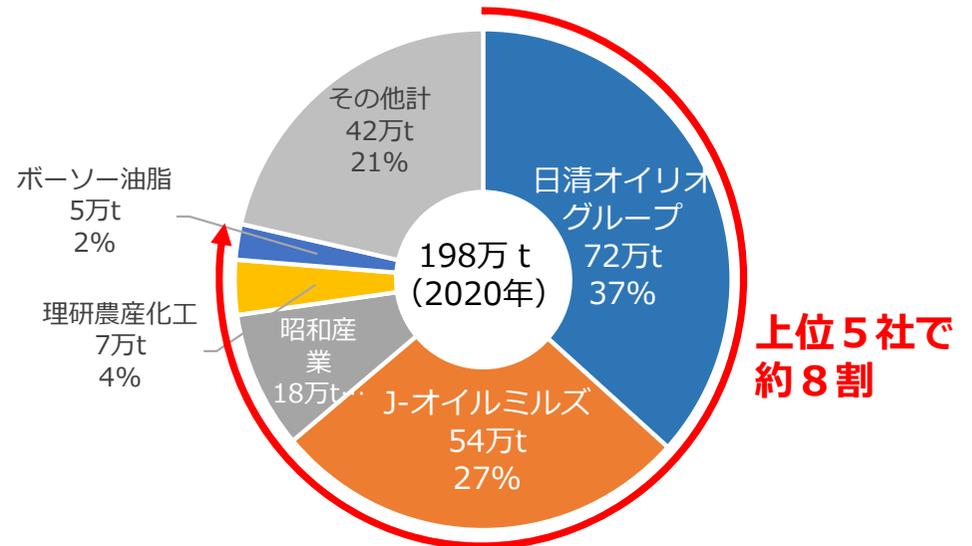


国内需要縮小等を背景に、大手2社は更なる集約化・合理化を進めている
(搾油合併会社を新設)

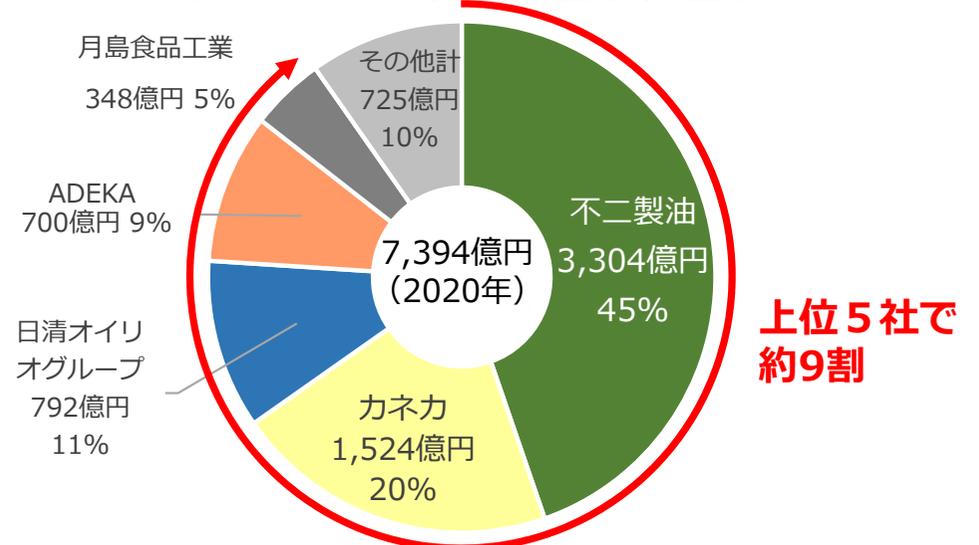
2023年4月「製油パートナーズジャパン株式会社」を発足

西日本エリアの日清オイリオグループの水島工場及びJ-オイルミルズの倉敷工場における搾油工程を承継する新設の合併会社を設立。今後、当該合併会社のもと、全国の搾油機能を統合することについても協議を行う旨を開示。

食用植物油脂の販売量シェア



加工油脂類の販売金額シェア



注：加工油脂類の例としては、マーガリン、ショートニング、ホイップクリーム、マヨネーズが挙げられる。食用植物油脂の例としては、大豆油、なたね油、ごま油、パーム油、ココナッツオイル、オリーブオイルが挙げられる。加工油脂類の一部は食用植物油脂が原料となっている。

(参考) 我が国の油脂関連業界

日清オイリオグループ

日清、リノール、ニッコーが統合。食用油の国内シェア（販売量）は約35%とトップ。欧州やアジアで加工油脂（チョコレート用油脂等）を展開

売上高 **5,565億円**

営業利益 **161億円**
(営業利益率 2.9%)

従業員数 **3,001名**

J-オイルミルズ

ホーネンと味の素製油が統合。業務用の売上割合が高く、業務用シェア約4割（同社推定）

売上高 **2,604億円**

営業利益 **7億円**
(営業利益率 0.3%)

従業員数 **1,330名**

不二製油グループ本社

パームやヤシを原料とした、食用油・食用加工油脂・チョコレート用油脂の製造などを展開。チョコレート用油脂の販売数量で世界TOP3の一角

売上高 **5,574億円**

(うち植物性油脂事業 2,034億円)
(うち業務用チョコレート事業 2,285億円)

営業利益 **109億円**
(営業利益率 2.0%)

従業員数 **5,799名**

「製油パートナーズジャパン株式会社」
西日本エリアの搾油機能を統合する合併会社を設立

業務提携契約

昭和産業

製粉、油脂、糖質、飼料などを幅広く展開

売上高 **3,350億円**

(うち油脂・油糧、加工油脂部門 **1,199億円**)

営業利益 **161億円**
(営業利益率 1.2%)

従業員数 **2,863名**

ボーソー油脂

コメ油の最大手

売上高 **180億円**

従業員数 **101名**

TOBにより
完全子会社化
(2020年)

配送基地の共同運用

味の素

27.15%出資 (持分法適用会社)

三菱商事

26.88%出資

かどや製油

ごま油の最大手

売上高 **336億円**

従業員数 **555名**

カネカ

ニュートリション部門で加工油脂を製造・販売

売上高 **7,558億円**
(うちニュートリション部門 **1,773億円**)
(内訳不詳)

従業員数 **11,545名**

伊藤忠商事

43.9%出資 (持分法適用会社)

ミヨシ油脂

マーガリンやショートニング等の食品事業や、工業用油脂などを展開

売上高 **562億円**

従業員数 **567名**

理研農産加工

製油・製粉・肥料の製造販売等を展開

売上高 **270億円**
(内訳不詳)

従業員数 **210名**

資料：各社IR資料をもとに作成。

注：油脂関連事業の売上高が大きい企業を抽出しているが、網羅的なものではなく、比較可能な最新データに基づく。

(参考) 世界の油脂関連業界

資料：各社IR資料をもとに作成。油脂関連事業の売上高が大きい企業を抽出しているが、網羅的なものではなく、比較可能な最新データに基づく。



Archer-Daniels Midland

1902年に亜麻仁（亜麻の種子）粉砕事業を開始し創業。米国イリノイ州に本社を置く。農産物購買、製粉、製油、加工事業をグローバル展開

売上高 15兆2,344億円

Agサービス&油糧種子 11兆9,345億円
(農作物の生産・輸送・保管・加工) (内訳不詳)

炭水化物ソリューション 2兆942億円
(トウモロコシ・小麦の加工)

ニュートリション 1兆1,454億円
(植物性タンパク質や香料など)

従業員数 約4万2千人



Wilmar International

アジア最大のアグリビジネスグループ。パームのプランテーション、各種油糧種子の搾油・精製、バイオディーゼル、製粉、精米、製糖などの農業関連事業をアジアを中心に世界で展開

売上高 10兆732億円

パーム油販売 3兆3,645億円
(取扱量25百万トン)

油糧種子・穀物販売 1兆6,528億円
(取扱量23百万トン)

パーム生産 3,723億円
(作付面積 23万ha)

従業員数 約10万人



COFCO

中国最大の穀物・食品を手掛ける国営企業。穀物、油、砂糖、綿花、食肉、乳製品などの農産物を中核事業とし、食品、金融、不動産も幅広く展開

売上高 14兆8,280億円

製油部門 (2018年) 1兆4,030億円

※上記は、中国糧油社の非公開化前の直近の製油事業部門の売上高

22.49%
出資

中国で合併会社を運営*

※他の穀物メジャー含め多くの外資が中国で製油事業を展開

*「東アジアにおける植物油市場の新展開」(2011-02、八木 浩平)を基に記載

米国バンゲがカナダ大手のバイテラの買収手続き中



Bunge

大手穀物メジャーの一角。油糧種子や穀物の購入・貯蔵・輸送・加工・販売を手掛ける。カナダの同業バイテラを買収することで同社と合意(現状、各種手続中)

売上高 9兆500億円

アグリビジネス 6兆7,091億円
(農作物の加工・販売)

精製油・特殊油 2兆1,905億円
(製油等) (取扱量9百万トン)

従業員数 約2万3千人



Viterra

スイスのグレンコアが傘下に置くカナダの穀物メジャー。穀物、油糧種子、豆類、米、砂糖、綿花、飼料原料等の生産・加工・輸送等を手掛ける

売上高 8兆2,010億円

油糧部門 3兆8,893億円
(販売数量 48百万t)

従業員数 約1万6千人

買収
手続
中

東南アジアを中心に栽培～製造を垂直展開



Golden Agri-Resources

総合パーム油企業。インドネシアでのプランテーションから精製、製造を展開。インドネシアの財閥シナール・マス家が株式の過半を保有

売上高 1兆4,634億円

(パーム作付面積 53万ha)
(パーム製品生産量 3百万t)

従業員数 約10万人



Musim Mas Holdings

総合パーム油企業。インドネシアでのプランテーションから精製、製造を展開

売上高 1兆6,200億円

(パーム作付面積 20万ha)
(パーム原油生産量 0.9百万t)

従業員数 約3万8千人

注1：上表は網羅的なものではなく、比較可能な最新データに基づく。

注2：売上高は便宜的に150円/ドル、20円/人民元、18円/香港ドルにて円換算。

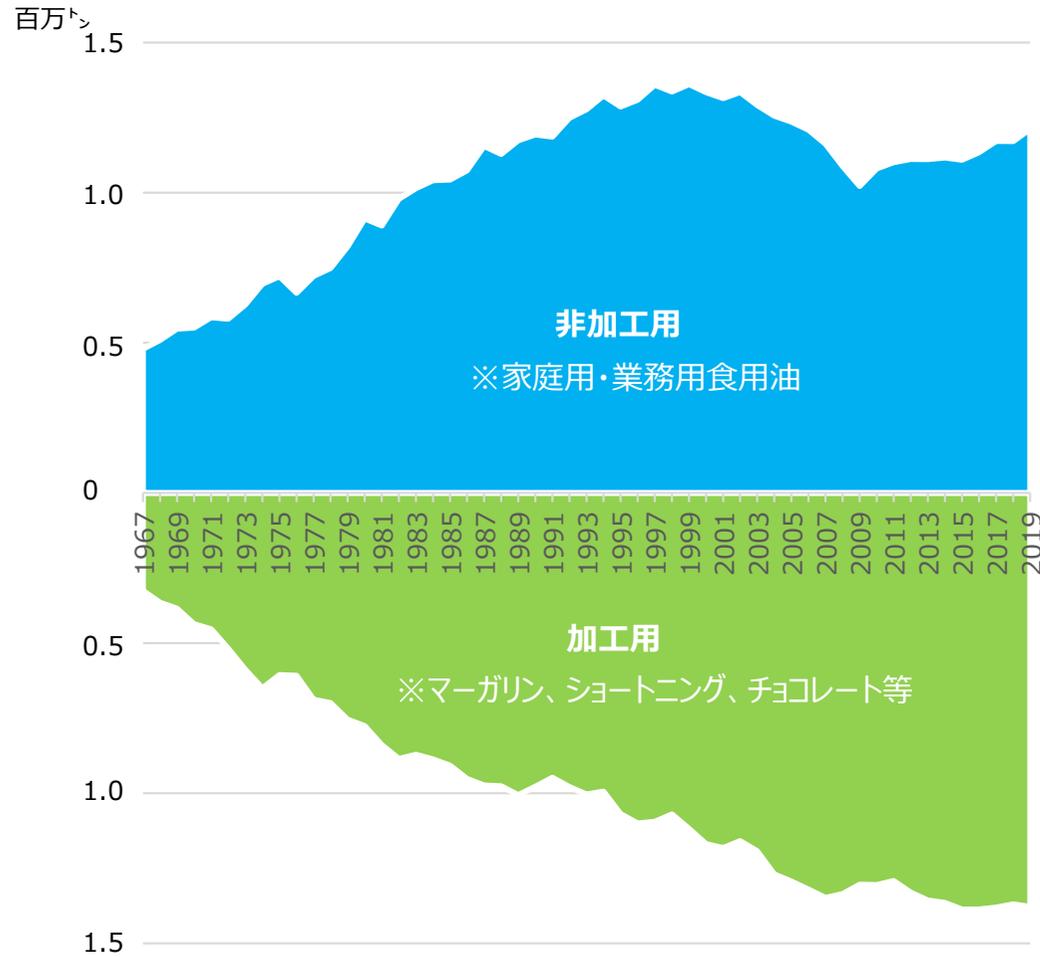
注3：売上高は各社公表資料を基に記載、油脂関連の売上高は報告部門により油脂以外の事業が含まれる場合がある。

我が国の食用油脂の種類別消費量及び価格推移

- 食用油脂の消費量は食生活の変化等に伴い、1960年代と比較して、足下では2倍以上の消費量となっている。
- 食用油の消費者物価指数は、原材料価格の高騰^注等に伴い上昇し、高止まり。

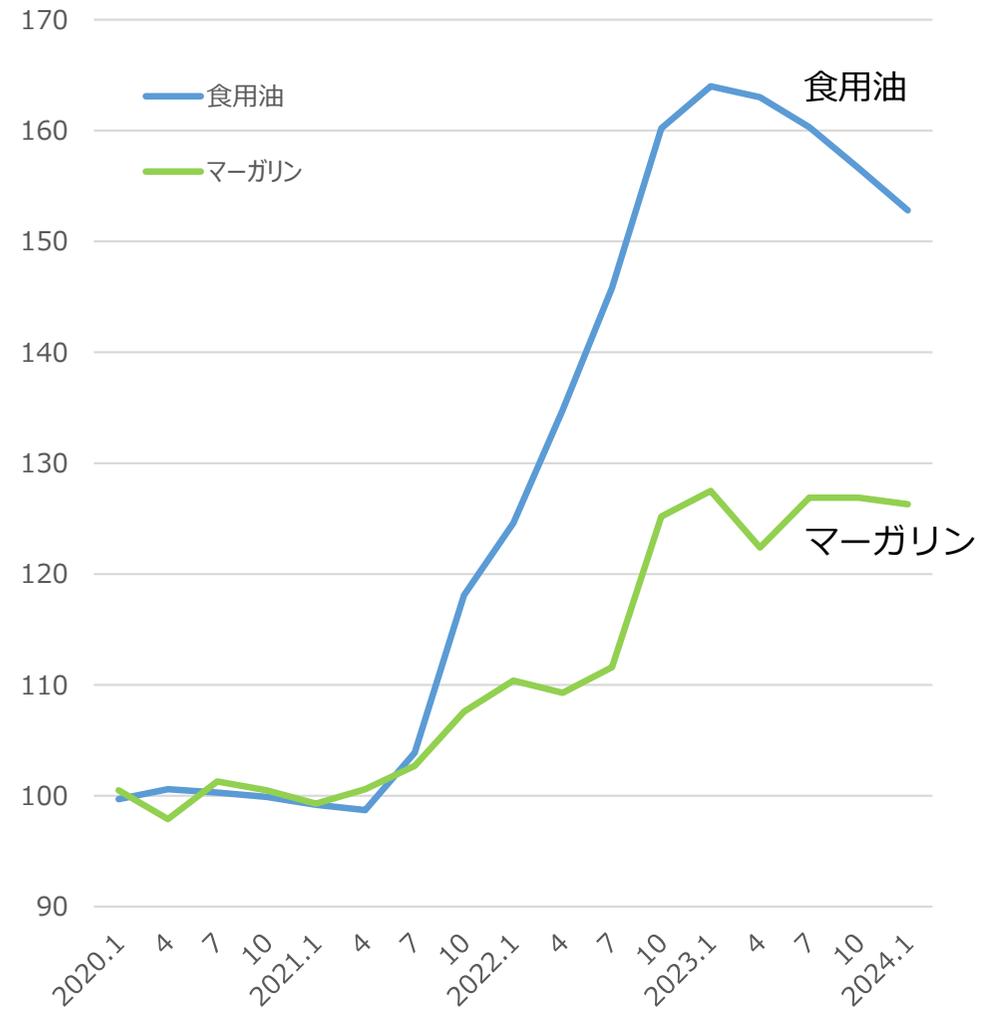
注：原材料の国際価格については、P16,P17「国際価格（大豆）」、「国際価格（なたね、パーム）」を参照

食用油脂の年次別消費量



資料：農林水産省「油糧生産実績調査」等を基に推計（2019年以降はN/A）

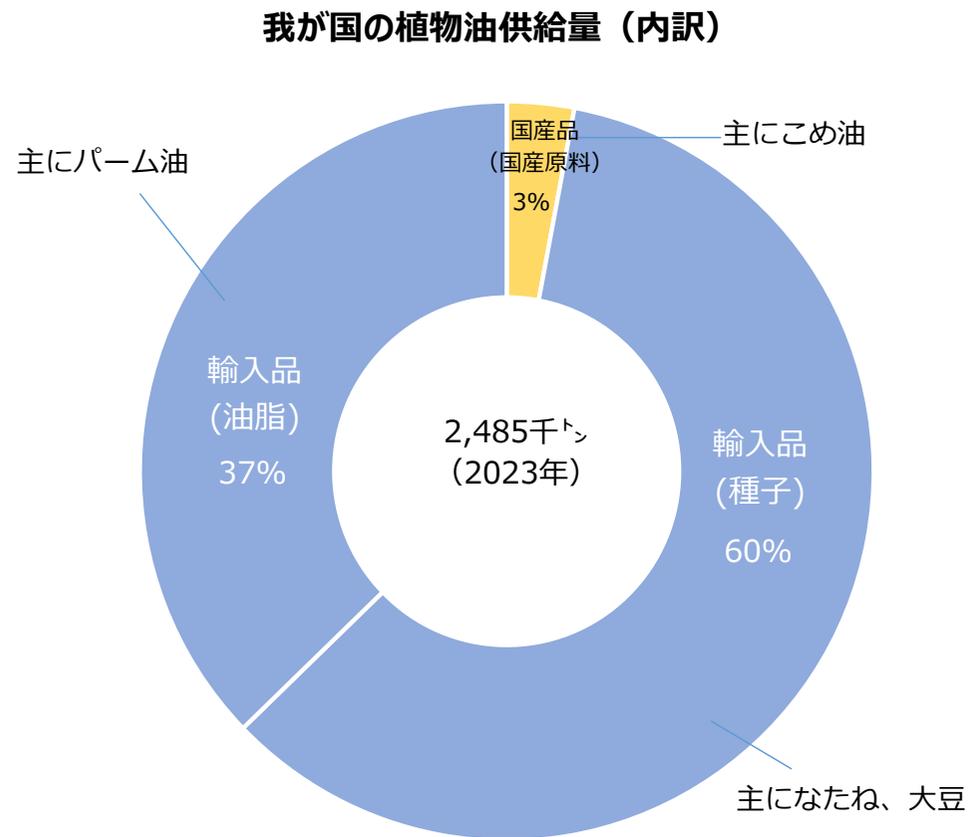
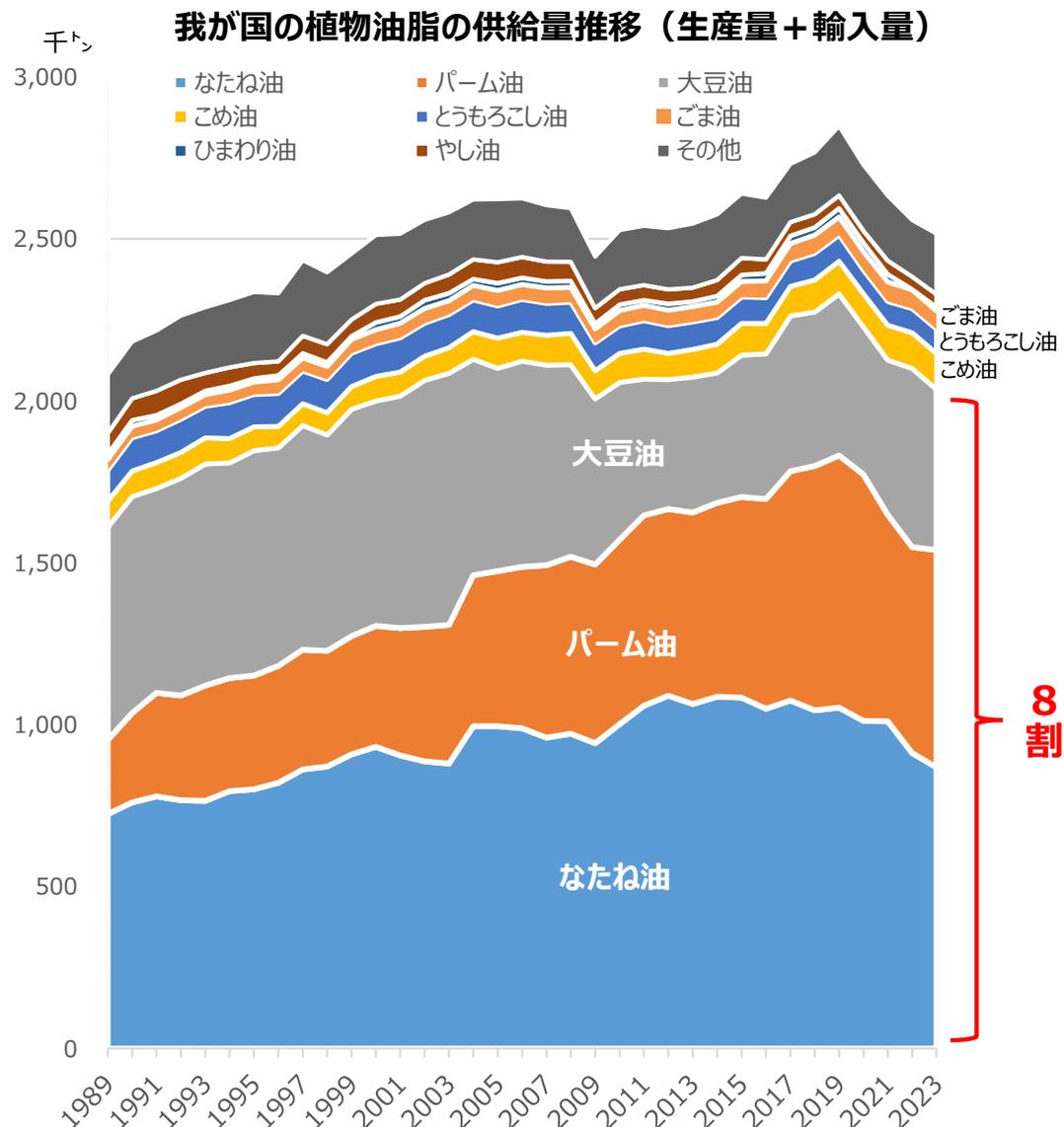
食用油脂の消費者物価指数



資料：総務省「消費者物価指数」

我が国の植物油脂供給量

- なたね油、パーム油、大豆油で植物油脂供給量の概ね8割以上を占め、油種別には、大豆油が2003年以降は減少したものの、なたね油、パーム油は増加傾向。
- なたね、大豆は原料を輸入し、国内で搾油している一方、パーム油は生産国で搾油されたのち、粗油として輸入しているケースが大宗を占める。

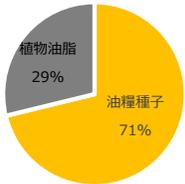


資料：農林水産省「油糧生産実績調査」、財務省「貿易統計」

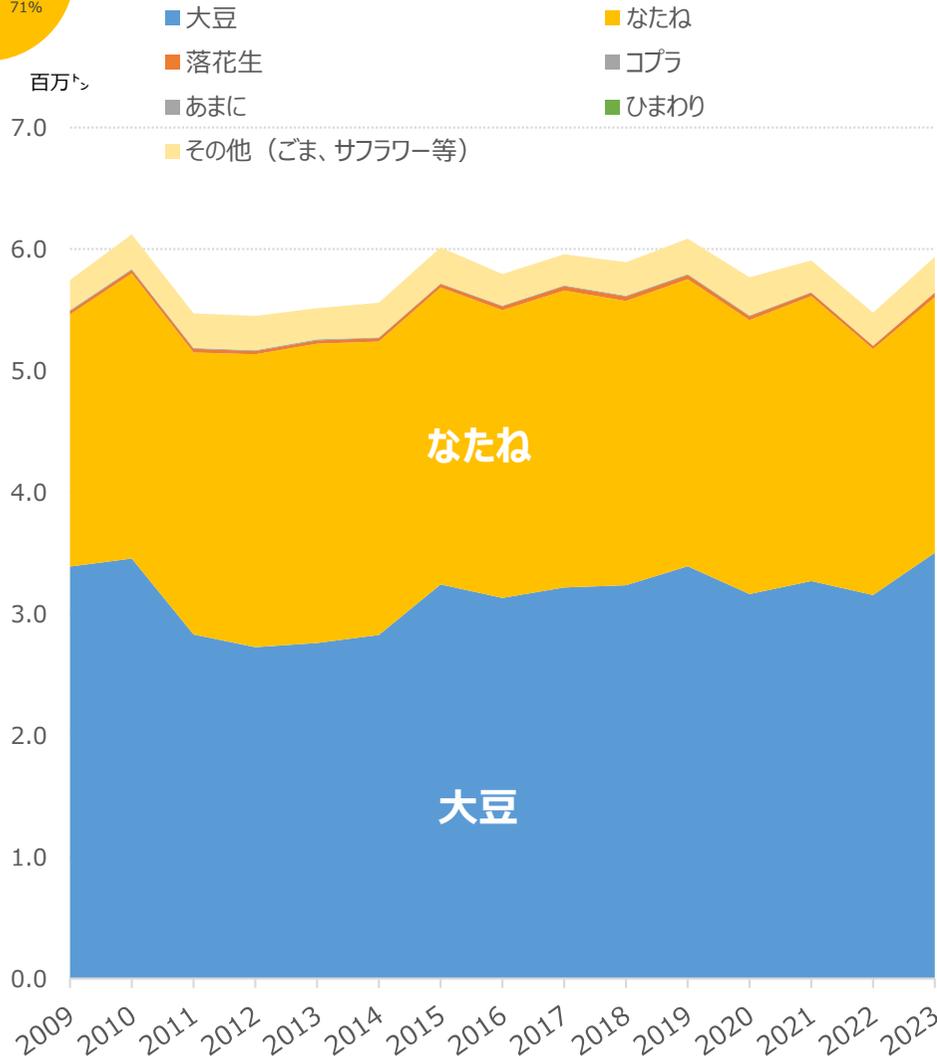
我が国の油糧種子の輸入量の推移

- 油糧種子の輸入については、大豆、なたねが大部分を占める。
- なたねについては、2021年まではカナダから9割以上を輸入していたが2021年にカナダでの減産があり、2022年以降はオーストラリアからの輸入が増加。大豆は米国、ブラジルから8割以上を輸入。

輸入割合（油換算ベース）

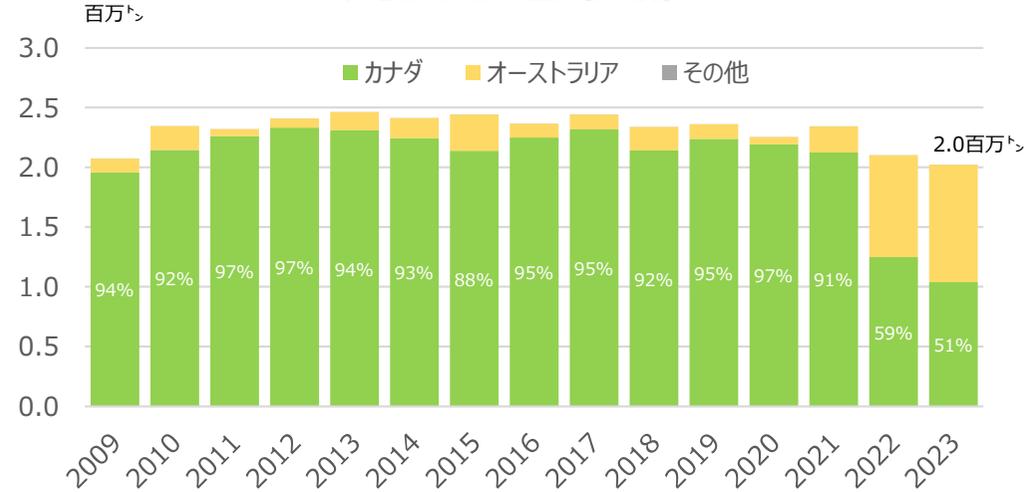


我が国の油糧種子の輸入数量の推移

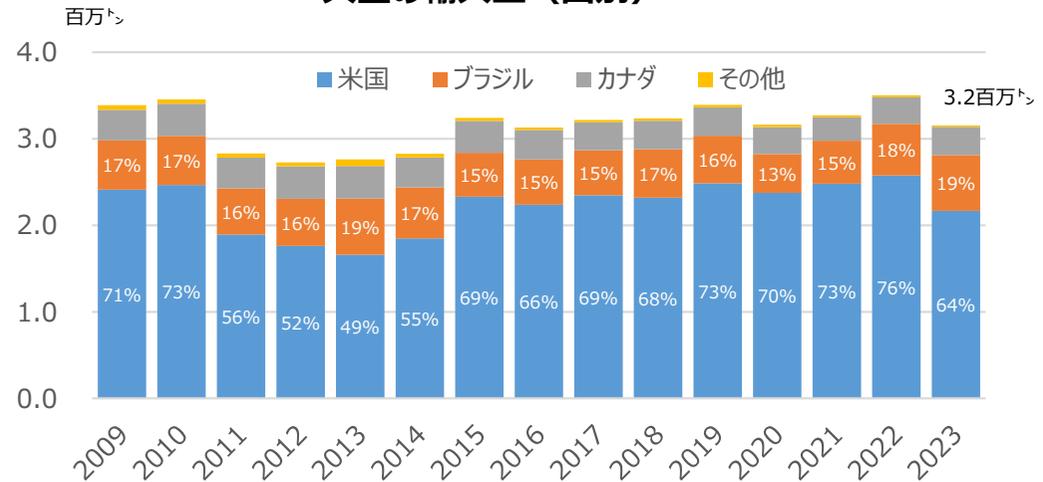


資料：財務省「貿易統計」

なたねの輸入量（国別）



大豆の輸入量（国別）

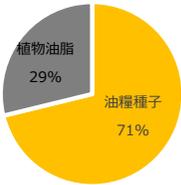


資料：財務省「貿易統計」

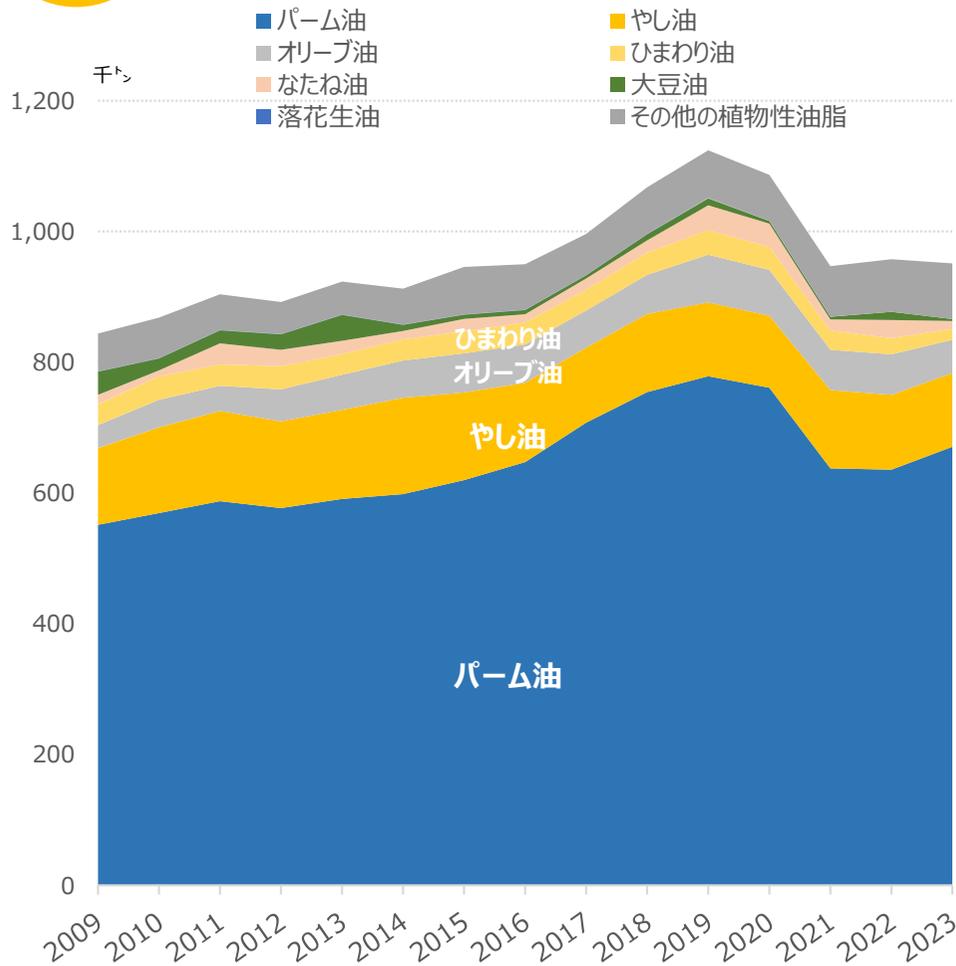
我が国の植物油脂（主に粗油）の輸入量の推移

- 我が国に油（主に粗油）として輸入される油脂は、パーム油、やし油等の果実を原料としたものが主体。
- パーム油は、主にマレーシア、インドネシアから輸入（両国からの輸入で概ね100%）。近年は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴うマレーシアでの労働力不足、インドネシアの輸出規制等による価格高騰もあり、輸入数量が減少。

輸入割合（油換算ベース）

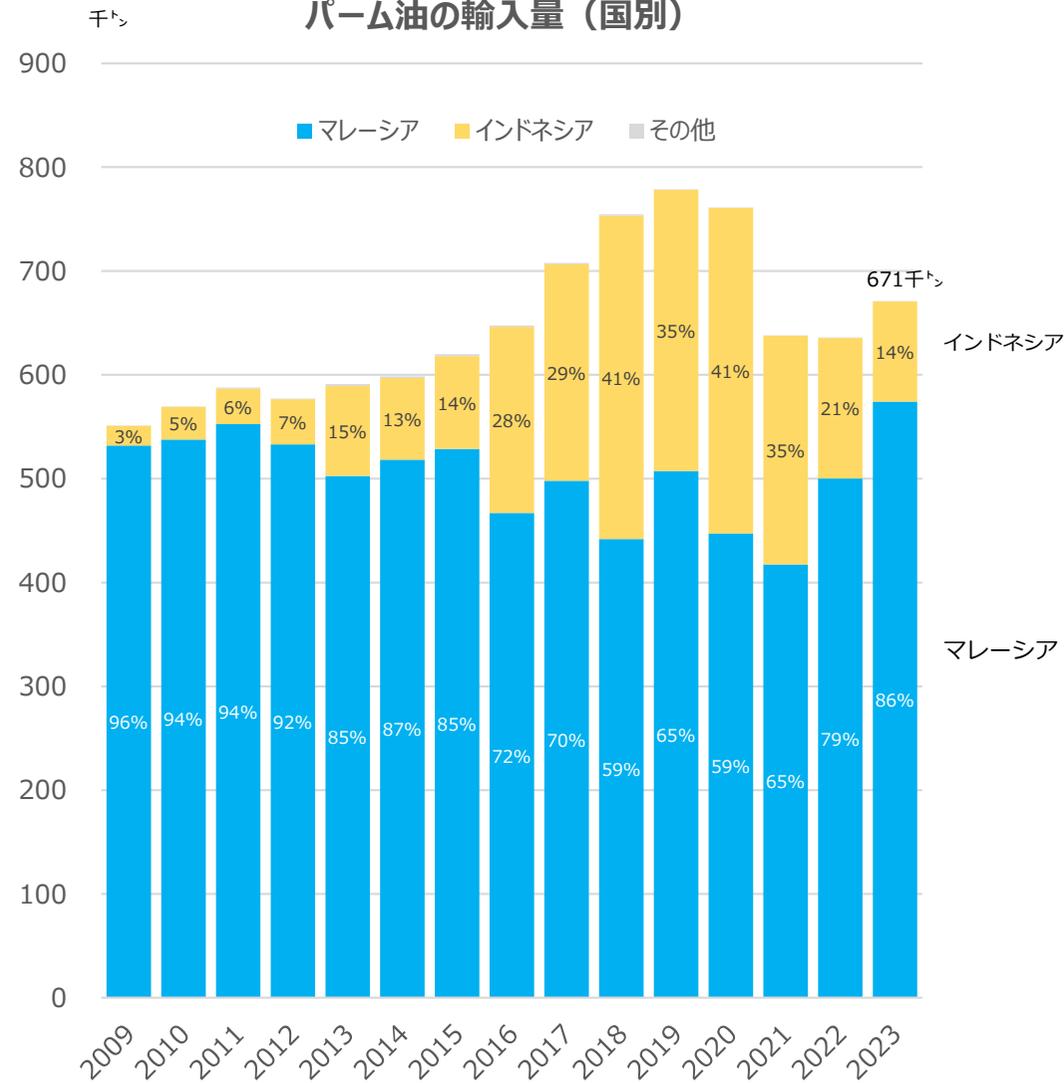


我が国の植物油脂の輸入数量の推移



資料：財務省「貿易統計」
HSコード1507～1515を抽出

パーム油の輸入量（国別）



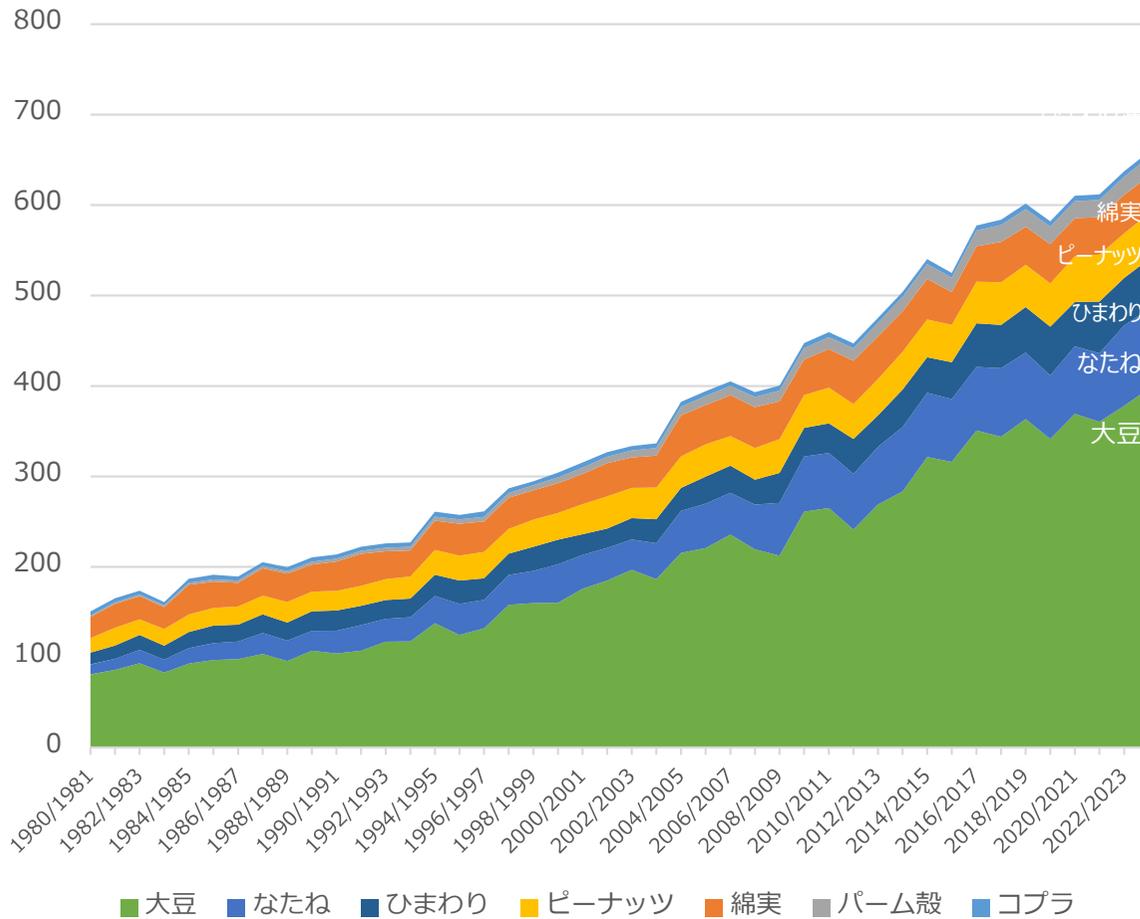
資料：財務省「貿易統計」

国際編

油糧種子の生産量

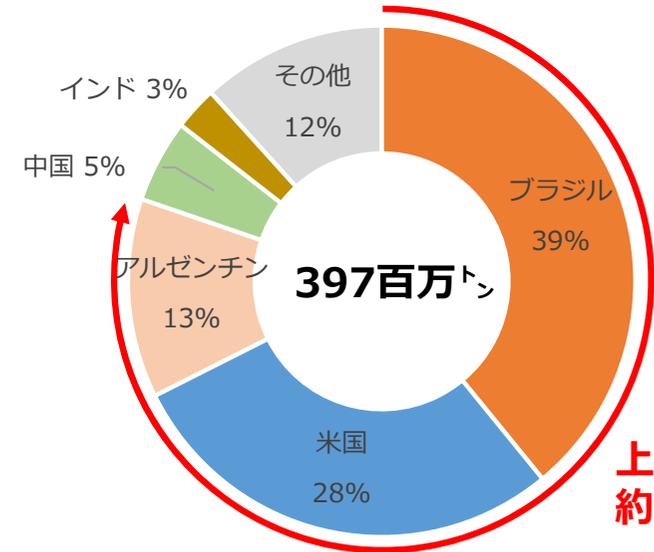
- 主な油糧種子の生産量約6億トンのうち、大豆が過半以上。
- 大豆の生産量シェアはブラジル、米国、アルゼンチンで約8割、なたねは、EU、カナダ、中国、インドで約8割。

世界の油糧種子生産量



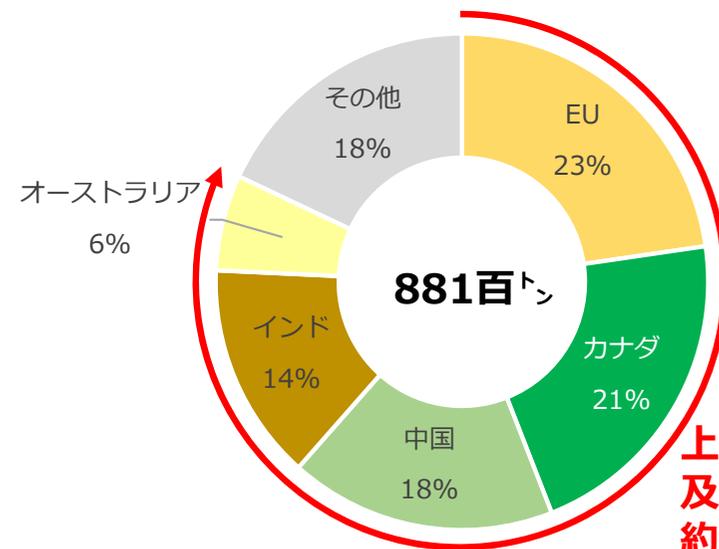
資料：USDA (2024年3月時点)

大豆の生産量シェア(2023/2024)



上位3か国で約8割

なたねの生産量シェア(2023/2024)



上位4か国及び1地域で約8割

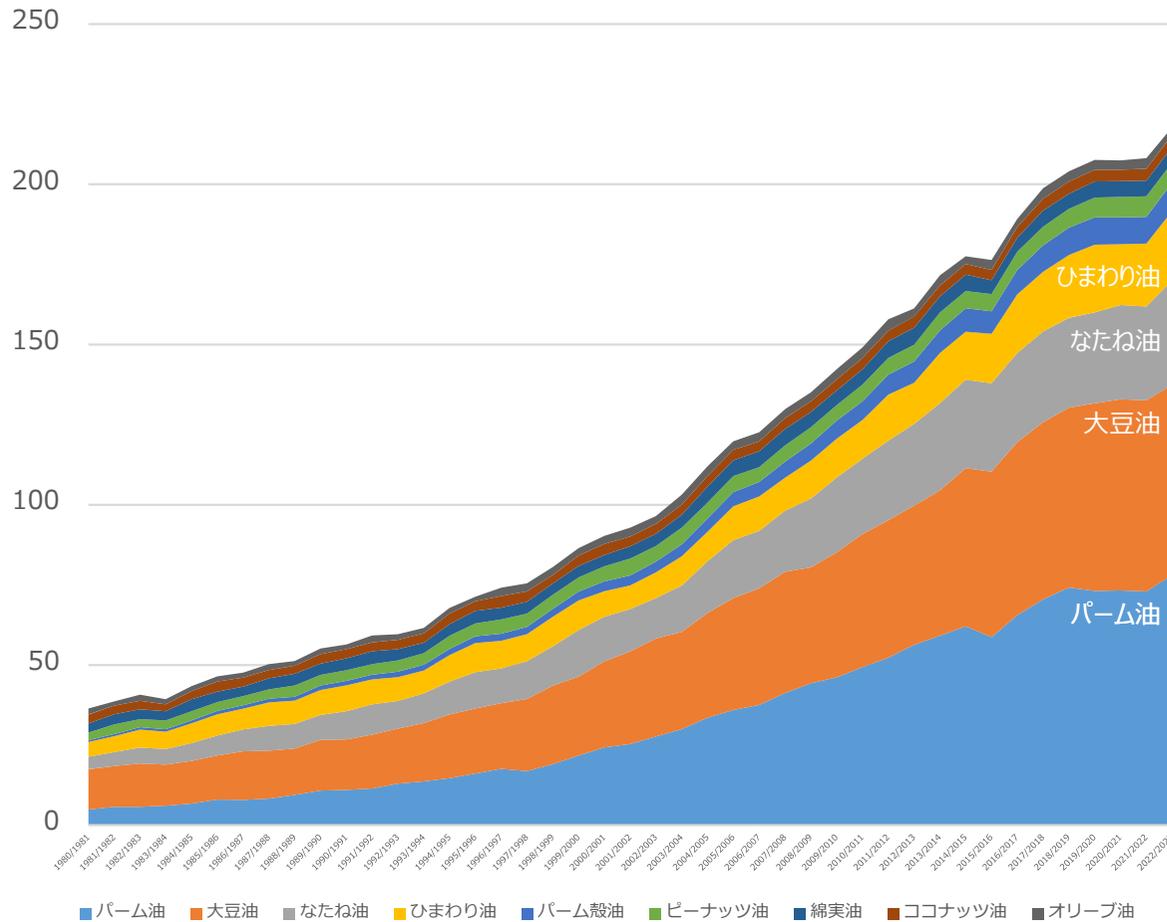
資料：USDA (2024年3月時点)

植物油の生産量

- 主な植物油の生産量約2億トン強のうち、パーム油、大豆油が過半以上。
- パーム油の生産量シェアはインドネシア、マレーシアで約8割以上、大豆油は、消費国でもある中国、米国、ブラジル、アルゼンチンで6割以上。

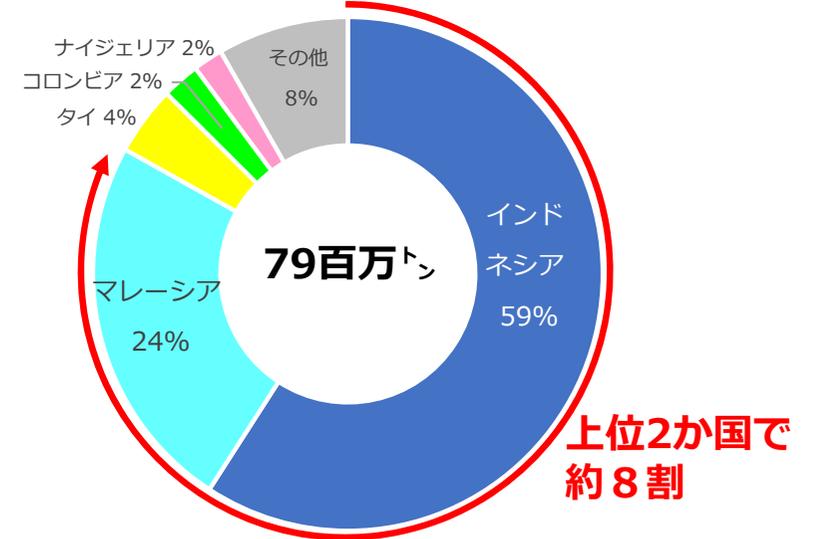
世界の植物油生産量

(単位：百万トン)

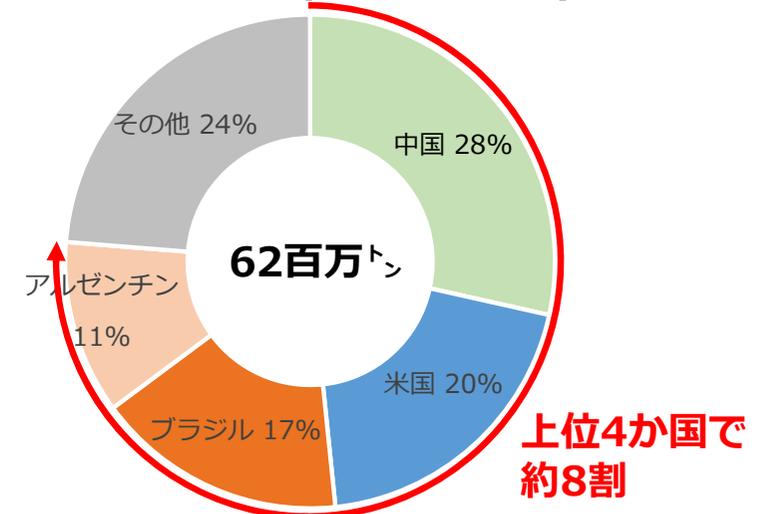


資料：USDA PS&D (2024年3月時点)

パーム油の生産量(2023/2024)



大豆油の生産量(2023/2024)



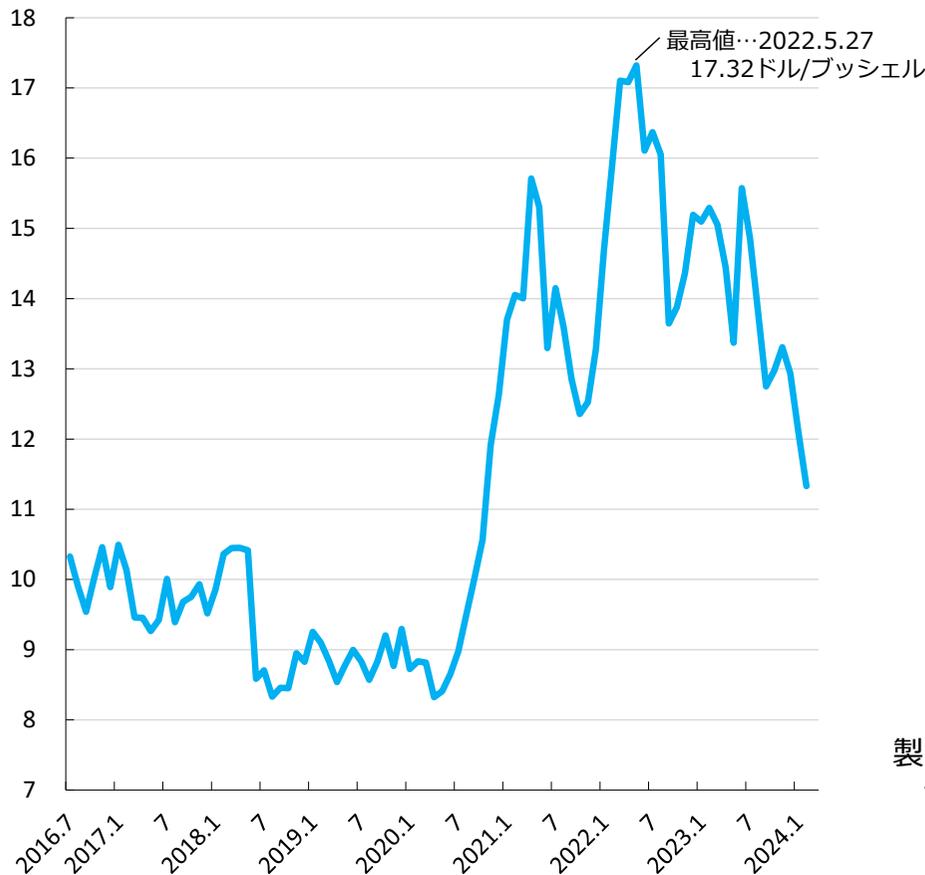
資料：USDA (2024年3月時点)

国際価格（大豆）

- 大豆の国際価格は世界の需給状況に応じて変動。世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、ジェット燃料（SAF）などエネルギー向け需要の増加、南米・北米での高温乾燥、ウクライナ情勢の影響等が価格に影響を及ぼしている状況。
- 大豆圧搾時の主な生成物は、大豆ミール（油かす）と大豆油。大豆ミールは配合飼料において蛋白原料とアミノ酸を提供する副原料の代表格として欠かせない飼料原料。一般的に、製品価格（大豆油+大豆ミール）の合計と大豆価格の差額を「搾油マージン」と言い、その増減に応じて、搾油業者が生産量を判断。搾油マージンの変動に伴い大豆需要が増減する側面もあり。

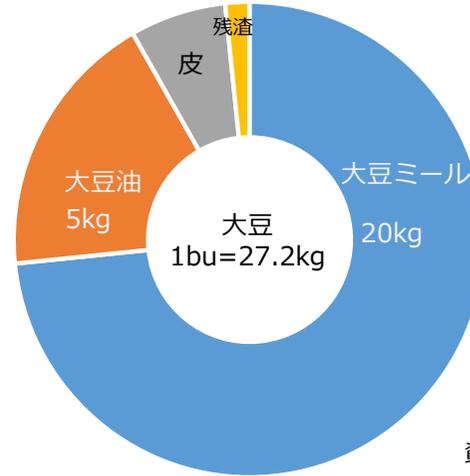
大豆価格の推移

(ドル/ブッシェル)



注：シカゴ商品取引所の2016年7月～2024年2月までの各月最終週末の期近価格（セツルメント）である。

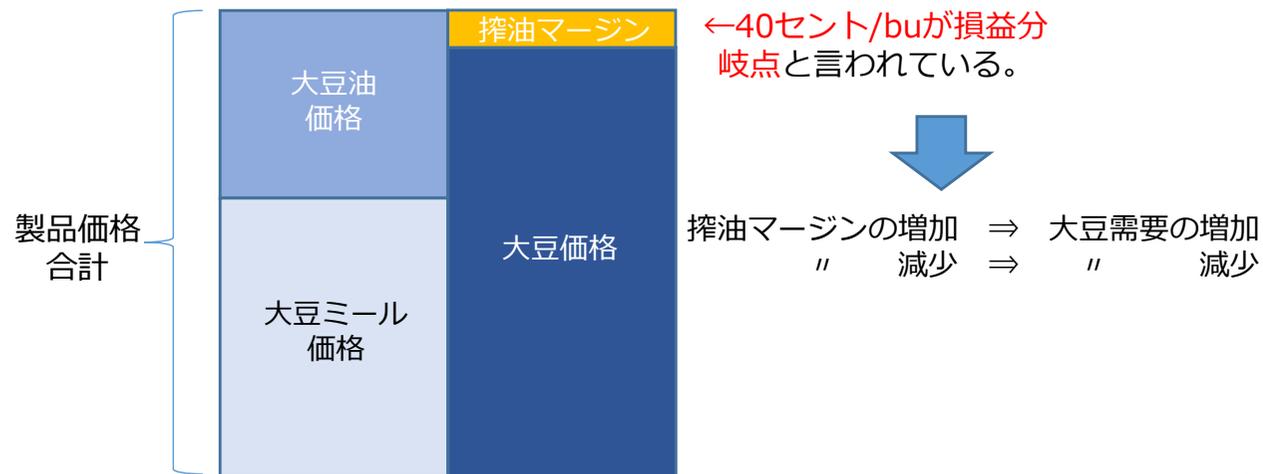
大豆圧搾時の生成物



←大豆を圧搾して得られる生成物の約75%は大豆ミール。約20%前後は大豆油。

資料：東京証券取引所の資料を基に農林水産省が作成

搾油マージンによる大豆需要増減

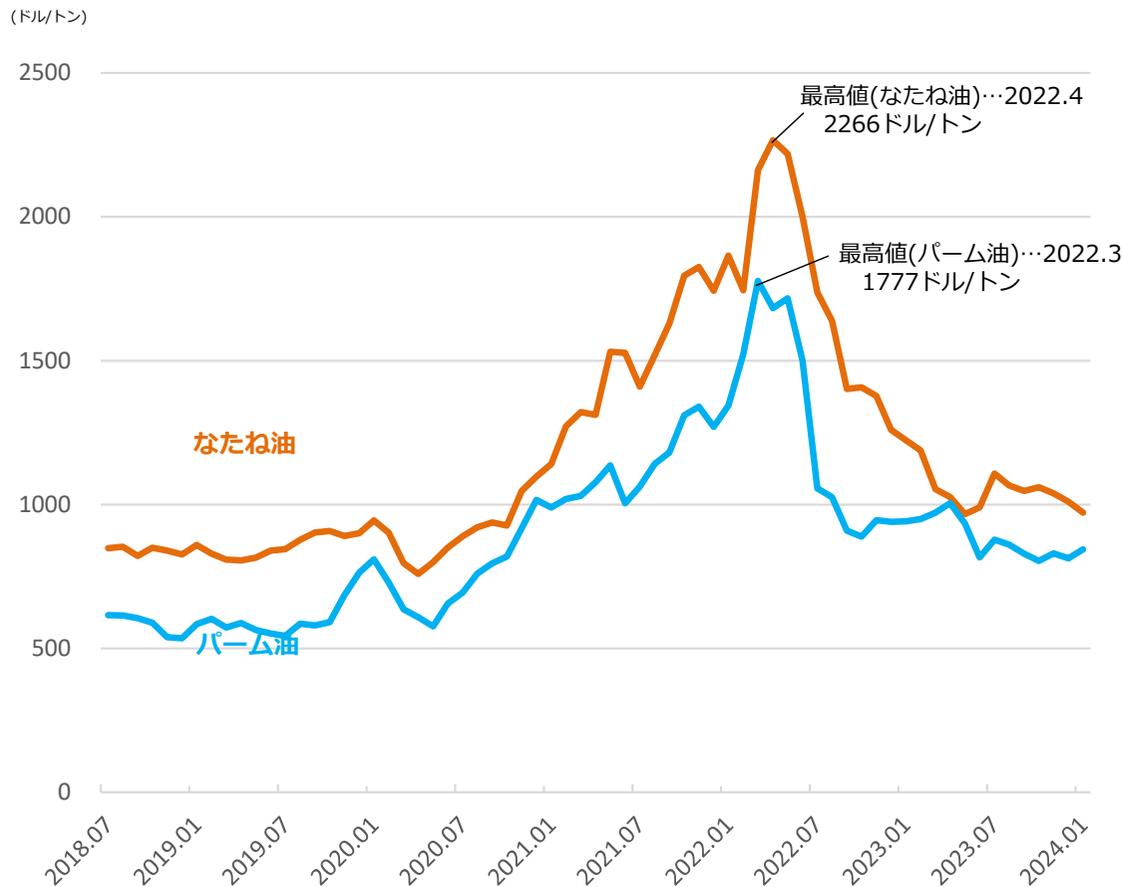


資料：東京証券取引所の資料を基に農林水産省が作成

国際価格（なたね、パーム）

- 油脂価格（なたね・パーム）については、世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加、ウクライナ情勢の緊迫化等の影響を受け変動。
- なたねについては、カナダが世界最大の輸出国であり、当該国の生産動向等の影響が大きい。2021年のカナダの記録的な不作時には、なたね油価格が大幅に上昇。足下では、カナダの生産回復等により価格は一定程度下落しつつある。
- パーム油については、インドネシア、マレーシアが二大生産国・輸出国であり、当該国の影響が大きい。近年は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴うマレーシアでの労働力不足、インドネシアの輸出規制等が価格に大きく影響を与えた。

なたね油、パーム油の国際価格推移



資料：World Bank Commodity Price Data (2024.3)より作成。2018年7月～2024年1月までの月次の価格。

インドネシアのパーム油輸出規制の動向

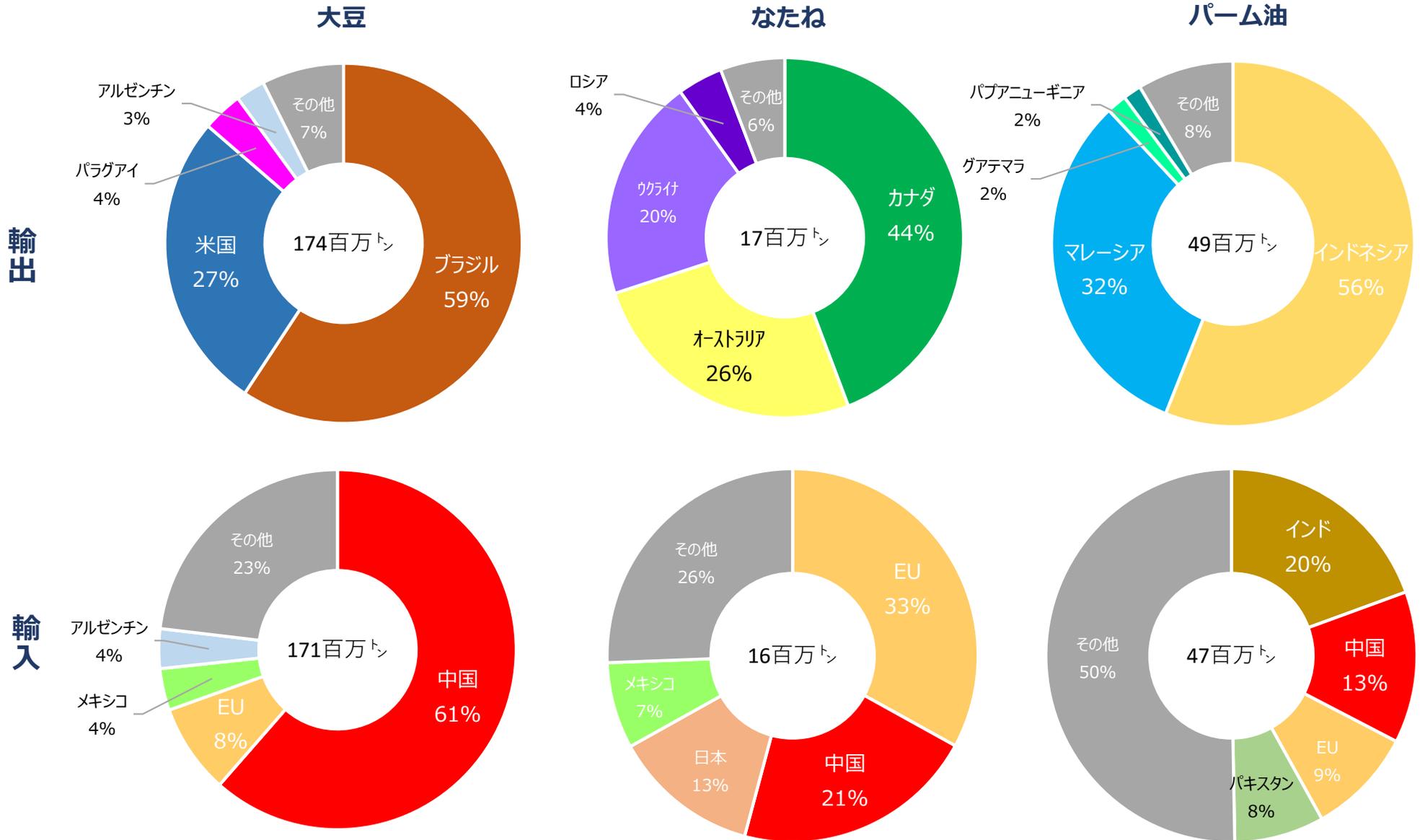
年月	主な動向
2022.1.24	商業大臣規程2022年第2号が施行され、パーム油生産者に対し、固定価格で輸出量の20%をインドネシア国内に供給することを義務付け。
2022.4.28	商業大臣規定2022年第22号を公布し、パーム油原油等について、 <u>4月28日から一時的に輸出を禁止</u> 。
2022.5.23	商業大臣規定2022年第30号を公布し、即日施行した。4月末より導入していたパーム油原油等の <u>国外への輸出禁止措置を解除</u> 。 一方、輸出再開の条件として、輸出業者に対し、 <u>海外への輸出量のうち一定量を国内に販売する義務を課した</u> 。

資料：JETROのリリースを基に農林水産省作成

主な油糧種子・植物油の輸出入シェア

- 大豆については、ブラジル、米国の2国に輸出国が偏っており、当該輸出国から主に中国等に輸出。
- なたねについては、世界最大の生産国のカナダが輸出量の4割を占めており、カナダからEU、中国、日本等に輸出。
- パーム油については、輸出国がインドネシアとマレーシアに偏っており、主に当該2カ国から消費国に輸出。

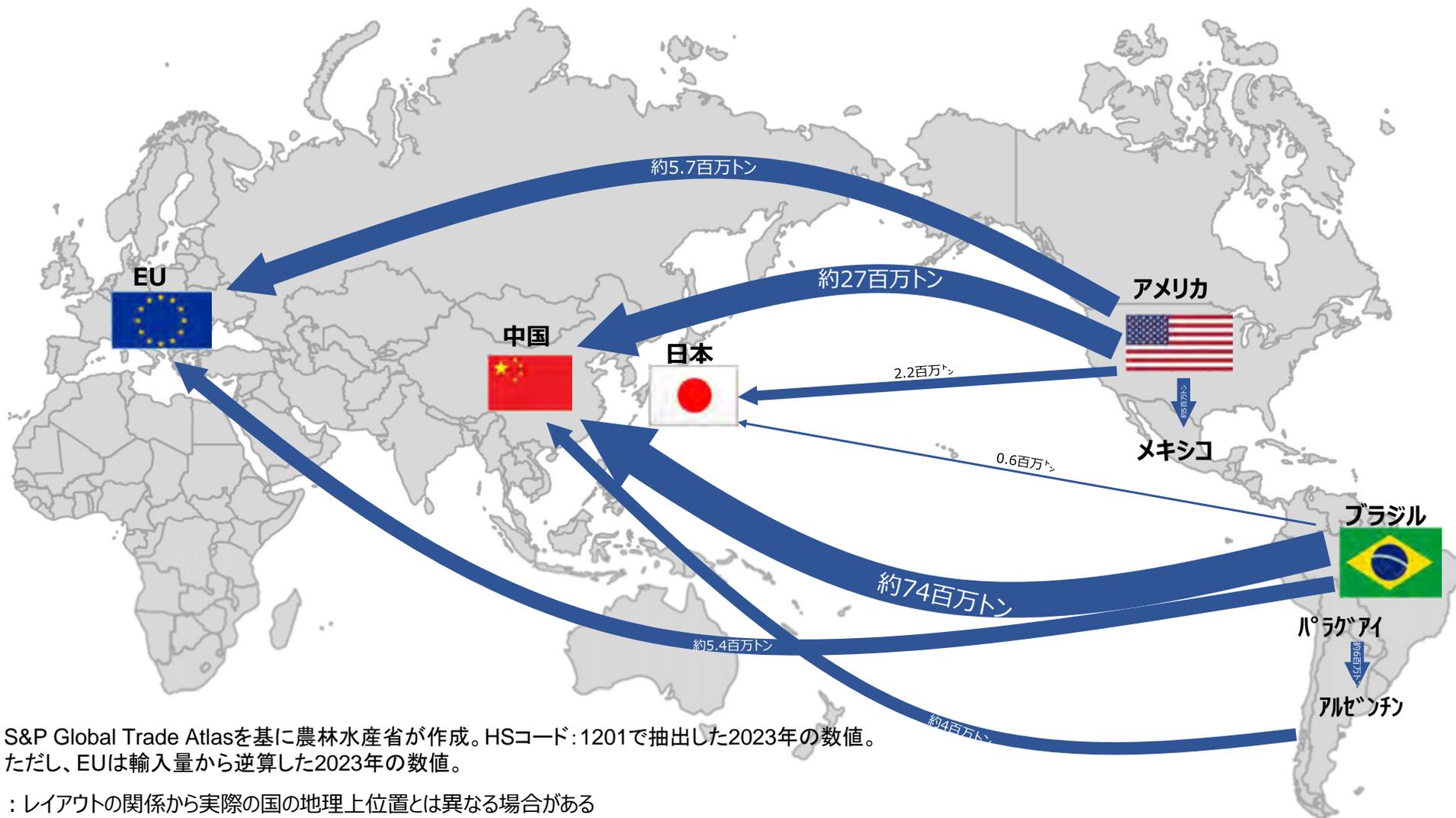
2023/2024 (出典: USDA)



資料: USDA (2024年3月時点)

大豆の貿易フロー（2023年）

○ 大豆の国際貿易については、2大生産国である、アメリカ、ブラジルを始めとしたアメリカ大陸から、主に中国やEUに輸出。

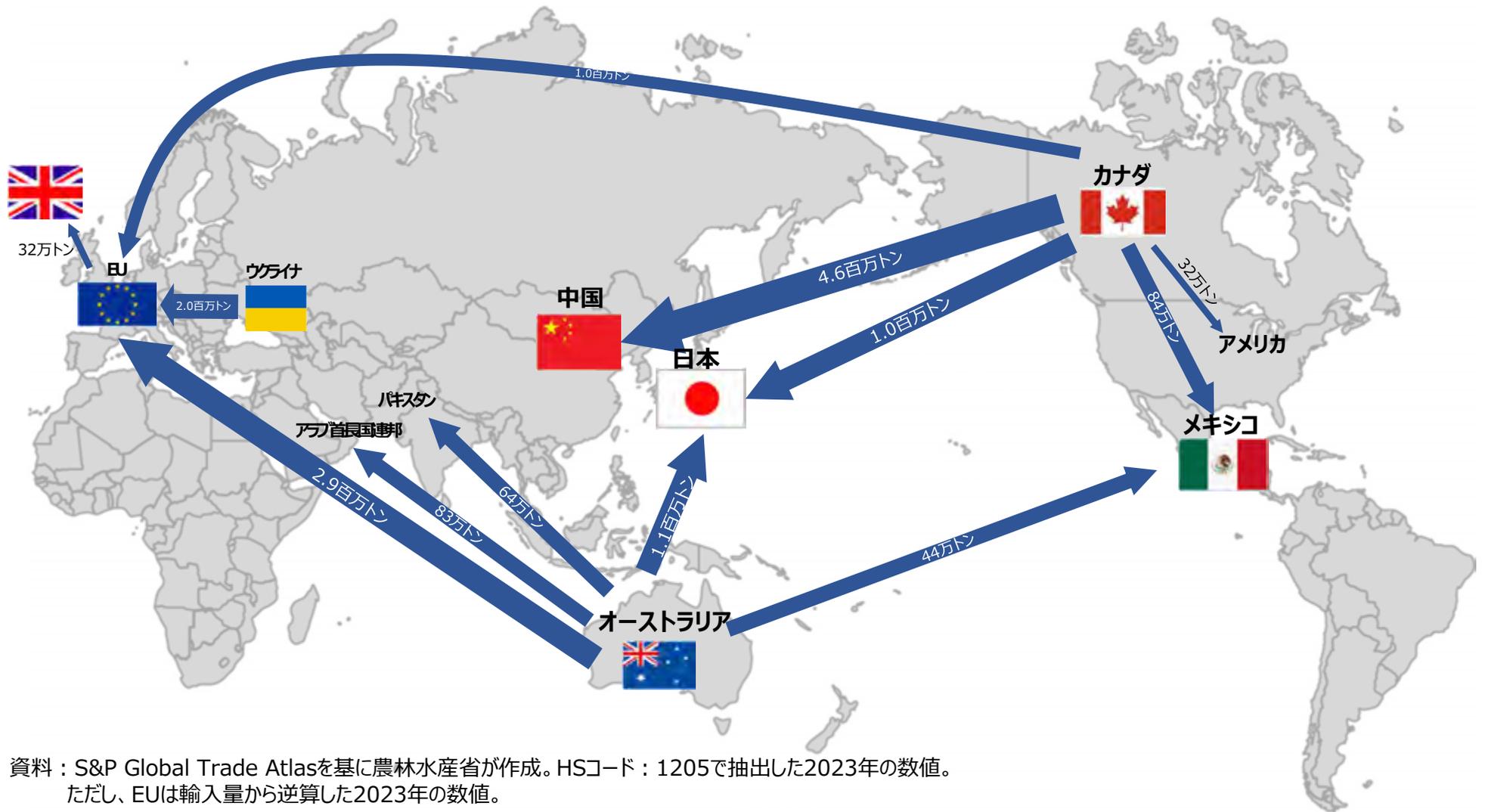


資料：S&P Global Trade Atlasを基に農林水産省が作成。HSコード：1201で抽出した2023年の数値。
ただし、EUは輸入量から逆算した2023年の数値。

- 注1：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある
- 注2：300万トン以上輸出している貿易フローを作図
- 注3：参考として日本のみ300万トン未満の場合も一部記載

なたねの貿易フロー（2023年）

○ なたねの国際貿易については、世界最大の輸出国であるカナダから主に中国、日本、EUに輸出。世界3番目の輸出国であるウクライナからは、主にEUに輸出。

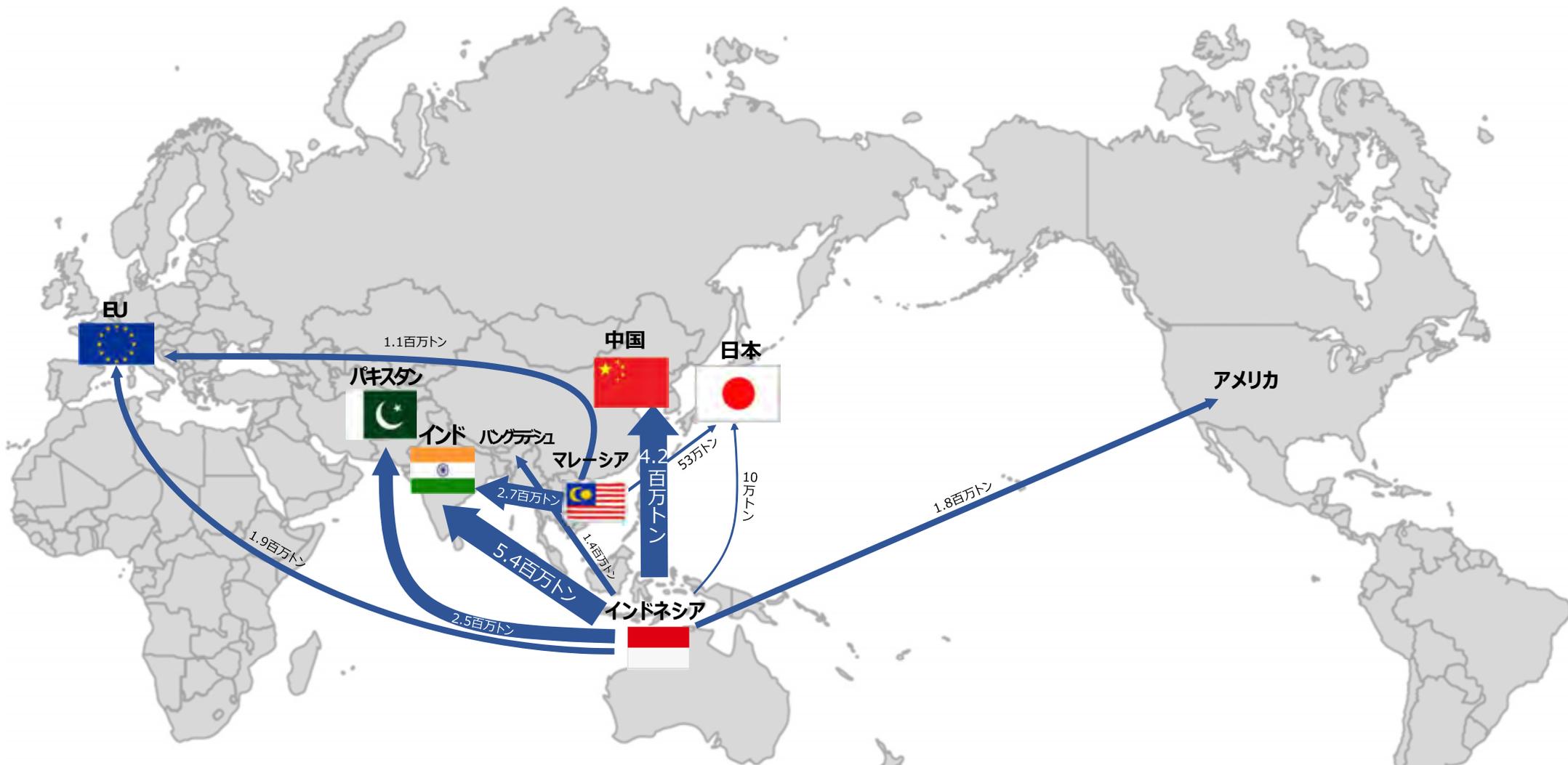


資料：S&P Global Trade Atlasを基に農林水産省が作成。HSコード：1205で抽出した2023年の数値。
ただし、EUは輸入量から逆算した2023年の数値。

- 注1：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある
- 注2：30万トン以上輸出している貿易フローを作図
- 注3：参考として日本のみ30万トン未満の場合も一部記載

パーム油の貿易フロー（2023年）

○ パーム油の国際貿易については、2大生産国であるインドネシア、マレーシアの2カ国から、主に中国、インド、EU等に輸出。



資料：S&P Global Trade Atlasを基に農林水産省が作成。HSコード：1511で抽出した2023年の数値。
ただし、EUは輸入量から逆算した数値（2023年の数値）。

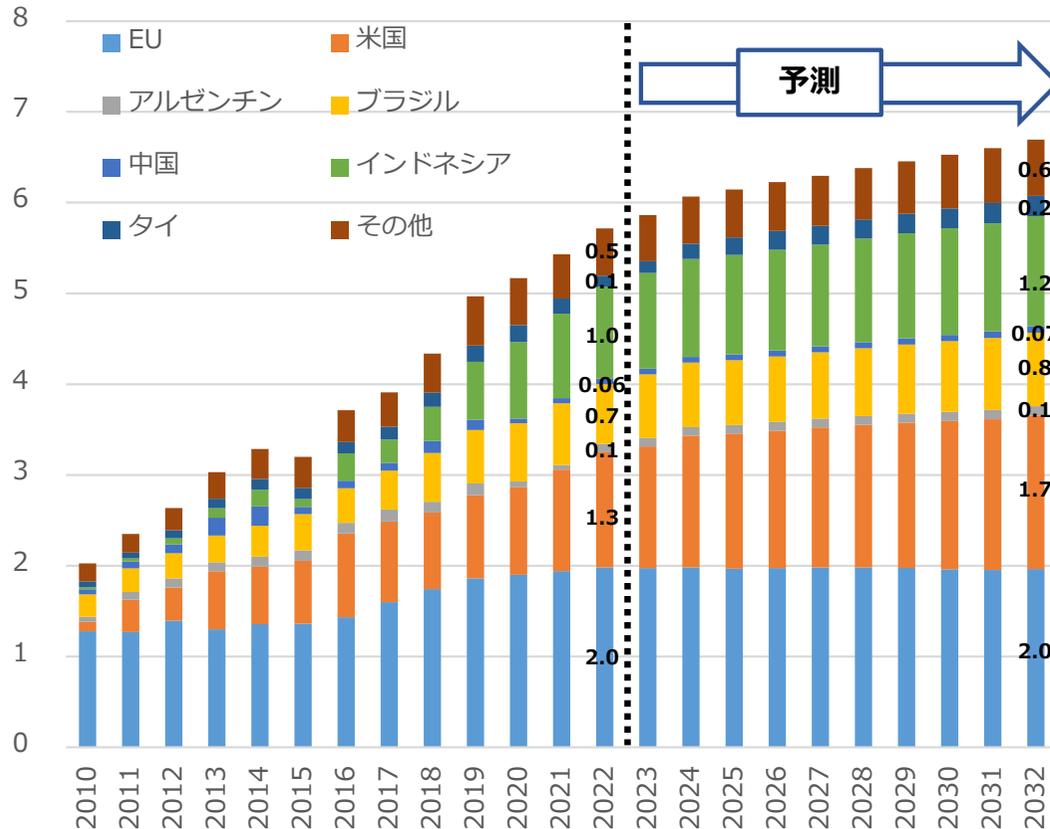
- 注1：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある
- 注2：100万トン以上輸出している貿易フローを作図
- 注3：参考として日本の100万トン未満の場合も一部記載

バイオ燃料への用途拡大

- 植物油の新しい利用用途として、バイオ燃料（ディーゼル）への利用が拡大しており、2022年の消費量は571.8億リットル、10年後の2032年には669.3億リットルの見込みとなっている。アジア諸国では利用拡大が進む一方、EU、アメリカといった先進国については、支援政策の縮小等により消費量の減少が予想。
- バイオディーゼル製造の原料となる主な油種は、パーム油、大豆油、菜種油で、食用に利用されて廃棄された油脂（廃食用油）の利用も行われている。

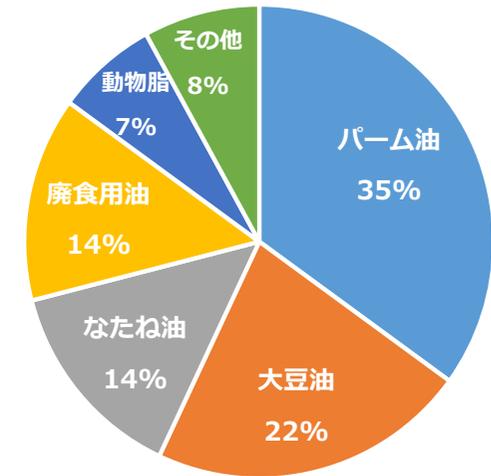
○世界のバイオディーゼル消費量の推移

(100億リットル)



資料：OECD/FAO (2022), “OECD-FAO Agricultural Outlook”, OECD Agriculture statistics (database) より農林水産省が作成

バイオディーゼル原料の割合 (2022)



資料：Oil Worldより農林水産省が作成

主要生産国のバイオディーゼル原料

国	主要な原料
EU	菜種油、パーム油、廃食用油
アメリカ	大豆油、廃食用油
ブラジル	大豆油
インドネシア	パーム油
アルゼンチン	大豆油
タイ	パーム油
中国	廃食用油

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC等）の公表資料、Oil World等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

(1) 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

(2) 農林水産関係機関の情報（ALICの情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

(3) その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<https://www.oecd.org/agriculture/>
- ・農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が2024年4月中旬までに発表した情報を引用しています。（最新年度2023/24年度です）

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注：同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

ロシアが占領しているウクライナのクリミアの生産量については、米国農務省はウクライナとして集計しています。

- 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

<p>連絡先 農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室 TEL : 03-6744-2368 (直通)</p>
--

「食料安全保障月報」に関するアンケート

いつも食料安全保障月報（以下、「月報」）を御愛読いただきありがとうございます。
今後のより良い月報の作成に生かすため、皆様の声を是非お聞かせください。

- 1 あなたの所属を教えてください。（選択式）
商社、食品・飼料メーカー、食品卸・小売業、調査会社、自治体、大学・研究機関、大
学生・高校生、その他
- 2 あなたの所属する会社・組織が所在する地域を教えてください。（選択式）
北海道、東北、関東（東京以外）、東京、中部、近畿、中国、四国、九州・沖縄、海外
その他
- 3 月報をどこで知りましたか。（選択式）
口コミ、以前から（海外食料需給レポート時代から）、検索エンジン、農水省 HP、
書籍、その他
- 4 月報を書籍で知った場合、その書名が分かれば教えてください。
- 5 月報で一番関心／参考にしている項目は何ですか。（複数選択可）
概要編（今月の主な動き（穀物等の国際価格の動向）、今月の注目情報、今月のコラム、
その他）
品目別需給編（小麦、とうもろこし、コメ、油糧種子（大豆））
特別分析トピック
- 6 今後重点的に取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
テーマ例：世界的な異常気象（干ばつ、洪水など）の穀物生産への影響
地域別の穀物需給動向（米国、南米、豪州、東南アジア等）
ウクライナ情勢の生産・貿易への影響
中国の需要・輸入動向
世界的な人口増加による食料需要・貿易への影響
中長期（10年先）、超長期（30年先）的な食料需給見通し
- 7 今後月報に期待することはありますか。（自由記載）

ご回答は以下 URL または右の QR コードよりアクセス願います。

https://www.contactus.maff.go.jp/j/form/kanbo/anpo/anpo_geppou_ankeeto.html

